

箕輪遺跡

調査第II集

昭和 56 年

箕輪町教育委員会

箕輪遺跡

調査第II集

昭和 56 年

箕輪町教育委員会

序

箕輪町教育委員会

教育長 樋口彦雄

箕輪遺跡がその姿の一部を現わしたのは、30年前の昭和26年伊那土地改良区が設立され、当時の伊那町以北の2町3ヶ村の地域にわたって、大規模な耕地整理事業が行なわれたことによる。当時の社会状勢は、現在程に遺跡に対する関心は比較的薄かったが、埋蔵文化財に心ある、三日町地区在住の小川守人氏と故小池修兵氏によって貴重な資料を保存することができた。

両氏は常に工事現場を巡回し、出土品を蒐集し整理保存し記録を残した。昭和49年箕輪町郷土博物館が建設され、現在博物館の考古歴史室に展示されている箕輪遺跡関係のすべての資料は、両氏の蒐集によるものである。

その時の規模は、天竜川より西、国道に至る広大な地域で、大清水・小清水・御室田・曾根田・城安寺・苦谷・馬場・久保下などの広範囲にわたっており、弥生、古墳、平安期を頂点とする、古代の水田遺跡であろうと推測されている。収集された遺物についてみると、祭祀に使用されたと思われる木製の人形、馬形、串などが出土し、更に舟田・田下駄・木製農耕具等も出土している。また水田の畔や水路に使用された木橋、矢板等総延長4kmにわたって数万本発見された。なお土器・石器・須恵器・陶器片など数多く出土しているが、縄文中期初頭、晚期に属する土器片、弥生中期、後期に属する壺、甕・土師器の高杯などがある。

さて今回の箕輪遺跡第1次発掘調査は道路改良事業に伴い行なったもので、箕輪町教育委員会としては上の林遺跡調査に続く調査である。その組織は丸山敏一郎調査団長、島田恵子調査主任、山崎勝彦調査員に柴学芸員と箕輪工業高等学校歴史クラブ員、伊那北高等学校歴研員及び地元の作業協力者によって進められた。

弥生時代の水田耕作の遺跡調査にふさわしく、最初から泥水処理も当然行なわなければならなかった。田下駄・木橋・用途不明の加工木片・陶器片などの出土があった。

今回の遺跡調査は箕輪遺跡全域からみれば、ほんの一部に過ぎず、昭和26年の記録から判断すれば、周辺程度の調査部分と思う。引き続き道路改良事業が進めばそれに伴う調査によって、遺跡の核心にふれるものと考えられる。今後の調査に期待する所が多い。

昭和57年3月20日

例　　言

1. 本書は、昭和56年7月26日～8月22日までにわたって発掘調査された、長野県上伊那郡箕輪町大字中箕輪11,834-2番地に所在する、箕輪遺跡の調査報告書である。
2. 本調査は、伊那建設事務所の委託を受けた箕輪町教育委員会が実施した。
3. 本調査は、丸山敵一郎を団長に、箕輪町郷土博物館学芸員柴登巳夫を発掘担当者とし、長野県考古学会員を調査員として、地元の方々および大学生の協力を得て実施した。
4. 本書に挿入した造構、遺物、図版等の作業分担は次の通りである。
造構実測図の整理・トレース——島田恵子、近藤尚義、
木製品・木橋の実測・トレース——五味純一、石器の実測・トレース——古屋公彦
土器の拓本・測面実測・トレース——山内志賀子、土器の実測・トレース——島田恵子
写真図版の作成——山内志賀子、島田恵子
5. 本書に掲載した造構の写真は、近藤尚義、山崎勝彦が撮影したものを使用した。尚、出土遺物の撮影は、征矢進氏に御協力いただいた。
6. 石器の石質鑑定は樋口彦雄氏（箕輪町教育長）にご教示いただいた。記して厚くお礼申し上げたい。
7. 本書の執筆は整理担当者が行ない、文末にそれぞれの文責を記した。
8. 本書の編集は、島田恵子が行ない、丸山敵一郎団長が校閲、監修した。
9. 本書の資料は、箕輪町郷土博物館に保管されている。

なお、本遺跡調査に関して県教育委員会関孝一、白田武正の両指導主事には適切なご指導をいただいた。ここに厚く御礼申し上げたい。

凡 例

1. 調査区ごとにトレンチを設定し、6区の区分がなされたため、T1区～T6区と略号で記してある。
2. 木柵列、木製品出土状態実測図及び各地区的層序断面図の縮尺は、 $\frac{1}{20}$ 、 $\frac{1}{40}$ とし各々の実測図に明記してある。
3. 杭実測図の縮尺は $\frac{1}{6}$ 、木製品実測図の縮尺は $\frac{1}{4}$ としたが、小型のものは $\frac{1}{3}$ ～ $\frac{1}{2}$ とした。また、石器、土器実測図の縮尺は $\frac{1}{3}$ とした。
4. 断面図の平面レベルは各地区ごとに統一してあるが、中には統一できなかったものもある。各図面に標高で記してある。
5. 図版中遺物の縮尺は、木製品 $\frac{1}{5}$ 、土器 $\frac{1}{3}$ 、石器 $\frac{1}{5}$ とした。特別な遺物は、その縮尺を図版中に明記してある。また、図版中の木製品、土器石器番号を簡略した。例えば第23図1は、23-1と表わす。
6. 土器実測図中の右側に示した点は、内面黒色を表わす。

本文目次

題　字	教育長　樋口　彦雄
序	教育長　樋口　彦雄
例　言	
凡　例	
本文目次	
付表目次	
挿図目次	
図版目次	
第1章 発掘調査の経緯	1
第1節 調査に至る動機	1
第2節 調査の概要	1
第3節 発掘調査日誌	4
第2章 遺跡の環境	6
第1節 地理的環境	6
第2節 考古学・歴史的環境	6
第3章 遺構と遺物	11
1. T 1 区	11
2. T 2 区	12
1) 木製品	12
2) 木櫛梳	16
3) 土器片	19
3. T 3 区	19
4. T 4 区	20
1) 木櫛列20・21グリッド	22
2) 木櫛列9・10グリッド	29
3) 土器片・その他	31
5. T 5 区	31
第4章 既出遺物	33
1. 石 器	33
まとめ	40

2. 土 器	41
1) 穴田地区	41
2) 大清水地区	42
3) 馬場地区	44
4) 曾根田地区	47
5) 御室田地区	50
3. 木製品・その他	54
1) 田下歛	54
2) 農耕具	55
3) 矢 板	56
4) 田 舟	57
5) 木製人形・木車	57
6) 木製椀	66
7) 土製品	67
8) 古 錢	67
第5章 考 察	69
第1節 調査のまとめ	69
1. 木柵列	69
2. 遺 物	70
3. 土器片	71
第2節 既出遺物	72
1. 木製品	72
イ) 農耕に関するもの	72
ロ) 祭祀、信仰に関するもの	73
ハ) 木柵杭・矢板	74
2. 食物残渣	75
3. 遺 構	76
引用参考文献	77
第6章 結 語	78

挿 図 目 次

第1図	箕輪遺跡周辺の地形と既出遺物出土地点	
第2図	箕輪遺跡第1次調査全体図	9
第3図	T 1 区地層断面図	11
第4図	T 2 区地層断面図	12
第5図	T 2 区の木製品出土状況実測図No. 1	13
第6図	" " " No. 2	14
第7図	T 2 区出土の田下駄実測図	15
第8図	T 2 区出土の木製品片実測図	16
第9図	T 2 区出土の木柵実測図	17
第10図	T 2 区出土の杭実測図	18
第11図	T 3 区出土木片実測図	19
第12図	T 3 区出土の土器拓影	20
第13図	T 4 区地層断面図	20
第14図	T 4 区20・21グリッド出土木柵列及び木片全体実測図	21
第15図	T 4 区20・21グリッド出土木柵列実測図	23
第16図	T 4 区20・21グリッド出土の木柵杭実測図No. 1	25
第17図	" " " No. 2	26
第18図	T 4 区9・10グリッド出土木柵列実測図	27
第19図	T 4 区9・10グリッド出土の木柵杭実測図No. 1	29
第20図	" " " No. 2	30
第21図	杭刃痕実測図	31
第22図	T 5 区地層断面図	32
第23図	穴田地区出土の石器No. 1	34
第24図	" " " No. 2	35
第25図	大清水地区出土の石器	36
第26図	馬場地区出土の石器	36
第27図	橋詰・久保下出土の石器	37
第28図	御室田地区出土の石器	38
第29図	穴田地区出土の土器拓影	41
第30図	大清水地区出土の土器拓影	42

第31図	大清水地区出土の土器実測図	43
第32図	馬場地区出土の土器拓影	44
第33図	馬場地区出土の弥生式土器実測図	45
第34図	馬場地区出土の須恵・土師器実測図	45
第35図	曾根田地区出土の土器拓影	47
第36図	曾根田地区出土の土器実測図	48
第37図	御室田地区出土の土器拓影	49
第38図	御室田地区出土の弥生式土器実測図	50
第39図	御室田地区出土の須恵・土師器実測図	51
第40図	既出遺物の田下駄実測図No.1	55
第41図	" " No.2	56
第42図	既出遺物の鐵・鍼実測図	57
第43図	既出遺物の矢板実測図	58
第44図	既出遺物の田舟実測図	59
第45図	既出遺物の人形実測図No.1	61
第46図	" " No.2	61
第47図	既出遺物の木串実測図No.1	62
第48図	" " No.2	63
第49図	" " No.3	64
第50図	" " No.4	64
第51図	既出遺物の木製梳実測図	66
第52図	既出遺物の土製品実測図	67
第53図	既出遺物の古錢拓影	68

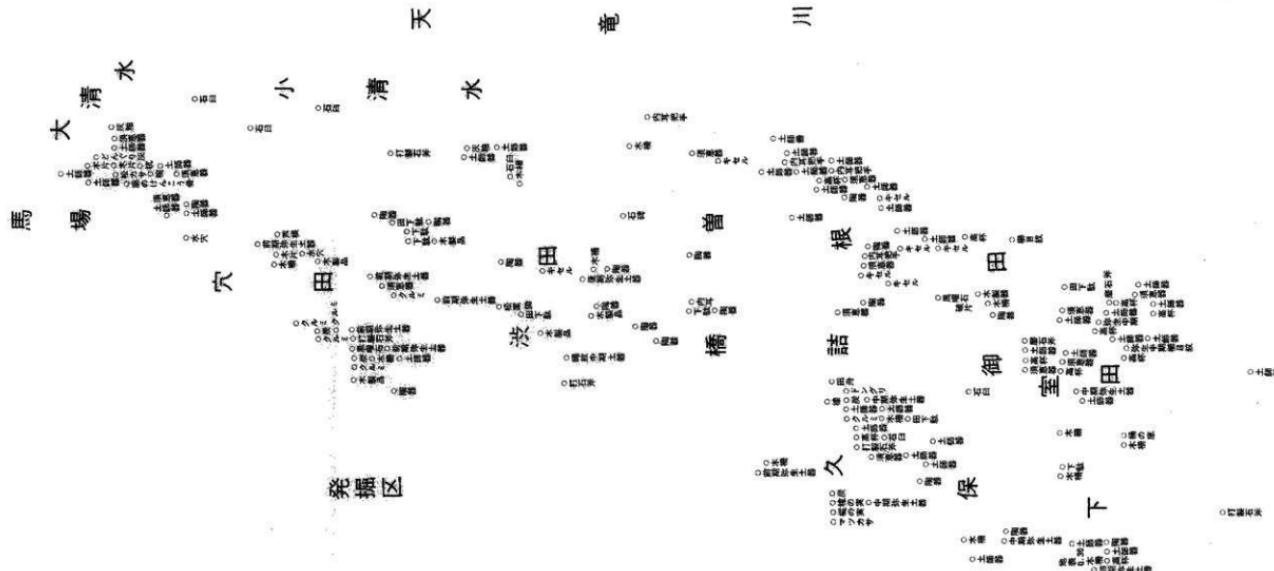
付 表 目 次

第1表	出土石器一覧表	39
第2表	大清水地区出土土器一覧表	44
第3表	馬場地区出土土器一覧表	46
第4表	曾根田地区出土土器一覧表	49
第5表	御室田地区出土弥生式土器一覧表	52
第6表	御室田地区出土須恵・土師器一覧表	53

図 版 目 次

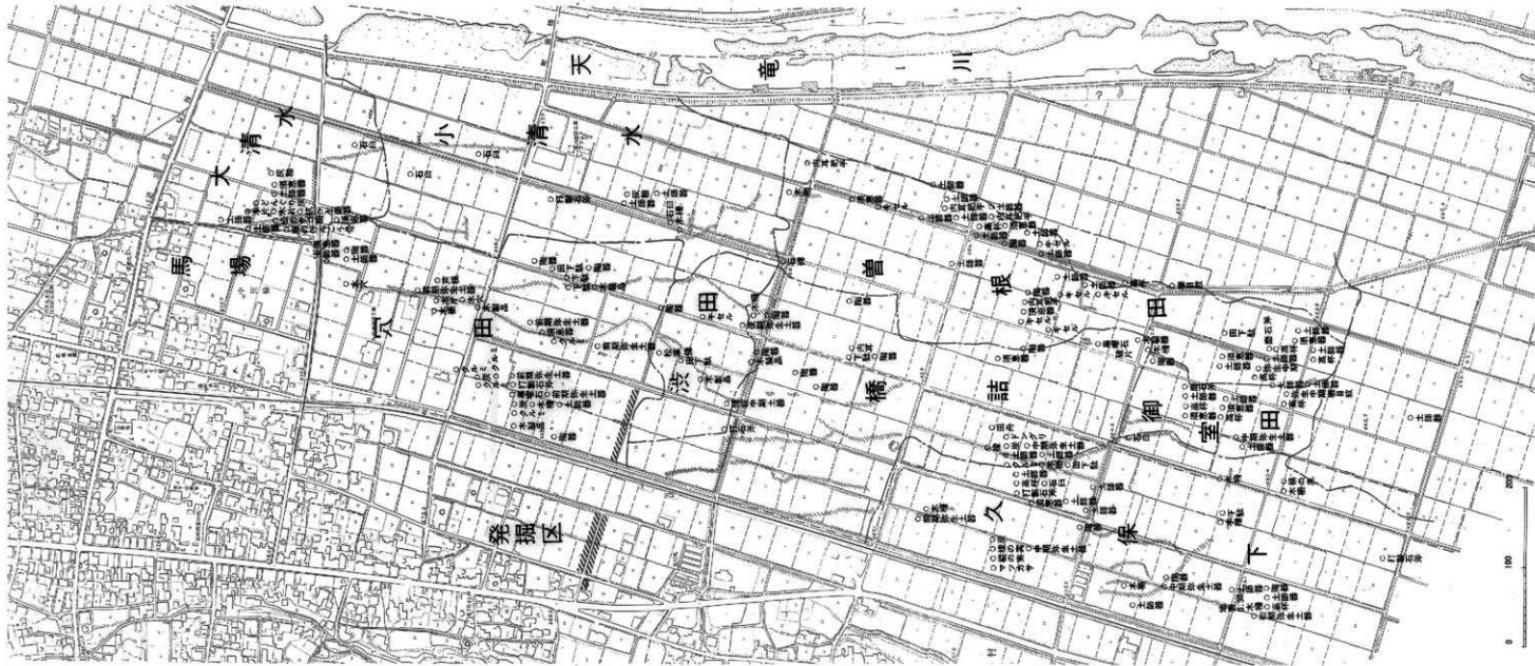
- 図版1 1. 箕輪遺跡調査区遠景
- 図版2 1. T 4 区出土木柵列全景 (20・21グリッド)
- 図版3 1. T 4 区出土木柵列の杭出土状態 (20・21グリッド)
- 図版4 1. " " " (20・21グリッド)
- 図版5 1. " " " (20・21グリッド)
- 図版6 1. T 4 区出土木柵列の杭 (20・21グリッド)
- 図版7 1. " " " (20・21グリッド)
- 図版8 1. T 4 区出土の木柵列 (9・10グリッド)
- 図版9 1. T 4 区出土木柵列の杭 (9・10グリッド)
- 図版10 1. T 4 区出土木柵列の杭 (9・10グリッド) 2. T 2 区出土の杭
- 図版11 1. T 2 区出土の田下駄出土状態
- 図版12 1. T 2 区出土の杭と土師器片出土状態 2. T 2 区出土の田下駄出土状態
- 図版13 1. T 2 区出土の田下駄
- 図版14 1. T 2 区の杭出土状態
- 図版15 1. T 2 区の杭出土状態
- 図版16 1. T 2 区の木片出土状態
- 図版17 1. T 5 区の層序 2. T 3 区の木片出土状態
- 図版18 1. T 5 区の掘り下げ状態
- 図版19 1. T 5 区の掘り下げ状態
- 図版20 1. 杭の刃痕状態
- 図版21 1. 杭の刃痕状態
- 図版22 1. 発掘調査スナップ
- 図版23 1. 発掘調査スナップ
- 図版24 1. 穴田地区出土の既出石器
- 図版25 1. 馬場地区出土の既出石器 2. 大清水地区出土の既出石器 3. 既出土製品
- 図版26 1. 久保下・橋詰他出土の既出石器 2. 御室田地区出土の既出石器
- 図版27 1. 馬場地区出土の既出土器片 2. 穴田地区出土の既出土器片
3. 大清水地区出土の既出土器片
- 図版28 1. 馬場地区出土の既出弥生式土器 2. 大清水地区出土の既出土器
- 図版29 1. 馬場地区出土の既出須恵・土師器

- 図版30 1. 曽根田地区出土の既出土器片 2. 御室田地区出土の既出土器片
- 図版31 1. 大清水・鶴田排水路出土の既出木製椀 2. 曽根田地区出土の既出土器
- 図版32 1. 御室田地区出土の既出弥生式土器 2. 御室田地区出土の既出須恵・土師器
- 図版33 1. 御室田地区出土の既出土師器
- 図版34 1. 既出田下駄
- 図版35 1. 既出矢板・鐵・鍔
- 図版36 1. 既出田舟
- 図版37 1. 既出人形
- 図版38 1. 既出串状木製品
- 図版39 1. 既出古錢



新編諸國志の地圖と日本地圖三十卷

図1 国営美術館周辺の地形と既出地出土地点





第1章 発掘調査の経緯

第1節 調査に至る動機

本地区は、天竜川面の沖積地に所在し、当町から南箕輪村にかかる広大な水田地帯である。昭和26年より行なわれた土地改良事業により区画が整然としている。本地区一帯が一大遺跡地帯として注目されるようになったのは、この地域は、前述のように土地改良事業が行なわれた際、偶発的に各時代の遺物が多量に出土したことによる。特に本県には、数少ない低湿遺跡としてクローズアップされ、学界の注目をあび、僅めて重要な遺跡として認められるようになった。しかし、今まで、学問的な調査がなされなかつたため、時代的な位置づけや遺構の性格は推定にとどまっている。

昭和48年より始まった国道バイパス工事が遺跡を通過するため、昭和55年度においては、工事が予想される部分の道路敷の一部を確認調査し土層状況、遺物の包含状況を確認調査した。その結果、長さ5m、巾70cmの木柵列が発見された。これに共伴して、小さな土器類破片（土師器片・鉢・甕・須恵器・楕・中世の内耳土器破片等） 数片が出土し、遺跡を確認の上、県教育委員会合同で現地を視察し、昭和56年度工事が予想される部分の取り付け道路を本発掘調査することとなり、日本考古学協会会員丸山敏一郎先生を調査団長とする調査団を組織し、7月下旬より発掘調査を実施する運びとなった。

第2節 調査の概要

- 遺跡名 箕輪遺跡
- 所在地 長野県上伊那郡箕輪町大字中箕輪11834-2番地他
- 発掘期間 昭和56年7月26日～8月22日
- 調査委託者 伊那建設事務所長 河野 賴尚
- 調査受託者 箕輪町教育委員会
- 調査会・調査団の構成は下記の通りである。

箕輪町遺跡調査会

- | | | |
|----|-------|-----------------|
| 会長 | 市川 勝三 | 箕輪町誌編纂専門委員 |
| 理事 | 荻原 貞利 | 箕輪町教育委員会社会教育指導員 |

理事 立花 久木 笠輪町教育委員会社会教育指導員
〃 大槻 剛 笠輪町町誌編纂専門委員

調査団

団長 丸山 敏一郎 日本考古学协会会员（長野県伊那弥生ヶ丘高等学校教諭）
担当者 榎 登巳夫 笠輪町郷土博物館学芸員
主任 島田 恵子 長野県考古学会員
調査員 山崎 勝彦
〃 中村 哲二 武藏大学学生
〃 馬場 保之 東北大学学生
補助調査員 近藤 尚義 立正大学学生（長野県考古学会員）
〃 五味 純一 日本工業大学学生
作業協力者 守屋 道明・野沢 誠一・三宅 昭夫・唐沢 剛俊・井内 裕司
矢島 宜夫・唐沢 直司・山口 勝博・小田切文雄・赤羽 孝司
河手 郁哉・渕井 誠弥・唐沢 浩志・堀内 淳子・竹入 美貴
浦野さつき・戸田みさよ・木下絵理香・伊那北高等学校歴史研究部
古屋 公彦・森林 正則・西沢 啓・小笠原勝己（以上笠輪工業高等学校
歴史研究クラブ員）
地元協力者 唐沢 清人・後藤 武雄・小林三喜男・清水 宗一・向山 千春
山内 志賀子（辰野町）

参与 馬場 寛一 笠輪町教育委員会教育委員長
原 茂人 〃 教育委員長職務代理
戸田 宗十 〃 教育委員
桑沢 良平 〃 〃
荻原 貞利 笠輪町文化財保護審議会委員長
藤田 寛人 〃 〃 副委員長
市川 脩三 笠輪町文化財保護審議会委員
矢沢 喬治 〃
増口 貞幸 〃
小林 健男 〃
小林正之進 〃
山崎 義芳 〃

唐沢 忠孝 箕輪町文化財保護審議会委員

上田 晴生 "

●調査に関する事務局の構成組織は下記の通りである。

橋口 彦雄 箕輪町教育委員会教育長

唐沢 行明 " 教育課長

太田 文陳 " 社会教育係長

柴 登巳夫 箕輪町郷土博物館学芸員

竹入 洋子 " "

(文責 事務局 竹入 洋子)

第3節 発掘調査日誌

○7月26日 (日) 晴

本日より調査を開始する。

先ず、テントの設営、器材の搬入及び調査区の草刈り、グリッド設定等を分担して行なう。午後より掘り下げに入る。調査区は道路を中心南北両側20mの範囲であるが、道路、土堤等で実際の調査面積は南北側各6m巾となる。

北側テントの横をT1区として掘り下げに入ったが、水田の耕作土を取り除くと水が湧いてきて作業が困難となる。

○7月27日 (月) 晴

調査区全体図の実測及びT1区の掘り下げ続行。人員が増えてきたので本日よりT2区の掘り下げを開始する。早くもT2区グリッド1より田下駄が出土する。表土から80cmの深さであり、ヨシ等の未分解泥炭層中からである。調査団は活気づく。

○7月28日 (火) 晴

引き続きT2区の掘り下げ続行。13・14グリッドから木片が出土する。表土より25cmと浅い。T1区は本日で掘り下げ終了とする。

○7月29日 (水) 晴

T2区での木片の出土は、1・2グリッド及び13・14グリッドに集中したため、その周囲のグリッド拡張に入る。特に1・2グリッドは木片出土地点が深く、ぬかるみに足をとられ作業が大変である。

○7月30日 (木) 晴

T2区1・2・13・14グリッドの拡張続行。

13・14グリッドより土師高台付近の高台部分、軒の把手部片が出土する。また、13・14グリッドの木杭の掘り下げを行なったが、杭が丸く、過去において大量に出土した木柵とは異なるため、13・14グリッド出土の木片は判出した土器片の時代に関わるものとおもわれる。本日は伊那北歴史研究部の応援があり、T1区の地層断面図の実測準備およびT3区のグリッド設定を行ない掘り下げに入りもらう。

○7月31日 (金) 晴

T2区1・2・13・14グリッド出土の木製品及び木片、木柵の写真撮影を行なった後実測に入り、出土品の取り上げを行なう。本日でT2区の調査を終了する。

○8月1日、2日 作業休み

○8月3日 (月) 晴

T3区の調査に入る。耕作土を取り除いた部分から水が湧き出てくるので作業は困難である。この地点は全面に木片が散在して出土する。表土より30~40cmの深さからである。

○8月4日 (火) 晴

朝、現場に着くともう水びたしである。連日一番に水のかい出し作業を行なってから掘り下げを続行しなければならない。ポンプもフル回転である。

本年度調査区に元地主が稻を植えてしまった田園が2枚あるため、調査が出来なくなってしまい、急遽、来年度調査の地区へ移ることにしてグリッド設定を行なう。T4区とす

る。

○8月5日 (水) 晴

T3区の実測に入る。T4区の掘り下げを続行。グリッド9・10より木柵列が出土する。

○8月6日 (木) 晴

T4区の掘り下げ続行。相変わらず水が漏るあとから湧き出てくるので苦悶する。木柵列出土グリッドを拡張。

○8月7日 (木) 晴

9・10グリッドの木柵列は調査区外まで延びている模様。かなりぎっしりと柵が連なっている。また、20・21グリッドより木柵列が姿を表す。

○8月8日 (金) くもり後雨

木柵列を中心に掘り下げを続行。午後より雨になり作業は休みとする。

○8月9日 (土)

休 み

○8月10日 (日) 晴

20・21グリッドの木柵列掘り下げを完了し写真撮影を行なった後、実測に入る。

9・10グリッドは掘り下げ続行。ぬかるみから足がぬけなくなったり、水びたしで作業困難であり、毎日が泥と水との闘いである。

○8月11日 (月) 晴

20・21グリッドは実測を終了し柵を取り上げる。

9・10グリッドの木柵列は実測に入る。

○8月12日 (火) くもり後雨

雨のため作業中止

○8月13日 (水) 晴

9・10グリッド木柵列の実測を終了し、木柵を取り上げT4区の調査を総て終了する。

○8月14日～18日 お盆休み

○8月19日 (火) 雨のち晴

午前中雨のため博物館で作業。「美輪遺跡ニュース」第3号を発行。

午後より、T5区の掘り下げに入る。畠の作物が残っていて16グリッド(2m×2m)だけの調査となる。耕作土中より土師の甕、坏小片、黒曜石片等が出土。また、耕作土下部よりボロボロになった木片の出土がみられた。

○8月20日 (水) 晴

昨日に引き続きT5区の掘り下げ続行。また、T6区の掘り下げに入る。

○8月21日 (木) 晴

昨日よりまた泥と水との闘いとなる。12グリッドより暗渠排水のため、径2m程の木材が出土。同じく15・16グリッドからも出土し、調査区全面が攪乱されている。

T6区も終了となる。

○8月22日 (金)

T5区の地層断面図を作成し、テント、器材の撤去を行ない調査を終了とする。

○8月23日～9月30日 木柵杭洗浄、整理

○1月5日～3月31日 木柵杭、既出遺物の実測・トレース、図面の整理・トレース。

写真図版の作成、拓本

○3月20日～4月15日 原稿執筆

○4月16日～4月30日 原稿清書、総編集。

(島田 恵子)

第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

箕輪遺跡は箕輪町のはば中央を南に流れる天竜川の西岸から、国道153号線に至る間と、東よりこの天竜川に流入する帶無川より南の100ヘクタールに及ぶ水田地帯である。

西は段丘上に天竜礫層が山麓までゆるやかな傾斜で続きここには耕地整理をしたいわゆる西天竜水田地帯が広がっている。天竜川の東岸は少しの水田をはさんで花崗岩質の山麓となる。ここはすべて天竜川による沖積層である。

箕輪町では昭和42年より国土調査法に基づく土地分類調査を行った。この主目的は、国土の実態を把握して土地利用の可能性を明らかにするためであったが、それによれば殆どが砂質土壤で下層には砂礫が多いが、天竜川の河川敷であったと言われたところには、葦の根等が、圧縮された状態、又は泥炭に似た状態で埋没されていることを発見している。なお町内全域を4項にまとめてあるが、箕輪遺跡の属する天竜統については、天竜川の氾濫により運搬された土壤で、有機質を含んだ細礫が20cm~40cm堆積しているとの報告がある。なおそれを、

第一層 0cm~16cm 黒褐色の砂壤土で膜状の班鉄に比較的富む 密度中 ねばり中

第二層 16cm~20cm 黒褐色の埴土で沈積した班鉄を含む 密度密 ねばり中

第三層 20cm~47cm 一層と同じ

第四層 47cm以下 黒褐色の埴土で班鉄はなし 密度密 ねばり弱
のようにまとめてある。

これは農業振興を目的とした植物に関する土壌調査で、埋蔵文化財の在る深さにまでは達しない。いわば表土に関する報告であるが、箕輪遺跡の現状の自然環境を示すものとして参考になる。

(樋口 彦雄)

第2節 考古学・歴史的環境

伊那谷の北部に位置する箕輪町は、中央部を天竜川が貫流している。この天竜川に流入する支流により川は大小の曲線を描きながら流下している。本遺跡は天竜川と平行して走る飯田線の木下駅一帯から南箕輪村北殿に亘る総面積100ヘクタール余に及ぶ広範囲の地域である。一

帶は木下の北を東流する帶無川がある時期に激しく活動して天竜川東に押したため、段丘下から天竜川との間に現在のような平らな地形が形成されたものと考える。しかも天竜川の形成した右岸の段丘と現流路の中間に横たわる本遺跡は、帶無川とあって西方から東流した小河川によって扇状地の地形を形成しているため、一般に段丘から水辺にかけて緩傾斜をなし、沼地的土層の中に砂礫層を包含している。このことは遺跡一帯の地層地質をかなり複雑にし、このような自然環境はこの地域に生活の基礎をもった人々に大きく影響を与えたことであろう。又昭和27年前後に実施された土地改良事業以前は、いたるところに湧水池や沼地が存在し、この地域が低湿性であったことを物語っている。なお段丘の付近は標高700m、遺跡西端付近は670mの等高線上にあり、天竜川の沿辺はさらにこれより数メートル低位にある。したがってこの地域一帯がいつ頃から人々の生活可能な場所となっていたかということは、発見された遺物によって決定されねばならない問題であるとともに、背後の高い段丘地帯と天竜川を前面に控えたこの地帯は、湿性の多い地域ではあったが、古代人の生活にとっては、その食生活をある程度充しうる条件を備えていたものと解さなくてはならない。ことに水田耕作を生業とする段階に至っては、湿性の多いことがかえって良好な生活範囲となったものといわざるをえない。多くの低湿地遺跡がほとんど単純な一時期の生活に終っているのに対して本遺跡は長期間にわたって遺物を残していることは、その生活期間の永続性を思わせ、その条件にかなっていたことを物語っている。

町内の遺跡を立地する条件により分類すると次の4地区に分けることができる。

第1群 荏ヶ岳山塊の山麓付近に立地する遺跡

第2群 天竜川西岸の段丘上に並ぶ遺跡

第3群 天竜川東岸の段丘上及び扇状地に立地する遺跡

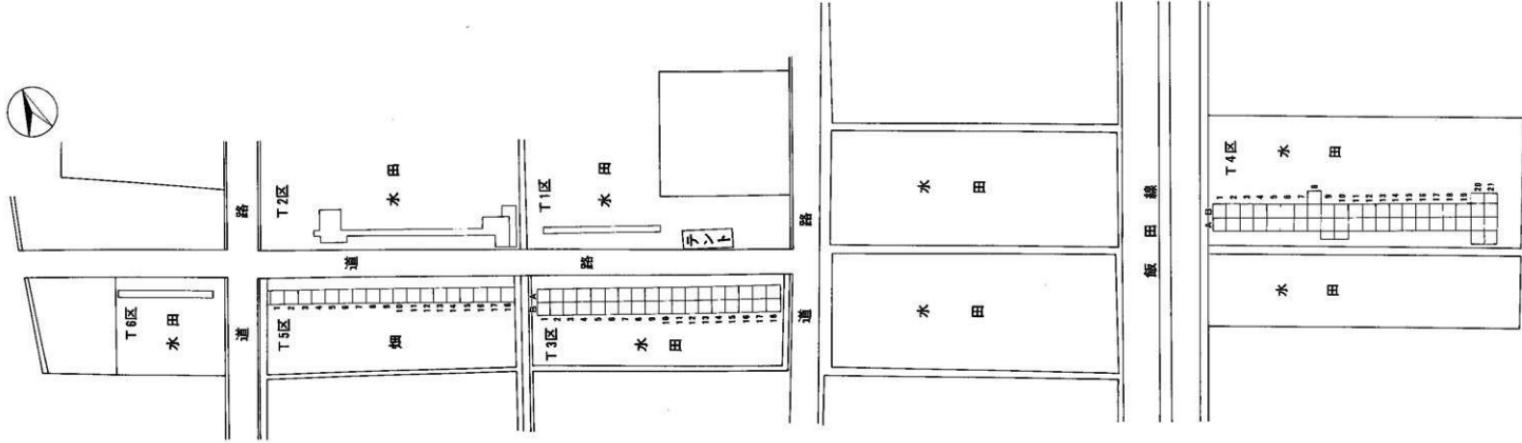
第4群 低位段丘（沖積段丘）の遺跡

箕輪遺跡は第4群の遺跡であり、4群そのものが、箕輪遺跡なのである。前述のごとくこの箕輪遺跡が、第2、3群の東西段丘上の遺跡と深い関係を持ちながら経過したことは当然考えなければならない。段丘上に居住した人々が低湿地を何かの利用で生活範囲の一部に加えたことを意味するのである。まず第2群における上の林、北城、南城遺跡に見る繩文時代中期から続く遺跡は箕輪遺跡出土の中期、晩期土器類と関係を持つものと考えられ、特に弥生時代に入ってからの低湿地帯を利用した集落は、西側段丘上に位置していたことと思われる。箕輪遺跡を眼下に見る段丘上には、上の林、北城、南城、猿樂と弥生時代の大きな集落跡が調査されている。南箕輪村に入ても同じく天伯遺跡など段丘上には跡切れることなく並んでいる。それらの遺跡のはほとんどが弥生時代から引き続いて古墳、奈良、平安時代の集落を残し、段丘上尖端部が居住性に富んでいたことを物語っている。これは永く低湿地帯を利用した生活が続いたことの一つの証左としても考えられる。

天竜西側段丘に位置する遺跡として、その壮大な規模を示す松島王墓古墳がある。6世紀後半の築造と推測されるこの大古墳を見る時、これを造ることが可能な絶大な権力と、その経済力は何であったのだろうか。そうする時、箕輪遺跡一帯から生産される大量の米は、経済的裏付けの最も大きな要素とも考えられる。又、ここは中近世に至っても多くの係わりをもつてゐる。その一つとして、藤沢行親が建武年間に箕輪を領して赴任に際し、福与城を選んだのは、その天険もさることながら、眼下に見る穀倉地帯を戦力資源としての理由があったと思われる。田中城を水田地帯の真中に築いたのも同様な考がそこにあったものと考えられる。武田信玄が天文十二年に下伊那出兵の際に射山社に土地を寄進したのはこの地の住民と懐柔してその産米を得る理由からであったろうし、天正十一年木曾義昌が三日町、福与の両神社に土地を寄進したのも武田氏同様の考え方からであったと思われる。

箕輪遺跡の東端、天竜川の西岸地域には、慶長十七年（1612）に小笠原氏が木下の上の段付近に陣屋を移すまでは三日町に村落があり、市場があったと伝えられる。現在の字町田城安寺、高坂田、古町等の地名を残しているところである。慶長十七年夏、天竜川大洪水により、三日町村は大半流失し、住民は現在の地に引き移り、村跡はほとんど水田と化した。この遺跡内の水田耕作者は三日町、木下、久保、塩ノ井、殿村の人々によってなされている。これ等箕輪遺跡を取り巻く歴史環境は、箕輪の歴史を語る時必ず係わりをもち、これを除いては考えることはできない。箕輪遺跡を中心とした一連の歴史こそ箕輪史の集約であろう。

（柴 登巳夫）

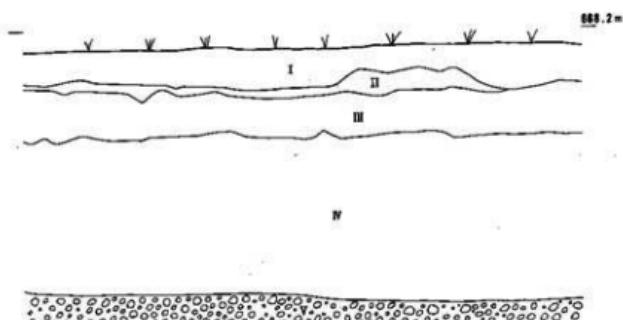


第2図 莢輪造跡第1次調査全体図 (1 : 600)

第3章 遺構と遺物

1. T 1 区

本地区は、第3回地層断面図に示した5層によって形成される。III層を取り除いた下部より水が湧き出し、掘り下げた部分はまたたく間に水溜りと化する。本地区からは、グリッド西端のⅢ層上部より、土師壺口縁部小片が一点出土したのみであり、遺構の存在は認められなかつた。層序は以下のようになる。



第3図 T 1 区地層断面図 (1:40)

I層（水田耕作土）

II層（灰黒色土層） 植物の根を含み、粘性小

III層（黒褐色未分解泥炭層） かなりの量のアシ、その他の腐植物を多量に混入

IV層（黒色未分解泥炭層） アシ、他の腐植物を混入し粘性強

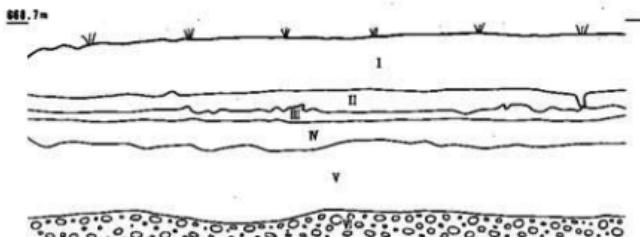
V層（砂疊層）

(IV層・V層はボーリングステッキによって確認した部分もある。)

2. T 2 区

本地区は、1～14までグリッドを設け掘り下げを行なった。その結果、東端の1・2グリッドと西端の13・14グリッドに集中して、木製品、木櫛杭等の出土がみられた。

先ず層序であるが、東端の1・2グリッドは以下のようになる。



第4図 T 2区地層断面図 (1 : 60)

I層（水田耕作土）

II層（灰黒色土層） 粒子緻密で粘性小、砂を少量混入

III層（黒褐色未分解泥炭層） かなりの量のアシ、その他の腐植物を多量に混入

IV層（黒色未分解泥炭層） アシ、その他の腐植物を混入し、粘性強

V層（灰色土層） アシ等の腐植物を少量混入した砂を含む粘土層

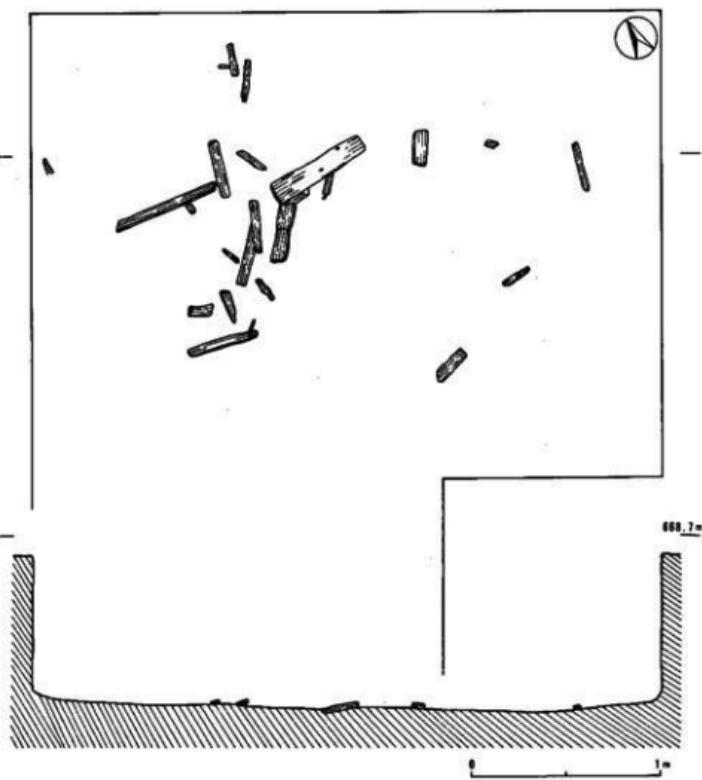
VI層（砂礫層）

1) 木製品 (第5・6・7・8図)

1・2グリッドから出土した木製品は、地表より80cmのV層下部から集中的に出土した。この地区は西から東に傾斜しており、出土地点の東端添いには小川が流れている、傾斜が川の土堤にぶつかる。のためにこの地点は水溜りの場所となり、幸いに腐蝕せず集中して出土したものとおもわれる。

第5図・第6図は、木製品出土状態の実測図である。

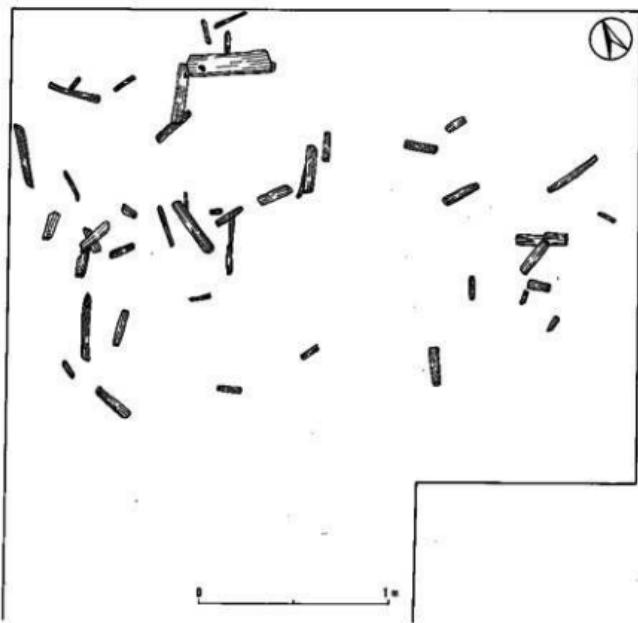
III・IV層は、アシ等の腐植物でおおわれた泥炭層であるが、木製品の出土はこの泥炭層の下の砂を含んだ粘土層であるV層下部からであった。このことは時代的に古いものと考えられる。昭和26年6月から行なわれた土地改良事業において出土した土器片等の遺物は、そのほとんど



第5図 T2区の木製品出土状況実測図 (1:30)

がアシ等の泥炭層上面からであると報告されている。これ等の事実から本地区でのV層からの出土は、考慮されるべき裏付ともなろう。

第5図の断面図に明示してあるように、田下駄・木製品片の出土地点は、地表より80cmの深さの所に折り重なるように散在している。さらに第6図はその下部10cm以内の層中からの出土状態である。出土した木製品は1cm~3cmの厚さであり、長さは折れたり、腐蝕したりしておりまばらである。そのほとんどが割った状態の板材でデコボコ気味であり、年輪に沿って剥いだままの様相を呈している。また、木構の杭も2~3本見受けられる。



第6図 T2区の木製品出土状況実測図No.2 (1:30)

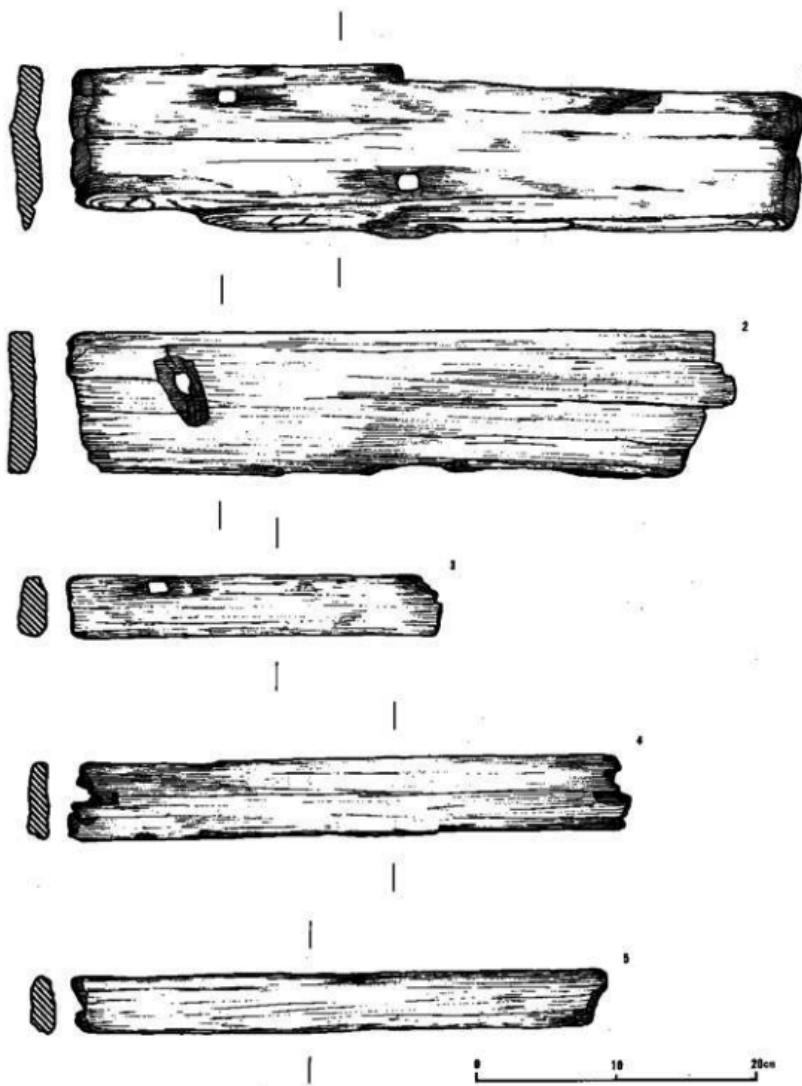
第7図・8図は、出土した田下駄および板状の木製品片の代表的なものを中心図示した。

1の田下駄は、 $52\text{cm} \times 20\text{cm}$ に複元される。緒孔は $1.2\text{cm} \times 1.4\text{cm}$ の方形を呈し、ほぼ規格的に統一されている。厚さは 1.8cm を測る。板材は年輪に沿って割裂いただけの板を使用している。しかし、上・下の側面は面取り加工した痕跡が顕著にうかがえる。

2も、厚さ、形状等から田下駄であろうと推測されるが、孔のあけ方が特異である。孔の縁に刃の痕跡が明瞭に認められ、縁が刃物によって抉られている。規格は1とはほぼ同じになるとおもわれる。

3は、緒孔が残存した田下駄の細片である。孔は $1\text{cm} \times 1.4\text{cm}$ を測る方形を呈し、1の田下駄と同一の形状および規格を呈する。

4、5も板状の木片であるが、厚さ、形状等から田下駄の一部分であろうとおもわれる。これら等の木製品は、木柵に使用した杭の樹種と同一のサワラ材を使用している。



第7図 T2区出土の田下駄実測図 (1 : 4)



第8図 T2区出土の木製品片実測図（1：4）

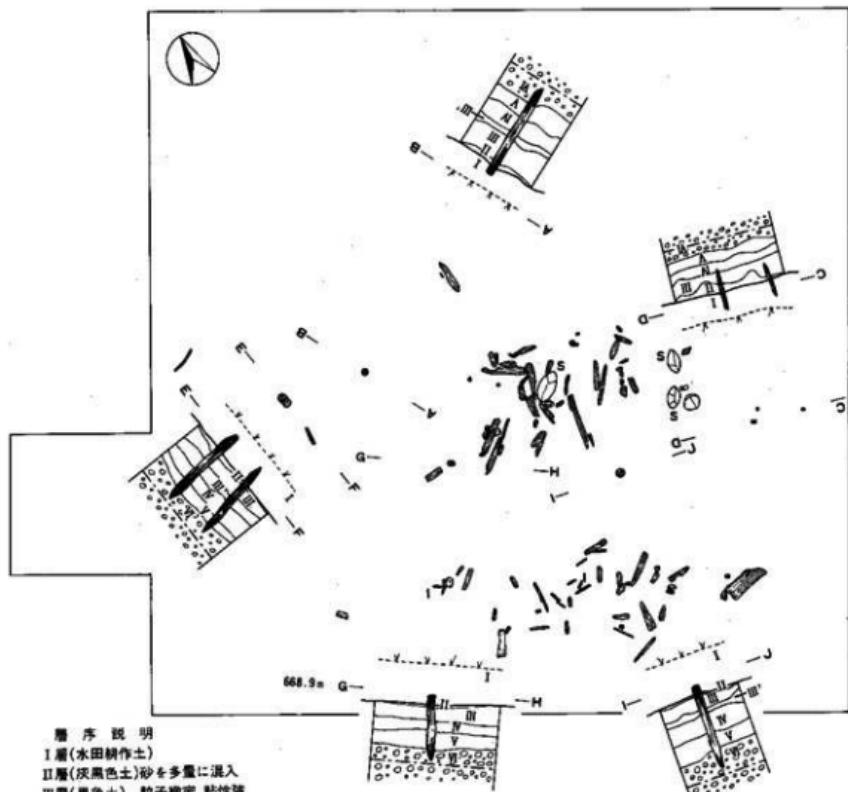
第8図の6、7は、第7図に図示した田下駄とは様相を異にする木製品片である。6は厚さが3.6cmを測り、年輪に沿って割裂いただけの板を使用していない。肌がなめらかで明らかに磨いた感を呈している。7は、厚さが2.8cmであるが、肌のなめらかさは6と同様である。おそらく田下駄とは別の木製品であろうとおもわれる。

2) 木 構 杭 (第9・10図)

本地区出土の木構杭は、水田耕作土の下部から頭をのぞかせた。また、杭の頭と共に第9図に示した如く多量の木片が散在している。木片は、杭の腐蝕したものがそのほとんどであったが、中には平板状の木片もあり何等かの木製品であったことが推測される。また1点ではあったが、農耕具の柄壺の部分もみられたが(写真図版18)、腐蝕していく取り上ると同時に砕けてしまった。

これ等の出土地点は、田下駄出土の1・2グリッドより地形的に上り気味になっており、砂礫層までは50cm~70cmで比較的浅い。1・2グリッドの場合は砂礫層まで届くのには120cmを測りかなりの深さである。

層序は、6層によって形成され基本的には第4図と変りはないが、II層の灰黒色土層に混入している砂が多量となる。また、Ⅲ層~V層にかけてのアシ、その他腐植物の未分解泥炭層の堆積がうすく、本地区ではIV層でのみしか見られない。特にⅢ層、Ⅳ層は、粘性が強く、細かい植物の根の混入物と水酸化鉄の混入が見られることから、水田耕作土であったことが判然としている。このことから出土した杭は、この水田耕作土に共なるものと判断される。II層の砂は、大竜川の大氾濫によってこの水田が埋められてしまったことを物語っているといえよう。その時に押し流された木片がII層上部に散乱したものとおもわれる。



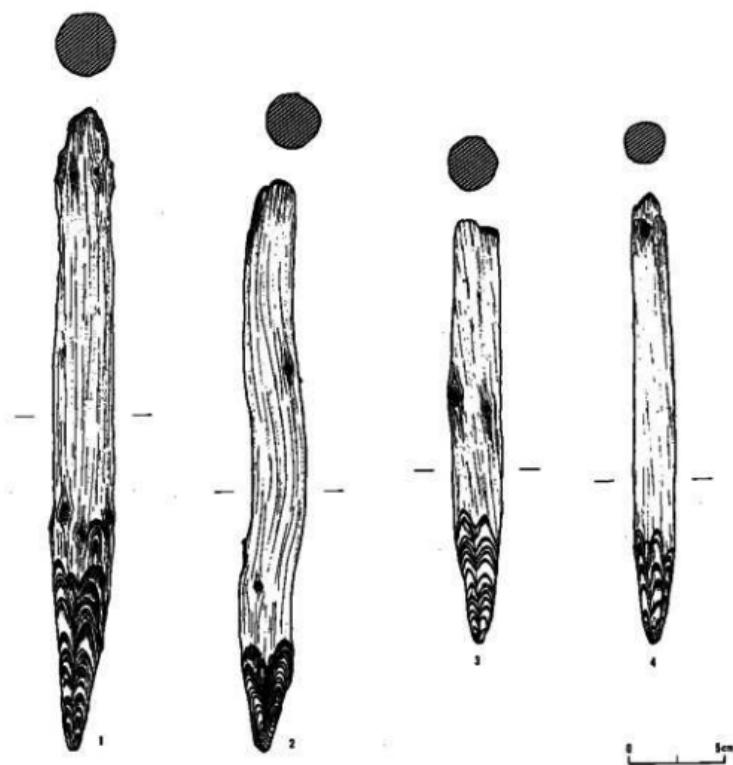
層序説明

- I層(水田耕作土)
- II層(灰黒色土)砂を多量に混入
- III層(黒色土) 粒子緻密、粘性強
- IV層(黒褐色土) " " 握り植物の根を混入する。
- V層(漆黒色土)粒子緻密、粘性小、小石粒(1mm-5mm)を混入
- VI層(砂礫層)

第9図 T2区出土の木構実測図 (1:40)

木構杭は、やや不規則ではあるが東西方向に添って打ち込まれている。長さ45~70cmのナラ材の原木を用いており、先端はスパッと一気に削り落して尖らせている。かなり鋭利な刀物を使用していることがわかる。

第10図は、杭の実測図である。1は、長さ67cm、太さ径6cmを測る。先端は刀物4回で削り



第10図 T 2区出土の杭実測図 (1 : 6)

取っている。2は、長さ60cm、太さ径5.5cmを測り、やはり4回で削り取っている。

3は、長さ44cm、太さ径5cmを測り、4回で削り取られている。4は、長さ47cm、太さ径4.4cmを測り、これは5回で削り取って先端を尖らせてている。

これ等から見て、本地区出土の木櫛杭は、昭和29年の土地改良事業において出土したサワラ材使用の杭とは大きく異なる。先端を削り尖らせた鋭利な刃物は、鐵器のかなりの進歩がうかがえよう。さらに、本調査でのT 4区出土の木櫛杭と比較しても、後述してあるように先端を削り取った回数は数倍に達する。丸太使用と4回~5回の削り取りから看取しても、本地区的木櫛杭は時代的にはかなり新しくなるであろう。

3) 土 器 片

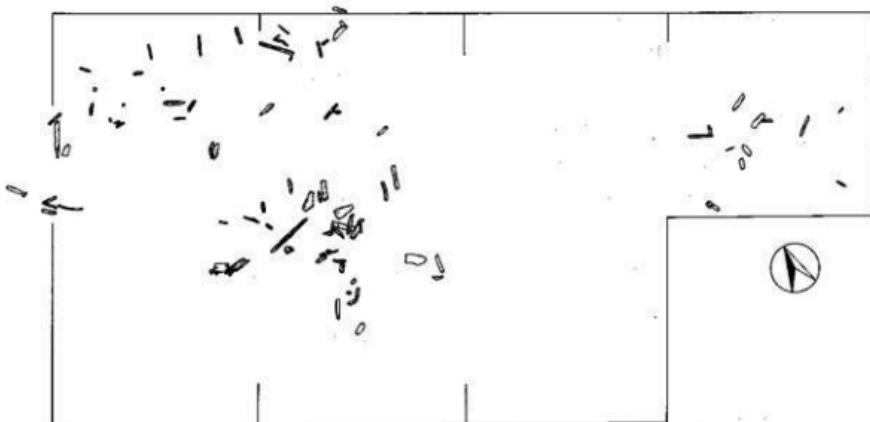
T 2 区から出土した土器片は計14点であるが、いずれも細片なので記述のみにとどめたい。グリッド1からは4点の出土があった。II層中からの出土である。そのうち2点は、ロクロ痕の頗著な坏口縁部片であり、褐色を呈し硬く焼きしめられている。金雲母がキラキラ光っており、本町産出の質の良い粘土が使用されている。他の2点は摩滅した細片で観察困難である。

12・13・14グリッドから出土した土器片は10点である。器形の判別できるものは、高台付坏の高台部片、糸切り底部片3点、顎把手部細片1点、その他摩滅した5点があるが、いずれも土師器片であろうとおもわれる。

これ等の10点は、木片の散在するII層上部より出土した。土器片は、器形の判別できたものから見て、国分期に比定されよう。他に黒曜石の剥片が1点出土している。

(島田 恵子)

3. T 3 区 (第11図)



第11図 T 3 区出土木片実測図 (1 : 40)

T 3 区出土の木片は、T 2 区12・13・14グリッドから出土した木片と層序および状態が類似している。おそらく同じような条件のもとにこれ等の木片が散布したものとおもわれる。

木片は、杭の腐蝕片、平板状の木片等であり、杭の中には、長さ50cm、太さ径8cmを測るものと、長さ35cm、太さ径8cmを測る、土から抜けたのは完全のものも見られる。平板状の木片は、長さ20cm×10cm厚さ2cmのものが5点ほどあり、やはり何等かの木製品であったものと考えられる。これ等の木片が集中して散在していた地点は、10・11・12・13グリッドに位置する。

また、本地点からは6点の土器細片が出土している。第12図に図示した拓影は、弥生式土器である。I層の水田耕作土中より出土した。2条のヘラ描沈線の間を2条の波状文が描かれていることが判別される。中期後半の恒川式土器壺頸部片に酷似する。

その他の土器片は、須恵器環口縁部片1点、土師器环系切底部片、同胴部片、變胴部片等である。やはり、T2区から出土した土器片と同時期の国分期に比定される。

(五味 純一・近藤 尚義)



第12図 T3区出土の
土器拓影（1：2）

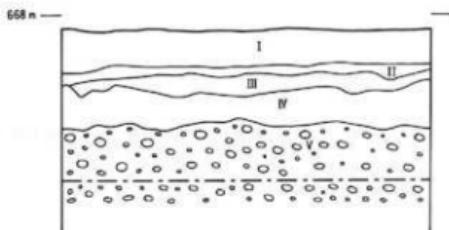
4. T4区

本地区は、飯田線を越えた線路添いの東側に位置する。グリッドは、南北にA・B、東西に1~21まで計42グリッドを設定して掘り下げを行なった。その結果、9・10グリッドおよび20・21グリッドにおいて木柵列が検出された。

先ず層序であるが、本地区は15グリッドにおいて詳細に調査を行なった。飯田線手前のT1区、T2区、T3区とは、本地区的層序は大きく変化している。I層は、現在の水田耕作土であり、II層は青灰色を呈す砂層となる。部分的にはあるが木柵列の杭の頭はこのII層より姿をあらわしている。III層は、ややII層の砂を混入している黒色土である。IV層は粘性の強い黒色土で、III層と共に以前の水田耕作土であったことを如実に示し

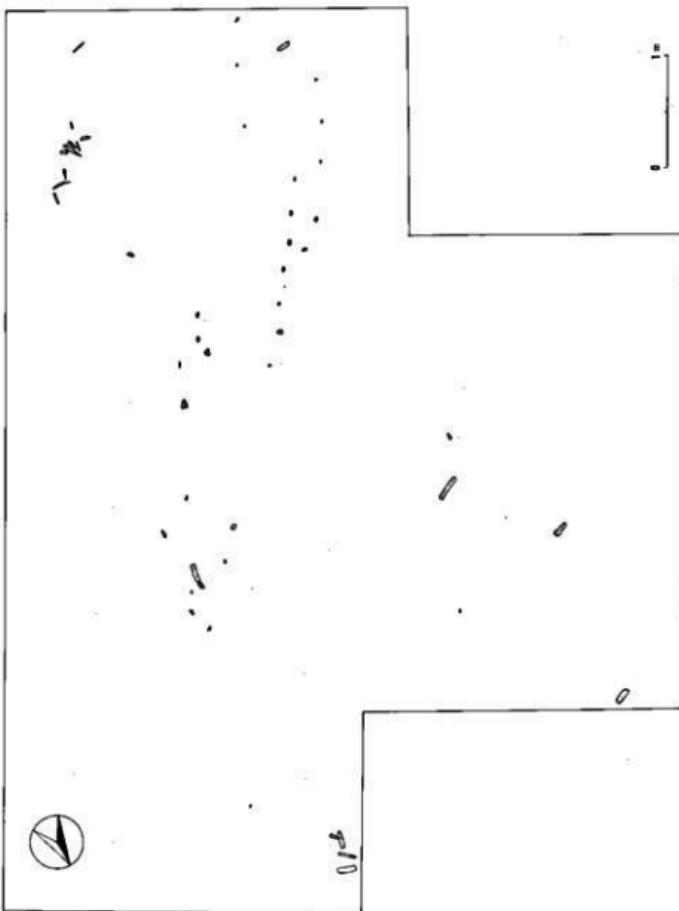
層序 説明

- I層（黒褐色土層） 水田耕作土
- II層（青灰色土層） 砂の層
- III層（青灰黒色土層） 砂を混入粘性小
- IV層（黒色土層） 粘性強
- V層（砂礫層）



第13図 T4区地層断面図（1：30）

第14図 T4区20・21グリッド出土木櫛列及び木片全体実測図 (1:50)



ている。以上の層序から判断して、ある時期に天竜川の氾濫によって初現の水田が埋まり、その上部に現在の水田が再びつくられたものとおもわれる。II層の砂層は押し流された大洪水により堆積した層であろう。T 1区～3区に見られたアシを中心とした腐植物の厚い層が見られないことも、この地帯が早い時代から耕作されていたことを物語っているといえよう。

1) 木柵列 20・21グリッド(第14～17図)

20・21グリッドから出土した木柵列は、長さ6m、巾50cm～70cmを測る。南北方向に並行して築かれたものとおもわれるが、南側はまだ稲を作っていたため北側のみの調査となった。そのため北側の巾8mの調査区域にとどまってしまった。

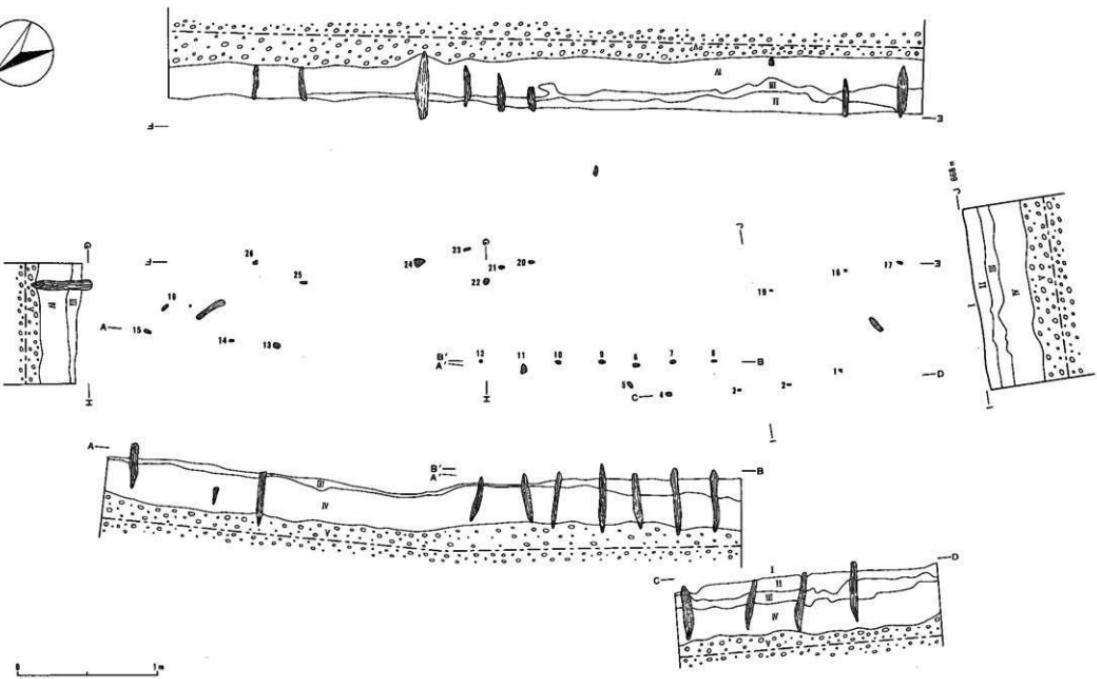
第14図に図示した平面図は、木柵列および木片の実測図である。この図から看取されることは、木柵列の両側に木片が散在していることが見受けられる。この木片は木柵列から何等かの影響によって抜けてしまった杭であるとおもわれる。木柵列が切れている場所の側にのみこの木片が見られるからである。

第15図は木柵列の断面図を図示したものである。北側に向って傾斜していることを示すように南側はIII層から杭が頭を出しているが、北側方向はII層となる。杭と杭との間隔は20cm～30cmを測り比較的巾がある。これ等の杭はあぜ路として打ち込まれた木柵列であろうとおもわれる。昭和27年に発見された水路は本地点より30cm程東寄りとなっており、ギッシリと杭が打ち込まれていることからも、本地点の木柵列は水路と考えるよりはあぜ路とした方が妥当であろうとおもわれる。さらに層序から見ても、当時の耕作土はせいぜい30cm～40cmで深田ではなかったものと観察される。こうした点からもあぜ路の杭はこの程度の規模であったと考えられよう。

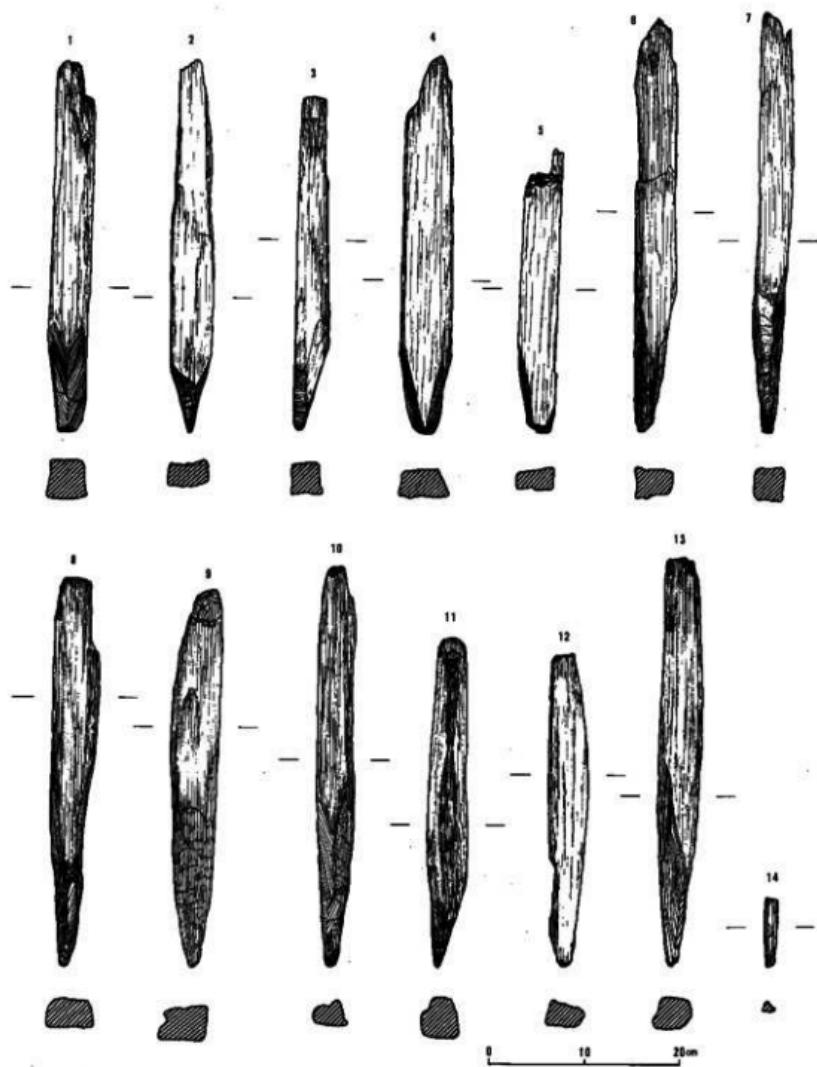
第16図・17図は木柵杭の実測図である。第15図に示した木柵杭Noと本実測図のNoは同一である。残存していた杭は全て実測を試みた。よって腐蝕しており、ようやく土にへばり付いていた木柵杭も見られる。(14～16・18・20・23・25・26)

1～13は、かなり良好な遺存状態であった。6・7・8・10・13は、長さ42cmを測り、これらから杭の平均的な長さは、1・2・4・9の39cmと共にほぼ統一されていたものと考えられる。また、22・24・28は太さが径5.5cm～7cmを測り頑丈である。

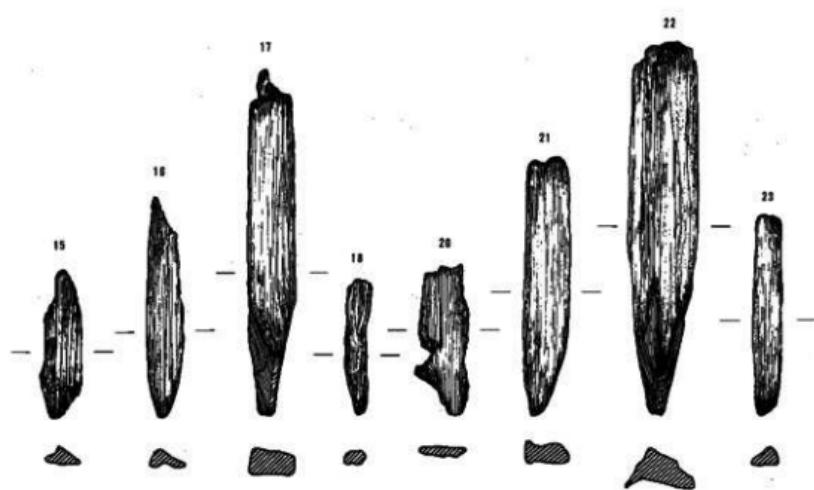
杭の先端は、鉄器を用いた刃痕が顕著である。その切れ味は、現在の刀物とは異なり鈍かったことが想定される。第2区12・13・14グリッドから出土した杭のように3～4回の使用で鋭く尖った先端の杭を仕上げたのに対し、本地点の杭は30回もの削り取りを行なっているものが多い。鉄器の刃痕はこの先端に最も顕著であって、杭の割り方は、年輪に沿って剥ぎとった様相を呈している。これ等の杭には節は見受けられない。また剥ぎ取りの比較的容易な材質であ



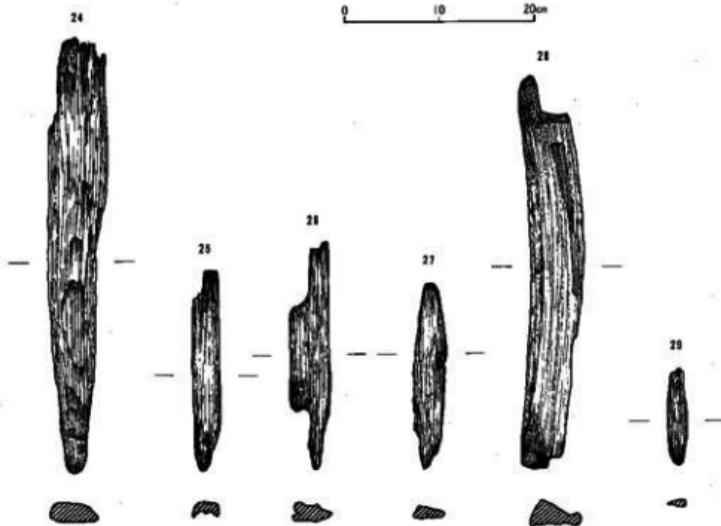
第15図 T 4区20・21グリッド出土木標列実測図 (1 : 30)



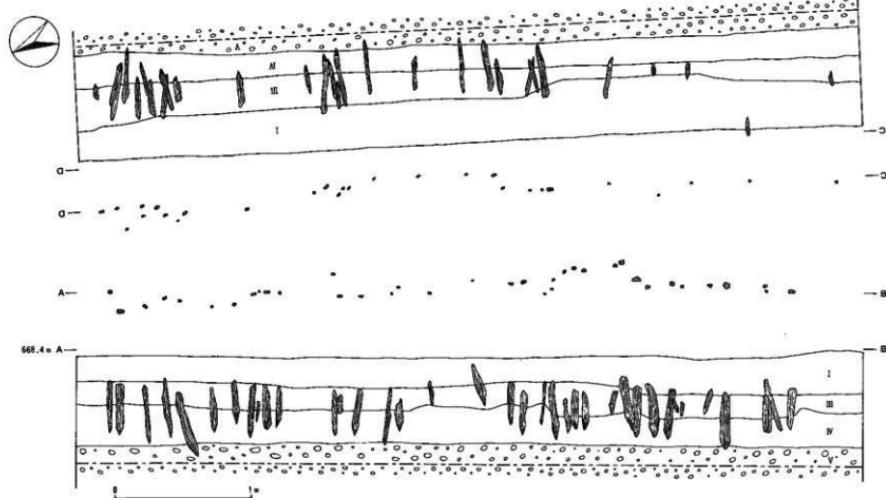
第16図 T 4区20・21グリッド出土の木構杭実測図 No.1 (1 : 6)



0 10 20cm



第17図 T4区20・21グリッド出土の木橋杭実測図No.2 (1:6)



第18図 T4区9・10グリッド出土木構列実測図 (1:30)

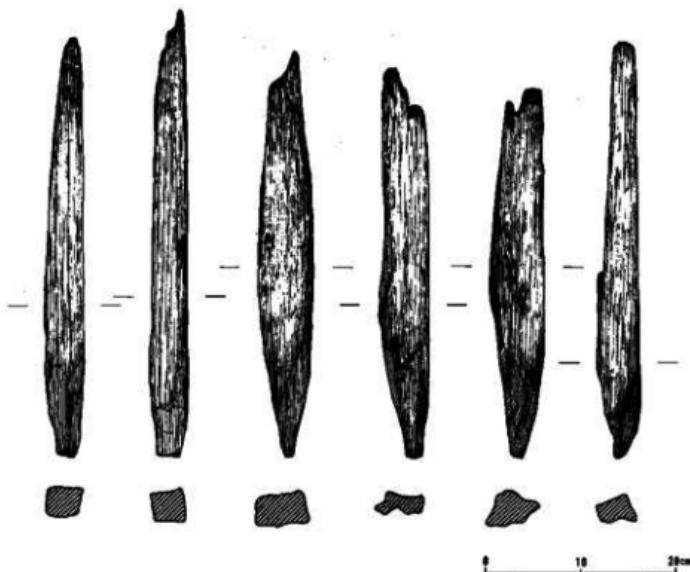
るサワラを使用しており、その選定には特別の配慮がなされたのであろう。

2) 木 檻 列 9・10グリッド (第18~21図)

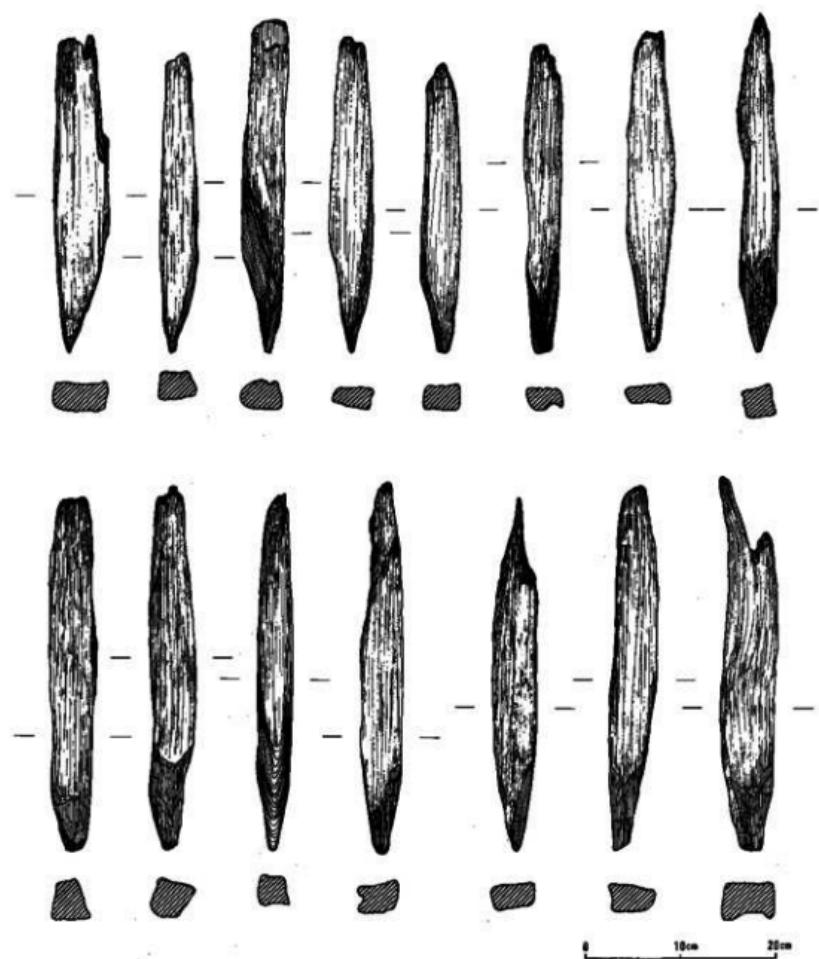
本地点の木檻列は、長さ 5 m 50cm、巾 60~70cm を測る。調査区の条件が前述した 20・21 グリッドと同一であるため、木檻列の長さは 5 m 50cm にとどまってしまったが、さらに南北方向に続くものとおもわれる。

木檻列は一列に平行して築かれてはおらず、本地点の場合第18図の平面図に示されているように、二列に杭を打ち込みかなり蛇行していることがうかがえる。従ってその巾も一定ではない。層序は、前述した 9・10 グリッドに比較すると、II 層の青灰色砂層が III 層中に混入してしまった。これは、掘り下げを行なうはじから水が湧き出し、ポンプをフル回転させながらの作業の中では、堆積のうすかった II 層が明瞭につかめなかったことに起因する。

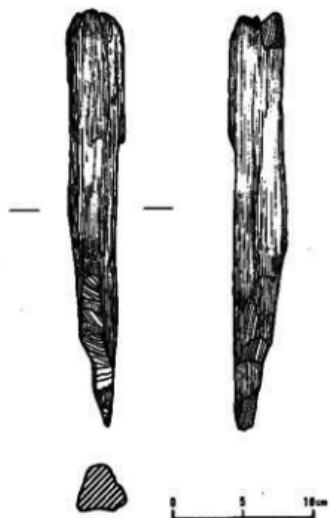
本地点の木檻杭は、その間隔はかなり密接している。また杭も、19図、20図に示したように太いものが多い。径 5 cm ~ 6 cm を測り、長さは 35 cm ~ 37 cm がその大部分を占める。おそらく当



第19図 T 4 区 9・10グリッド出土の木檻杭実測図 No.1 (1 : 6)



第20図 T4区9・10グリッド出土の木構杭実測図 No.2 (1:6)



第21図 杭刀痕実測図 (1:4)

初の長さは40cm位であったろうとおもわれる。

第21図は、先端を尖らせた刀痕の最も顕著なもの

を示した。10cmの長さにわたる先端部に8回の刀

痕が認められる。その裏側である右の図は5回の痕

跡がある。

登呂遺跡出土の杭も全く同様な刀痕が認められて

いる。このように削られて尖らせた杭は前述したよ

うに、鉄器を使用したことが刀痕によって実証され

ているといえよう。

3) 土器片・その他

本地点からの土器片は計7点出土した。その他黒

曜石剝片1点が出土している。

土器片は、灰陶陶器3点、土師器環口縁部片1点、

弥生土器とおもわれる細片2点、土師器腹脛部片と

おもわれるもの1点等である。これ等は、木柵列お

よび、砂礫層内より出土している。

また、植物性自然遺物としては、モモの果核、マツカサが出土した。モモは地元の言葉では

ケモノと言う。大きさは1.5cm~3cmの長さで、大小の異なりがある。マツカサは、マツボック

リなどと言う。これ等もIII層からV層にかけて出土している。

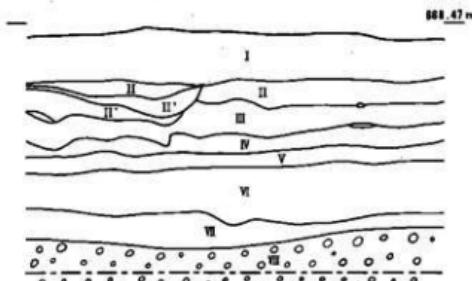
(島田 恵子)

5. T 5区

本地区は、畑地であり調査区内に作物が植えられていて調査可能な区域が非常に少なく充分な調査に至らなかったことは残念であった。しかし、住居址の存在も予想されたので、限られた範囲ではあったが特に詳細な調査のもとに掘り下げを行なった。

第22図に本地区的地層断面図を示した。土器片の出土は、耕作土のI層およびII層からの出土であった。灰陶陶器片4点、土師器環口縁部片2点、土師器腹脣部片5点、その他弥生土器片とおもわれるもの2点、黒曜石2点等である。

しかし、VI層、VII層にかけて暗渠排水のための施設が設けられており、この地区全体が擾乱されていて、遺構が存在したとしても、この工事により破壊されたものとおもわれる。



第22図 T-5区地層断面図 (1:30)

I層（褐色土） 煙耕作土

II層（茶灰色土） 粒子緻密、粘性中、上部は耕作土中の小石粒を多量に混入し、中～下部においては砂を多量に混入する。

II'層（青灰色土） 砂層

II''層（白青灰色土） 砂と0.5mm～2cmの小砾を混入した砾層

III層（青褐色土） 粒子細く、粘性強、砂少量混入、土層内全体に褐色の細い根が多量に混入。

IV層（黒褐色未分解泥炭層） アシ、その他の菌植物の堆積層

V層（黒色未分解泥炭層） " " " で粘性強。

VI層（黒褐色土） 粒子細く、粘性強、アシの茎および0.5mm～1cmの小石を少量混入。

VII層（黒青色土） 粒子細く、粘性強、黑色土に細いアシの根を混入。

VIII層（黒灰色） 砂砾層

(島田 恵子)

第4章 既出遺物

ここに図示する遺物は、昭和26年から開始された土地改良工事において出土したものである。第1図に出土遺物と出土地点を明記したが、これ等は工事の合間に寸暇をさいて遺物の採集および調査をされた小川守人氏の記録である。氏の努力がなかったならば、箕輪遺跡の重要性と歴史的意義はどうい世に出ることはなかったであろうとおもわれる。本報告にあたり深い敬意と感謝の意を表したい。

昭和56年度において、国道バイパス工事によりほんの一部ではあるが、箕輪遺跡の本格的な調査が開始され本報告書作成となり、過去の既出遺物を改めて整理することとなった。遺物の大部分は、故藤沢宗平氏によって『信濃』(S30. 2)に発表されているが、改めて実測をし、出土地が広大であるため、本調査区を中心に地域別に分類して図示した。

1. 石器 (第23~28図)

昭和56年度に国道バイパス工事のために調査対象となつた地点は、穴田地区である。先ずこの穴田地区出土の石器から図示した。

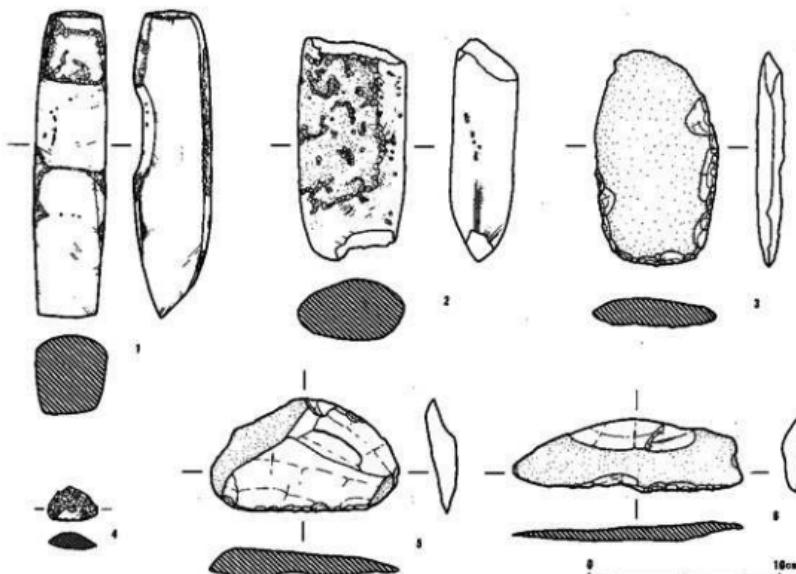
1の柱状抉入石斧は、表裏、側面の四面が磨かれ鋭い刃部を形成、使用により刃こぼれが生じている。研磨が表面のみで浅いため柄の部分は敲打痕が露出しており、製作過程が敲打～研磨の段階を経ていることがうかがえる。抉りの部分は着柄の擦り痕がみられる。ホルンヘルスを素材とし研磨された刃部は見事な光沢で、鋭い刃縁と共に最優品である。

2は、乳棒状磨製石斧で輝緑岩を素材とし、基部上端と右刃縁を欠損する。刃部は研磨され円刃の蛤刃を形成している。基部全面に敲打痕がみられるが、側面はわずかに磨かれている。

3は、表全面に自然面を残し、両側面及び下端部をわずかに調整している。裏面は整形剝離をしたままであまり手が加えられていない。ホルンヘルスを素材とし、粗雑な撲型打製石鉈である。

4は、黒曜石を使用した三角形状の剝片石器で、わずかな調整が認められる。5は、緑泥岩使用の打製石庖丁である。紡錘形状で刃部をわずかに調整しているが、整形剝離の段階で鋭い刃と形状を整えている。昭和28年12月の出土である。

6は、同じく緑泥岩使用の打製石庖丁で直線刃の半月形状を呈す。うすく剝離し鋭い刃を形



第23図 穴田地区出土の石器No.1 (1:3)

成している。

第24図は、穴田地区出土の打石鉢を中心まとめた。

7は、自然面を残し合理的な剥離を施した、きわめて強健な打石鉢である。粘板岩を使用し780gを量る大型である。

8は、基部中央に自然面を残した合理的な剥離であるが、側刃は鋭利である。右刃縁、基部上端を欠損。硬砂岩を使用。

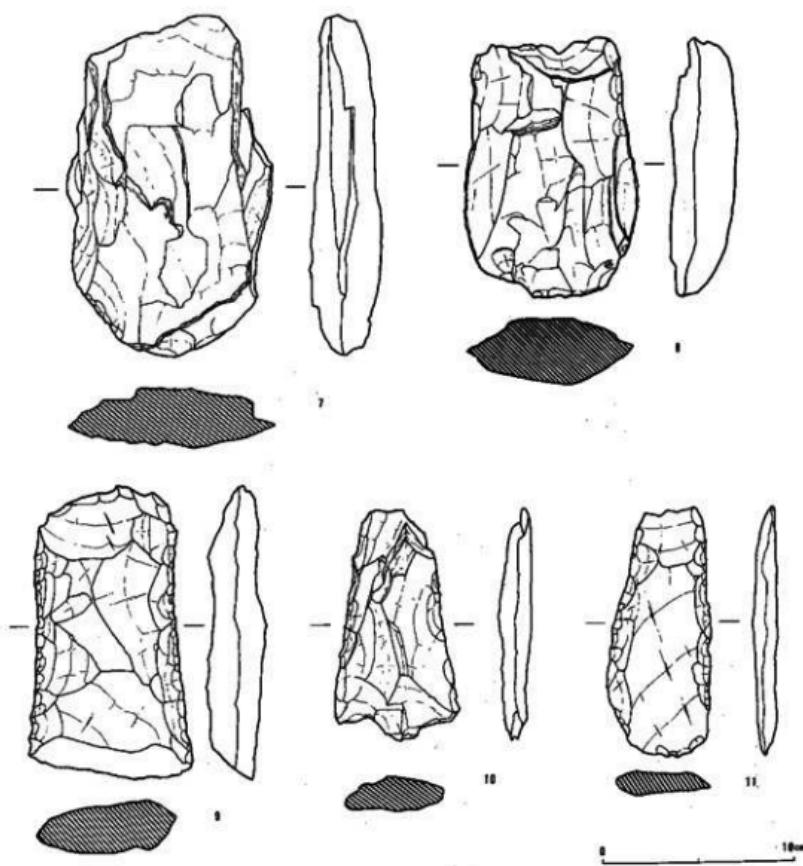
9は、両側縁は左右相称に直線を成すが、刃部を欠損する。計算された合理的な剥離であり、形態が整っている。砂岩を使用。

10は、粘板岩を使用した小型の撓形である。刃部を欠損する。

11は、偏平で非常にうすく、両側縁に調整がなされている。左側縁が刃部に向いやや広がり円刃となる。砂岩を使用。

第25図は大清水地区出土の石器をまとめた。

12は、粘板岩質の石材を使用し、上端部が狭く側縁が直線的に開く撓形で刃部右縁が欠損する。剥離調整は合理的に意図的に計算されており、自然面を残しながら機能的に調整されてい



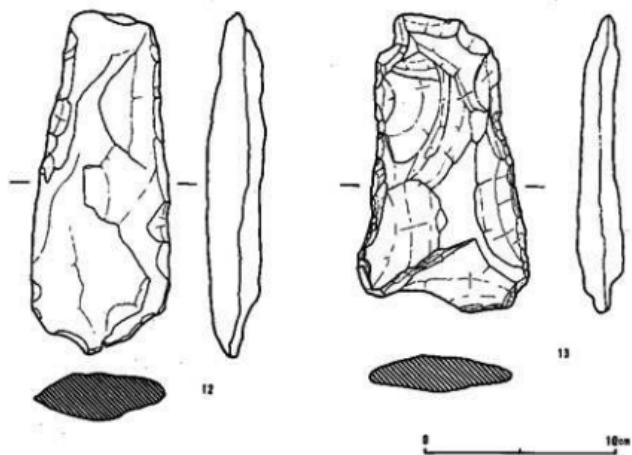
第24図 穴田地区出土の石器 No2 (1 : 3)

る。昭和11年3月表採されたものである。

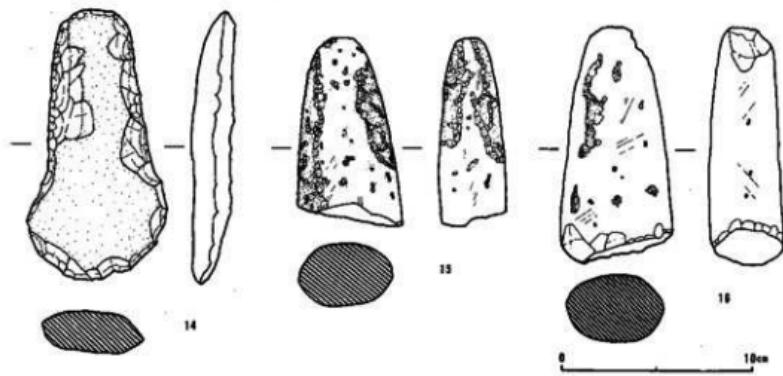
第26図は、馬場地区出土の石器をまとめた。

14は、表面に自然面を残し、基端に向ってやや湾曲する。基端、刃縁が丸く、基部側縁中央から刃縁に向ってゆるやかにカーブして、形態的に整った完形品である。捲形で礫岩を素材とする。

15は、基部下端を欠損した乳棒状石斧で花崗岩を使用。右側面、基部に敲打痕が顕著である。



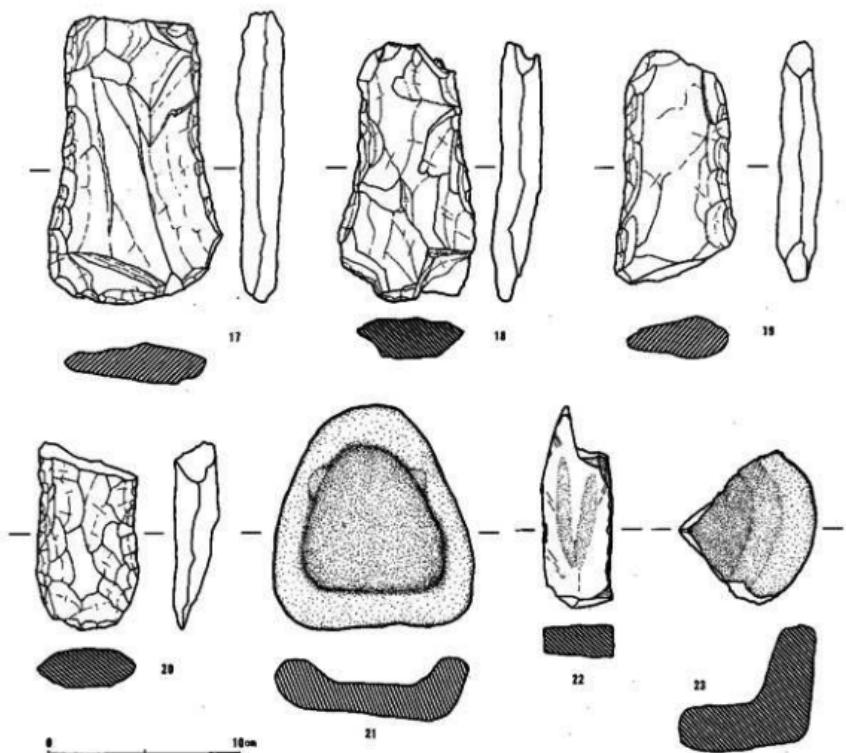
第25図 大清水地区出土の石器 (1 : 3)



第26図 馬場地区出土の石器 (1 : 3)

基部中央がわずかに磨かれている。

16は、基部上端と下端を欠損した乳棒状石斧で砂岩を使用。全面に敲打痕が顯著である。



第27図 橋詰・久保下出土の石器 (1 : 3)

第27図は、橋詰・久保下・その他地区出土の石器をまとめた。

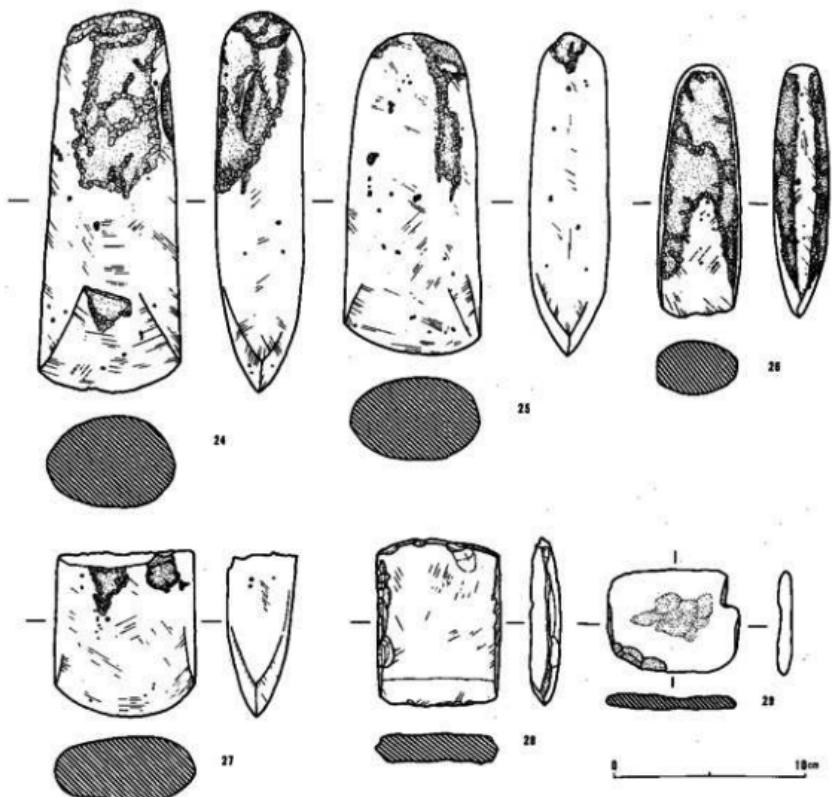
17は、硬砂岩を比較的うすく剥離して整形したもので、両側面が湾曲気味に刃部に向って開く整った楔形である。昭和29年6月久保下で表採された。

18は、刃部の左右を欠損。裏面は自然面を残し側面のみ剥離がなされている。表面は全面剥離し形状を整えている。粘板岩を使用し、石質の特質から剥離は段を有す部分がある。

19は、硬砂岩質で全体的に摩耗している。刃部および基部上端を欠損している。

20は、輝綠凝灰岩質で短骨型を呈す。裏面が湾曲し刃部はうすく剥離され円刃である。

21は、硬砂岩を使用した三角形を呈す小形凹石である。縁をもち浅い凹みではあるが、擦られた様相ではなく敲打された痕があるため、なにかを敲き、押し漬したものと考えられる。裏面



第28図 衛室田地区出土の石器（1：8）

の側縁は底面に向けて傾斜させ、底面は平に調整されており、自然面を利用しながらあまり手を加えない合理的な加工である。木下より出土した。

22は、既出造物では唯一の砥石である。厚さ1.4cmの平板状で、表面はよく擦られ溝状をなしでいる。裏面はあまり擦られてはいない。

23は、4cmの深い凹みを有し、円形を呈すると思われるが臺を欠損する。安山岩を使用し敲打痕が全面にみられる。

第28図は衛室田出土の石器である。

24は、刃を左右対称に丸く研ぎおろし刃縁が弧を描く。刃面に研磨痕が顕著で鋭利な美しい刃縁を描いている。敲打痕が刃面から基部全体に顕著に残されている。着柄の部分は特に擦られた痕跡と凸凹が全面にみられる。研磨が着柄の部分のみ粗雑である。典型的な大型蛤刃の優品である。

25は、刃縁が弧を描くが、刃部左側縁がへりこぼれたため、再度の研ぎおろしにより1cm程上り気味となる。刃面にかなりの研磨痕が見られる。表面は研磨されスベスベしてはいるが、敲打痕が全面に顕著である。着柄の部分は研磨が粗雑である。鏃の面が部分的に打損している。

26は、乳棒状磨製石斧で緑泥岩を素材とする。基部両面に敲打痕が顕著である。両側面及び刃部が研磨されている。刃部裏面が使用により擦りへっている。研磨痕が顕著である。

27は、基部の半分を欠損した典型的な大型蛤刃である。ホルンヘルスを素材とし、敲打の後研磨されていることが顕著に見られる。鋭利な刃と形態が整った優品である。

28は、偏平板状の片刀石斧である。裏面は湾曲気味で左側面に剥離を残すが研磨されている。着柄痕が顕著である。側縁は表裏面との間に稜を作りながら磨かれている。

29は、泥岩を素材とし、偏平でうすく剥ぎ取り自然面を合理的に利用している。表面中央に親指を押しあてる格好の凹みが生じ、使用によりこの部分のみ変色している。穂を摘むためのすべり止めに刃面を1.5cm抉り、鋭利な刃部をつくり出している。下端にも2cmの刃部を形成している。

(島田 恵子・古屋 公彦)

第1表 出土石器一覧表

排図 番号	種 別	石 質	最大長 (cm)	最大巾 (cm)	最大厚 (cm)	重 量 (g)	出土状態	備 考
23-1	柱状抜入 石斧	ホルンヘルス	16.0	3.7	4.1		表 採	穴田地区
23-2	磨石斧	蝶緑岩	11.6	5.6	3.2	420	表 採	
23-3	打石鉞	ホルンヘルス	11.2	6.4	1.4	150	表 採	
23-4	剥片石器	黒曜石	1.8	2.5	8.0	2.3	表 採	
23-5	打石庖丁	緑泥岩	5.9	9.9	1.6	130	表 採	
23-6	打石庖丁	"	3.9	12.2	0.6	22.2	表 採	
24-7	打石鉞	粘板岩	17.9	10.9	3.0	780	表 採	
24-8	打石鉞	硬砂岩	13.7	8.6	3.3	540	表 採	
24-9	打石鉞	砂岩岩	15.5	7.3	2.6	450	表 採	
24-10	打石鉞	粘板岩	12.1	5.2	1.8	140	表 採	
24-11	打石鉞	砂 岩	13.0	5.3	1.3	120	表 採	

種類番組	種別	石質	最大長	最大巾	最大厚	重量	出土状態	備考
25-12	打石鋤	粘板岩	(cm) 17.9	(cm) 7.2	(cm) 2.6	(g) 420	表採	大清水地区
25-13	打石鋤	"	15.6	9.1	1.9	310	"	
26-14	打石鉢	礫岩	14.2	7.2	2.1	260	"	馬場地区
26-15	磨石斧	花崗岩	9.8	5.7	3.3	320	"	
26-16	乳棒状石斧	礫岩	22.3	5.9	3.5	520	"	
27-17	打石鋤	硬砂岩	15.2	9.1	2.1	360	"	久保下地区
27-18	"	粘板岩	13.6	7.3	2.4	290	"	"
27-19	"	硬砂岩	12.5	5.3	2.2	130	"	横詰地区
27-20	"	單綠變灰岩	9.5	5.0	1.9	170	"	"
27-21	凹石	硬砂岩	11.7	10.5	1.7	430	"	木下地区
27-22	砥石	砂岩	10.5	3.6	1.6	100	"	
27-23	凹石	安山岩	22.0	7.1	2.4	240	"	小清水地区
28-24	磨石斧	ホルンヘルス	20.0	7.4	4.8	1150	"	御室田地区
28-25	"	"	16.7	6.7	4.3	900	"	
28-26	乳棒状磨石斧	緑泥岩	13.2	4.3	2.8	300	"	
28-27	磨石斧	ホルンヘルス	8.6	7.3	3.4	420	"	
28-28	偏平片刀石斧	粘板岩	8.7	6.4	1.4	200	"	
28-29	打石庖丁	泥岩	6.9	5.4	0.7	60	"	

ま と め

図示した石器は、打石鋤13点、大型蛤刃の磨石斧3点、その他磨石斧2点、乳棒状磨石斧2点、柱状抉入石斧1点、扁平片刀石斧1点、打製石庖丁3点、黒曜石剥片石器1点、凹石2点、砥石1点等である。

先ず打石鉢であるが、これは一見して縄文時代の打石斧とは異なり、自然面を残した合理的な製作により区別できる。下伊那地方弥生時代の打石鉢を集成した神村透氏および「下伊那地

方における土師器に伴う打石器について」 1968, 10『長野県考古学会誌』 に発表した佐藤 駿信氏の土師器住居址より出土した打石器とも基本的に共通点が多く、本遺跡においても弥生式土器、土師器等が混在して出土していることからも、いずれの時代に断定することはできない。佐藤氏が指摘しているように、弥生期に盛行した打石器が古墳時代まで引継がれたものであろう。石材は付近から入手できる硬砂岩、粘板岩、輝緑凝灰岩を利用している。

また、耕起具として使われていたことを物語るように、刃先が欠けているもの、摩滅しているものがほとんどである。その他、開墾用に使用されたとおもわれる、強健な打石鋤も多い。

次に磨石斧は、なんといっても太型蛤刃に代表されるであろう。石材はホルンヘルスを使用し、敲打の後研磨されている。どれも鋭利な刃と形態が整っており、その見事な美しさに心打たれる。第28図24・25・27の太型蛤刃は頑強で、木櫛枕に使用したサワラの大木も容易に伐採可能であったものとおもわれる。共に御室田出土であり、土器の出土量と相まって、弥生時代の集落が予想される。その他同時代の石器は、柱状抉入石斧と扁平片刃石斧、穂摘具としての打製石庵丁3点の3種があり、特に柱状抉入石斧は県下においても完形品は唯一のものである。石質のホルンヘルスは、鋭い刃部を形成し、研磨後の光沢や、形状も完成された美しさがあり、前述した太型蛤刃と共に絶品である。

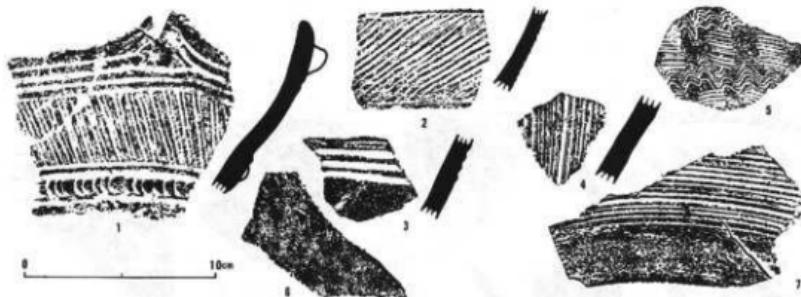
第27図に図示した小型凹石2点は、類例の出土から古墳時代に位置付けられよう。

以上、石器のまとめを簡単に略記した。

(島田 恵子)

2. 土 器 (第29~39図)

1) 穴田地区 (第29図)



第29図 穴田地区出土の土器拓影 (1 : 3)

穴田地区は、昭和56年度において本調査の行なわれた地区である。本地点は既出遺物も若干の土器片の出土があったのみで完形品は皆無であり、従って拓影に図示したものは少數である。しかし、最も興味深いことは、縄文中期初頭の土器片の出土である。破片も比較的大きく良好な残存状態であった。

1・2は縄文中期初頭の梨久保式土器である。1は、横位の半隆起線文、斜行した細線文、連続瓜形文とて文様構成されている。2は、斜行する細線文の部位破片であるが別個体である。茶褐色を呈し硬く焼きしめられている。

3は、平行沈線文が施されている縄文晩期末葉の水II式に類似するが、小片なので断定はし難い。黒褐色を呈し、焼成・調整は該期の土器に比較したならばやや粗製である。しかし、故藤沢宗平氏は前述した『信濃』にて、これ等の縄文晩期土器口縁部片を10点程拓影で図示しておられ、出土地を穴田・久保下に顯著であると記しておられる。今回の整理では穴田地区で1点のみしか残存していなかったが、藤沢宗平氏の示された拓影を比較した時、やはり縄文晩期に位置付けられよう。

4は、条痕文を地文としたもので硬く焼きしめられているが胎土が荒い。5は、波状文と波状文の間にやや横位気味の斜走短線文が描かれている。6は、波状文が描かれているが摩滅している。弥生中期後半～後期初頭に位置付けられるものである。

7は、須恵器鉢の底部～胴下にかけての破片である。赤味がかった釉が塗られている。内面のロクロ調整もきれいである。

2) 大清水地区 (第30・31図)

大清水地区は、穴田の隣接地で北東に位置する。地名の如く湧水の豊富な地域であり、近年のマス池工事により後述する本製品の貴重な資料が出土している。

1～5は、弥生中期後半～後期初頭の土器片である。特に1～3は摩滅が著しい。1は、口



第30図 大清水地区出土の土器拓影 (1:3)

唇部に縄文が施され、口辺部にはかすかに縫の細線文が描かれていることがわかる。2も、蛇行気味の細線文に三角の押引きが2条、細線文の周りに施されている。類例の少ない土器である。

3は、波状文および縫に5条の細線文、波状文の間を斜位の細線文が施されている。4は口縁部に短線文が描かれた夔形土器である。5も同じく夔形土器で口縁部に孔が穿たれている。焼成が硬く、横ナデ調整が顕著である。

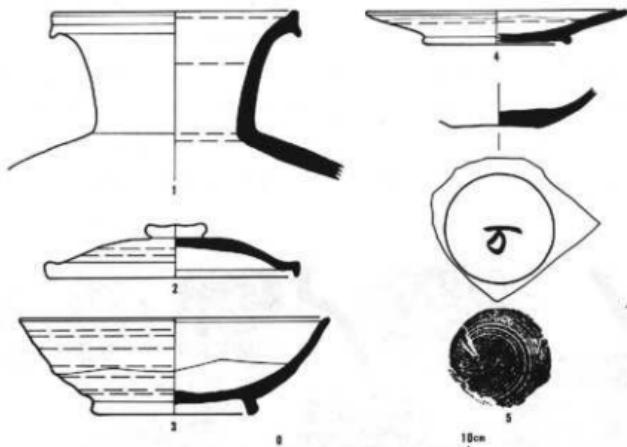
6・7は、須恵器である。6は高环の环部片であり、3本の稜線の区画帯の間には竪状の工具で描いた斜線状の列点文が配されている。7は、格子叩目文および平行叩目文が付されている細片である。

8は、すり鉢で中世～近世のものであろうとおもわれる。

第31図は、大清水地区出土の土器実測図である。詳細は第2表に明記してあるので、土器の説明は省略した。

本地区から出土した土器で実測できたものは、須恵器3点、灰釉陶器2点の計5点である。土師器では、実測の可能なものが皆無ではあったが、小片はかなり出土している。

2の須恵器蓋、3・4の灰釉陶器、5の糸切り底部をもつ墨書き器の須恵器底部から、これ等の土器群は、10世紀～11世紀に位置付けられるとおもわれ、国分期後葉に比定されるであろう。



第31図 大清水地区出土の土器実測図（1：3）

第2表 大清水地区出土器一覧表

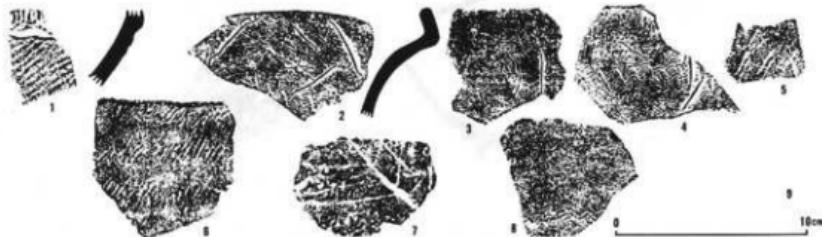
博団番号	器種	部位	法量	器形の特徴	調整(外面)	調整(内面)	備考
31-1	須恵壺	口 胴 上	13.0 — —	口部はやや直立し、肩の張る形態を呈す。	ロクロ痕	ロクロ痕	色調灰褐色
31-2	須恵壺		13.0 2.7 —	横みは偏平気味であるが宝珠形を呈す。肩部は直立する。天井部は低い。	ロクロ痕	ロクロ痕	色調青灰色
31-3	灰陶高台壺		16.3 8.8 5.0	口辺部は底部より内湧気味に開いて立上る。縁は口辺にかけられている。	ロクロ痕	ロクロ痕	色調灰色
31-4	灰陶高台盤		13.7 7.8 1.8	台部より口辺まで大きく直線的に開いて外反する。縁は口辺にかけられている。	ロクロ痕	ロクロ痕	色調白灰色
31-5	須恵壺	底	— 4.8 —	墨書き土器で底部に「万」の文字が記されている。	ロクロ痕 希切り底部	ロクロ痕	色調赤褐色 。

3) 馬場地区 (第32~34図)

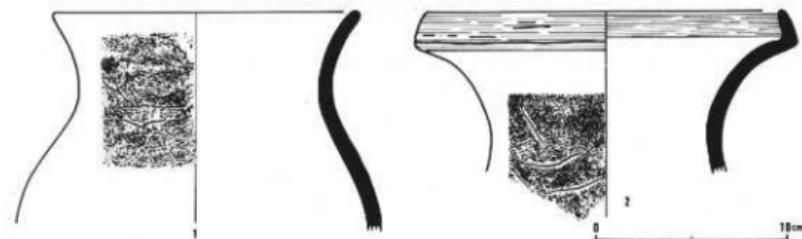
馬場地区は、穴田の隣接地で北側に位置し、現在はそのほとんどが住宅地化されている。

第32図拓影の1は、繩文土器である。連続瓜形文、その下に波状の沈線を横位に描き、地文には繩文が施されている。赤褐色を呈し焼成が硬い。繩文中期初頭の土器片であろう。

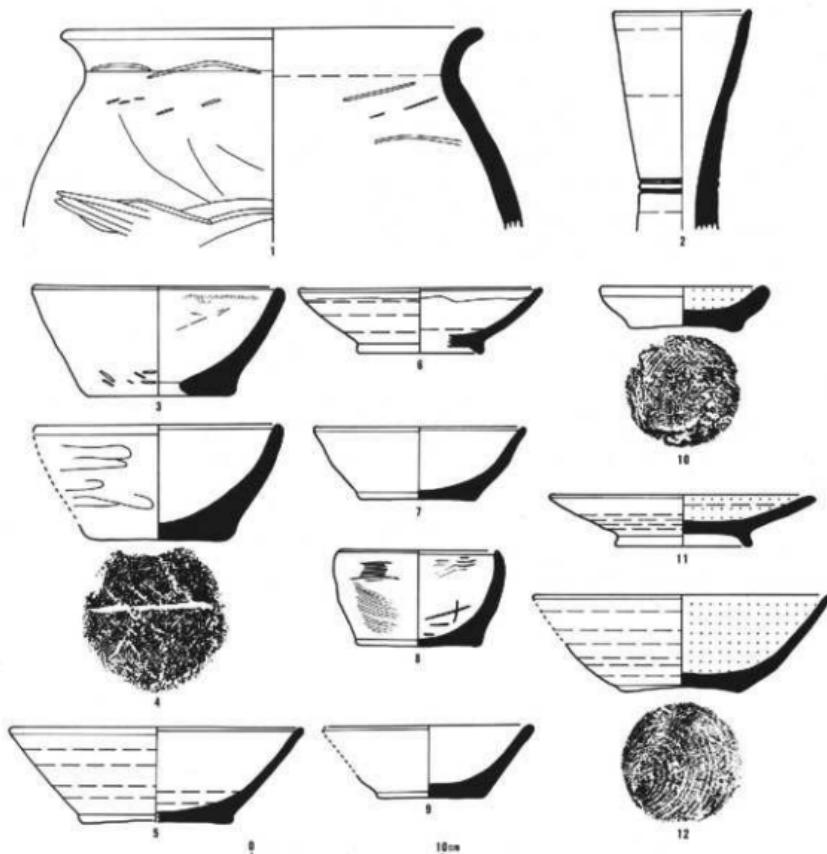
2~5・8は、口辺~頸部にかけて波状文が描かれた弥生後期後半の土器片である。2は、壺形土器で口辺に段を有し口縁は内屈し、頸部に波状文が描かれている。4も同器種で同じく頸部に波状文が描かれている。硬く焼きしめられ茶褐色を呈する。3・5・6・8は、波状文が描かれた菱形土器で、胎土が粗粒で摩滅が著しい。また、6は波状の振幅が狭く乱れている。



第32図 馬場地区出土の土器拓影 (1:3)



第33図 馬場地区出土の弥生式土器実測図（1：3）



第34図 馬場地区出土の須恵・土器実測図（1：3）

第3表 馬場地区出土土器一覧表

括弧番号	器種	部位	法量	器形の特徴	調整(外面)	調整(内面)	備考
33 1 1	弥生 甕	口 下 刷	16.5 — —	口縁くの字状に外反	口縁、波状文(不規則) 頭部、蓋状文1帯 刷上、波状文(不規則)	口縁、横ナデ 頭、横ヘラミガキ	色調 茶褐色 焼成度い
33 1 2	弥生 甕	口 下 刷	18.8 — —	口縁は急げきに内側して立 上る。 頭部強く外反	口縁、横ハケ整形 頭部、B条の波状文 1帯	口縁、横ナデ 頭部、横ナデ	色調 茶褐色
34 1 1	土師 甕	口 下 刷 上	22.0 — —	口辺部短い。くの字状に外 反する。体部ふくらむ。	横ナデの後ヘラケ ズリ	横ナデの後ヘラケ ズリ	色調 緑色 焼成度い
34 1 2	長頸 甕	口 頸部	7.3 — —	口頸部は、下部にきてすば む。2条の波状が施されて いる。	ロクロ底	ロクロ底	色調 青灰色 色調 棕色
34 1 3	土師 甕		13.3 7.8 5.7	口辺部は底部より内沟気味 に開いて立ち上る。 底2cmの孔を焼成後に穿っ てある。器肉厚い。	横ナデの後ヘラケ ズリ	横ナデの後ヘラミ ガキ お焦げ痕あり	色調 棕色 焼成度い
34 1 4	土師 甕		13.0 7.7 6.0	口辺部は底部より内沟気味 に開いて立ち上る。 平底を呈す。	横ナデの後ヘラケ ズリ 底部木の葉压痕	横ナデ	色調 茶色 金雲母、砂粒多い
34 1 5	土師 甕		15.3 8.0 4.8	口辺部は底部より直線的に 開いて外傾する。 平底を呈し、器肉うすい。	ロクロ底 底部糸切り	ロクロ底	色調 白灰色 調整、焼成良好
34 1 6	灰釉 高台 甕		12.7 6.6 3.4	台部より内沟気味に開いて 立ち上かる。 平底を呈す。	ロクロ底	ロクロ底	色調 茶褐色 焼成度い
34 1 7	土師 甕		11.0 6.0 3.8	口辺部は底部より内沟気味 に開いて外傾する。	横ナデ 摩滅している	横ナデ ロクロによる左巻の 渦巻あり	色調 黒褐色 焼成度い
34 1 8	土師 甕		8.3 6.6 5.0	口辺部は底部より内沟して 立ち上る。 平底を呈す。	横ナデの後クシバ状 工具による調整及び 指頭による調整	横ナデの後クシバ状 工具による調整及び 指頭による調整	色調 茶色 砂粒多く、粗雑
34 1 9	土師 甕		11.0 5.5 3.8	口辺部は底部より直線的に 開いて外傾する。 平底を呈す。	横ナデ 摩滅著しい 底部糸切り	横ナデ 摩滅著しい	色調 棕色 焼成度い
34 1 10	土師 甕		8.8 6.0 2.0	口辺部は底部より内沟気味 に開いて立上る。 器肉厚い。	横ナデ 底部糸切り	横ナデ 内面黒色	色調 棕色 焼成度い
34 1 11	土師 高台 甕		14.0 7.2 2.8	台部より直線的に大きく開 いて立上る。	ロクロ底 底部糸切り	内面黒色	色調 棕色 焼成度い
34 1 12	土師 甕		15.6 6.2 4.8	口辺部は底部より内沟気味 に開いて外傾する。 上底を呈す。	ロクロ底 底部糸切り	内面黒色	色調 緑色 焼成度い

7は、木の葉压痕の底部片である。

第33図は、本地区出土の弥生後期後半の土器である。詳細は一覧表に記してあるが、1の壺形土器は簾状文を有する。本遺跡出土の破片類の中では簾状文は少數である。2の壺形土器は、口縁部に段を有し、横ナデが顯著であることと段部の貼り付けが露顕している。これ等の土器は、本遺跡の西側段丘上に位置する上の林遺跡のY7号、Y12号、Y14号住居址から出土しており、弥生後期後半の中島式期に比定されるであろう。

第34図は、須恵・土師器の実測図である。本遺跡出土の土師器は焼成が硬く、かなりの高温で焼かれているものとおもわれる。また、本遺跡の東側段丘上には金雲母を多量に含んだ良質の粘土が産出されており、この粘土の影響もかなりの比重を占めるではあろうが、金雲母がキラキラ光ってなめらかな器膚である。

3の瓶は、焼成後に径2cmの孔を穿ったもので、当初から瓶として作られたものではなく、4の环と全く同一の器形である。器肉が厚く安定感のある环である。

2の須恵器長頸壺口頸部は6～7世紀の古墳からの出土例がほとんどであるが、本遺跡での出土状態は判然としていない。

図示した土器は、2の須恵器を除いた他は、10世紀～11世紀の国分寺後葉に比定されるものがほとんどである。

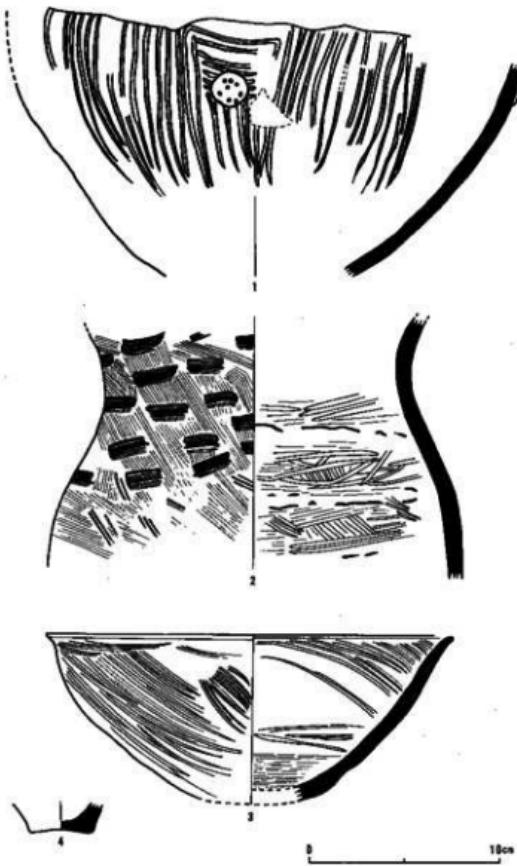
4) 曽根田地区（第35・36図）

本地区は、穴田地区の東南側に位置し、橋結、御室田地区と隣接する。

第35図1は、繩文中期初頭の梨久保式土器片である。頸部くびれ部に帯状の粘土紐を貼付し粗雑に四角～三角形状に刺突している。繩文を地文とし、その間に蛇行懸垂文が描かれている。



第35図 曽根田地区出土の土器拓影（1：3）



第36図 普根田地区出土の土器実測図（1：3）

さらに、粘土紐貼付上部は、振幅の広い波状沈線文が描かれている。赤褐色を呈し焼成は硬い。

2は、平出3Aの土器片である。繩文中期初頭～中葉にかけての土器群と伴出され、前述した本遺跡西側段丘上の上の林遺跡からも破片が出土していたが、本遺跡からの出土は、今回の土器整理中に発見したものである。

3は、口唇部に繩文が施された菱形土器口縁部である。4は、見事な輪圧痕が残った口縁部片である。図版30の拡大写真を参照していただきたい。5条の波状文が2帯描かれた菱形土器である。

5・7は綾杉状の短線文が描かれた、弥生中期後半の土器片である。

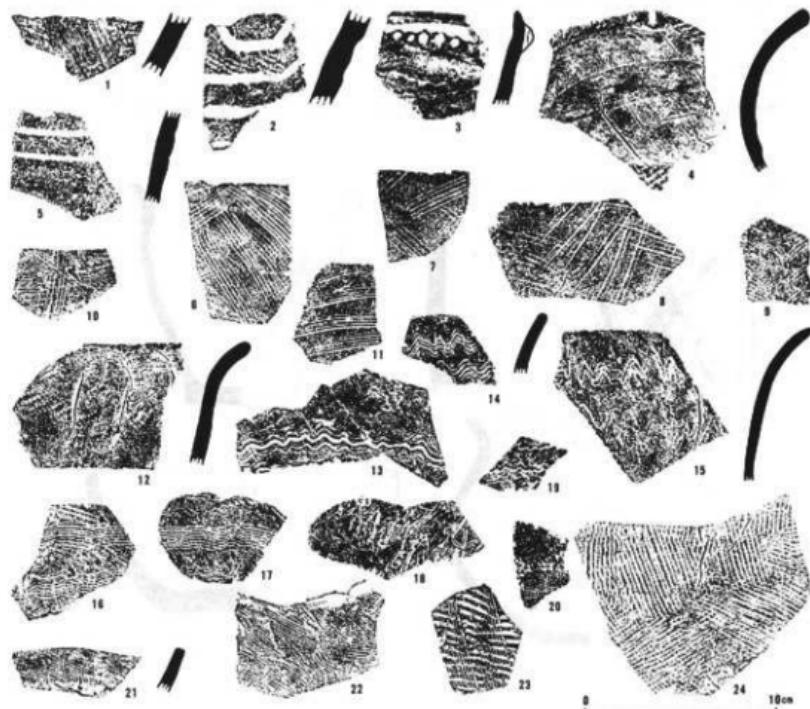
8は、波状文が描かれた菱形土器の頸部片である。

第36図1は、コの字重ね文をもつ台付甕の胴下部片である。同文様をもつ小形台付甕が西側段丘上の上の林遺跡から出土している。中期後葉北原式に比定される。2も同じく台付甕ではなかろうかとおもわれる。最大径が体部と口縁が等しくなる。同類の土器が飯田市座光寺原遺跡から出土している。

3は、口径21.3cmを測る、器肉のうすい壺形状の土師器である。クシバ状工具による調整が顯著である。4は、ミニチュア土器の底部片である。ヘラケズリ、横ナデ等の調整がされており手捏ではない。

第3表 首根田地区出土土器一覧表

番号	器種	部位	法量	器 形 の 特 長	調整(外面)	調整(内面)	備 考
36 — 1	弥生 甕	胴 下	—	胴下部のカーブから直を有する台付甕であろう。	コの字重ね文様	横ヘラミガキ	色調 茶褐色 焼成硬い
36 — 2	弥生 甕	頭 —胴	—	頭部くの字状にくびれ、体部張り出す。最大径は体部と口縁が等しくなる。	頭部、7条の短縦文 クシバ状工具による 調整	横ヘラミガキ	色調 茶褐色
36 — 3	土師 甕	口 —底	21.3 (9.0) 6.0	外輪しつつ内済し、口辺部 付近でやや外に開く。 器肉うすい。	横ナデの後ヘラミ ガキ	横ナデの後ヘラミ ガキ	色調 棕色 一部黒斑あり 焼成硬い
36 — 4	ミニ チュア	底	— 3.3 —	上げ底氣味の平底で、やや 外輪して立上る。	縱方向のヘラケズリ	横ナデ	色調 棕色



第37図 御室田地区出土の土器拓影 (1 : 3)

5) 御室田地区 (第37~39図)

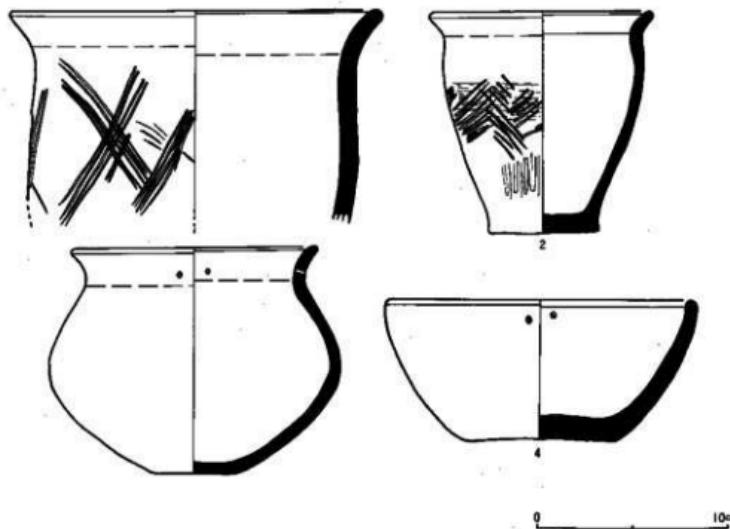
御室田地区は、穴田地区とは離れており、橋詰・曾根田・久保下と隣接する。曾根田地区と共に住居地帯であったことが予想される。特に本地区は、手捏土器・高环が多量に出土しており、高环の実測は6点ではあったが、破片は30個体にもものぼるものである。その出土状態が不明確であり、遺跡の性格が判明でき得ない。

第37図1は、磨消繩文の細片である。器肉が厚く、褐色を呈し焼成が硬い。2は、磨消繩文とヘラ描沈線が施された、長頸壺の破片である。1と2は器肉の厚さ、磨消繩文の2点の共通点があり、1・2は共に弥生中期前葉の土器であるとおもわれる。

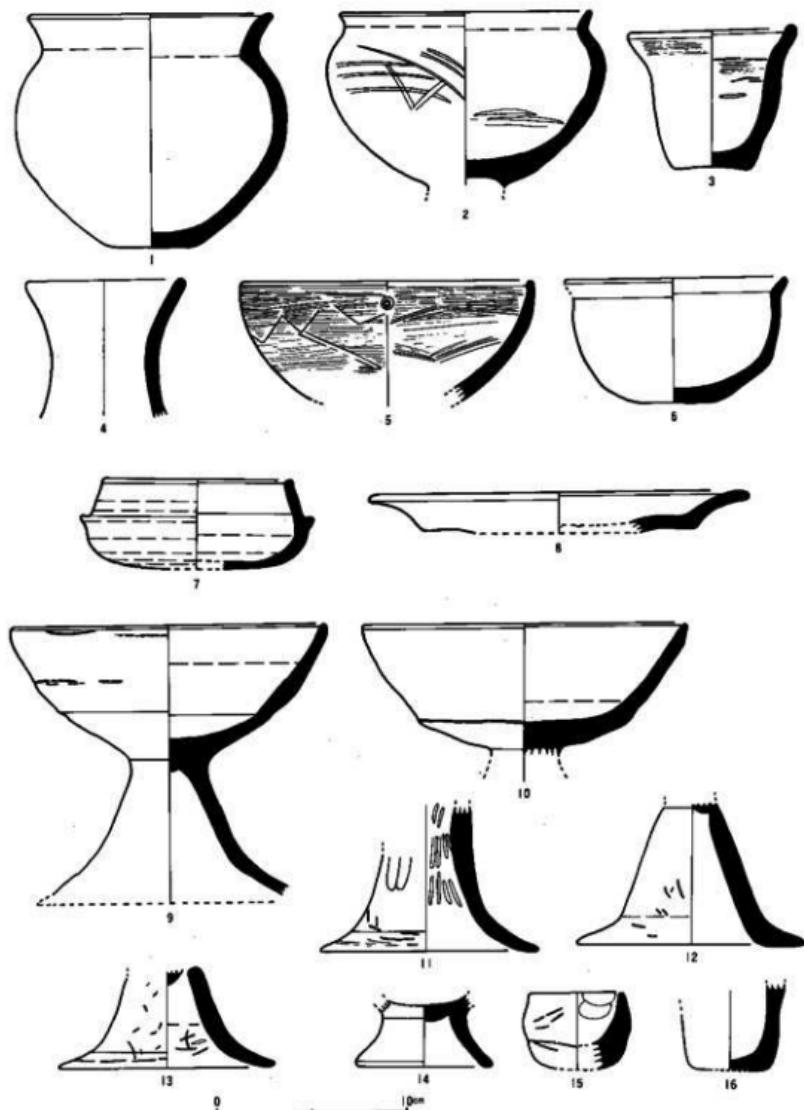
3は、隆帯に連続刺突が施され、加曾利B II式以降（繩文後期）の土器に類似するが判別し難い。褐色を呈し、調整が粗雑である。

4は、壺形土器の口縁～頸部片で口唇部に半月形刺突文が山形状に突起し、四単位に構成されるものとおもわれる。5も、壺形土器の頸部片である。頸部に2条の沈線が施されており、長細頸となろう。

6~11は、構描き条痕文様の破片である。焼成が硬く褐色を呈す。7・8は内面もヘラで磨



第37図 御室田地区出土の弥生式土器実測図 (1:3)



第39図 御室田地区出土の須恵・土師器実測図 (1 : 3)

かれて膚がなめらかである。

12は、縄文がうっすら認められる壺形土器であるが、調整、器肉、焼成等から明らかに弥生式と判別される。13~19は波状文で構成された土器片である。13・16・17は褐色を呈し、焼成が非常に硬い。14・15・19は茶色を呈し、焼成はやや硬い。20は、押引文と細線文が施された細片である。同類の土器片が大清水地区からも出土している。

21・22は、補描き調整された土師器である。焼成が非常に硬く、かなり高い温度で焼かれているものとおもわれる。

23・24は須恵器片である。23は格子印目文が、24は平行印目文が付されている。

第38図は、御室田地区出土の弥生式土器である。黒褐色を呈し、硬く焼きしめられているが湿気の多い土中の遺存は剥落が著しい。文様はヘラ描きによる簡単な綾杉文やX状の文様が胴部に描かれているのみである。3・4の2つの孔を有す土器は無文であるが、3は口唇部にわずかに縄文が施されている。さらに、第39図4は、壺形土器の口辺部片である。朝顔状の口縁を呈す。

1・2の壺形土器の器形は、量大径を口縁にもつ弥生中期全般にわたってみられる特徴であり、口辺部の外反に多少の隔たりがみられるのみである。

3の孔を有す壺形土器の出土例は、蓋を有する無頸壺が栗林式にあり、4の环形土器と共にあまり例のみられないものである。赤色塗装もなく、文様もなく、簡素化されており、千曲川流域の栗林I・II式の華やかさがみじんもうかがえない。

第5表 御室田地区出土弥生式土器一覧表

掲番号	器種	部位	法量	器形の特徴	調整(外面)	調整(内面)	備考
38 1 1	壺	口 唇	19.5 — —	口辺部外反し、頸部へ胴部にかけて直立気味である。	口縁、横ナデ 頸部~胴、 6条のハケによるX状 の文様	口縁、横ナデ 頸部、斜めハケ調整	色調黒褐色 剥落著しい
38 1 2	小型 壺		11.7 5.7 11.6	口辺部外反し聞く。 頸部の字状に外反し、内 湾気味に底部から立上る。	横ナデ(口縁) 胴部、綾杉文 胴下、ヘラミカキ	横ナデ(口縁)	色調黒褐色 剥落著しい 焼成硬い
38 1 3	壺		13.0 4.5 11.8	口辺部の字状に外反し体 部中央が張り出し最大径と なる。2つの孔を有す。	横ナデ 口唇部に縄文が施さ れている。	横ナデ	色調黒褐色
38 1 4	环		16.5 8.0 7.5	内湾気味に立上る。 2つの孔を有す。 器肉厚い。	横ナデ	横ナデ	色調茶色
39 1 4	壺	口	8.4 — —	口頸部中間でくびれ朝顔状 に口縁が聞く。	横ナデ	横ナデ	色調黒褐色

第6表 御室田地区出土須恵・土師器一覧表

器名 番号	器種	部位	法量	器形の特徴	調整(外面)	調整(内面)	備考
39 — 1	小型 甕		12.8 4.5 12.5	口辺部の字状に外反し全体中央が球形状の丸窓を呈する。	横ナデ	横ナデ	色調茶色
39 — 2	台付 甕	口 底	13.2 — —	口辺部や直立気味に開き全体球形状に張り出す。	横ナデの後ヘラミ ガキ	横ナデの後ヘラミ ガキ	色調 茶色
39 — 3	小型 甕		8.7 4.0 7.0	腹部のくびれ弱く、口辺大きく開く。	横ナデ(口縁) 刷下~下ヘラミガキ	横ナデ(口縁)	色調 茶色 刷下~底部にかけて黒斑あり、施成暖い
39 — 5	环	口 胴	15.4 — —	丸底で茎線山辺を呈する1つの孔を有す。	クシバ状工具により 調整及び波状の粗雑な文様あり。	クシバ状工具により 調整	色調 棕褐色
39 — 6	鉢		11.7 4.0 6.5	口辺部は強く外反して開く 最大径は口縁にある。 平底を呈する。	横ナデの後ヘラケ ズリ	横ナデ	色調 茶色
39 — 7	須 環		10.0 8.0 (4.8)	受部を有するので口辺部は内 傾する。器肉うすい。	ロクロ底	ロクロ底	色調 青灰色
39 — 8	大 甕		20.0 (9.0) (2.2)	器高は低く、偏平状の大甕 である。	横ナデ	横ナデ 粗雑である	色調 茶色 施成暖い 砂粒多い
39 — 9	高 环		16.7 (13.0) 14.5	口辺ゆるやかに内側し、 底部に縫を有す。縫部はラ ンバ状に開く。 ホゾは脚部に属する。	横ナデ	横ナデの後縫方向の ヘラケズリ	色調 赤褐色 砂粒多い
39 — 10	高 环	环 部	17.0 — —	口辺は内側する。环底部に 縫を有し、大きく外反する ホゾは脚部に属する。	横ナデの後縫方向の ヘラケズリ	横ナデ ヘラケズリ	色調 茶色 一部黒斑あり
39 — 11	高 环	脚 部	— 11.5 —	脚部はゆるく外向する	横ナデ 脚部上ヘラケズリ	横ナデ	色調 棕褐色 内面一部黒斑あり 余空部多い
39 — 12	高 环	脚 部	— 12 —	脚部は強く開く。 ホゾは脚部に属する。	横ナデ	横ナデ	色調 茶色 金雲母多い
39 — 13	高 环	脚 部	— 11.4 —	脚部はゆるく外向。 ホゾは独立する。	横ナデの後ヘラミ ガキ	横ナデの後ヘラミ ガキ	色調 茶色 内面石英粒多い
39 — 14	高 环	脚 部	— 6.2 —	脚部は円錐状に開く。 ホゾは脚部に属する。	縫方向のヘラケズリ	横ナデの後ヘラケ ズリ	色調 茶色
39 — 15	手 提	口 底	5.0 4.0 4.0	底部の器肉厚く、口辺は極 端に薄くなる。器形はゆが み凸凹が生じている。	指頭による調整	指頭による調整	色調 黒褐色
39 — 16	手 提	脚 上 底	— 4.0 —	底部から直立して立上る。 平底を呈す。	指頭による調整 後ヘラケズリ 粗雑である。	指頭による調整 後縫方向のヘラケズ リ。粗雑である。	色調 棕褐色

第39図は、御室田地区出土の須恵・土師器をまとめた。

図示し得たものは、小型甕1点、同台付甕1点、壺1点、鉢1点、大盤1点、高环6点、手捏土器2点、須恵器では有蓋环1点がありバラエティーに富んでいる。

1・2の小型甕および台付甕は、胴上部に最大径を有し、短頸で肩が張る須恵器甕の模倣であろうとおもわれる。土師器においては、最大径を胴中央に有し、頭部・底部にかけてはゆるやかに内湾するものが多い。過去に発表された故藤沢宗平氏の分類に従ったが、登呂遺跡から酷似の土器が出土しており、1~3は弥生式土器に入るべきものかも知れない。

5の素縁口辺を呈する壺は、孔を有し、クシバ状工具により波状の文様を粗雑に刻印してある。また、8の大盤は器高2.2cmを測り、現在、各家庭で使用しているお皿と変りないものである。鬼高窯の伴出列がみられる。

9~14の高环は、脚部破片が本地区および曾根田地区にかけて30点程出土しており、大場盤雄氏は、「上伊那郡箕輪町発見の祭祀遺物」として発表されている。15、16の手捏土器と共に祭祀遺物の多量の出土であるが、この両地区は、弥生~土師器片の出土が多量にあり、住居址地帯であったことは多分に予想される。

これ等の土器群の編年的位置付けは、和泉期後葉から鬼高窯前葉に比定される。7の須恵器有蓋环も鬼高窯の土器と伴出されている例が多い。また、高环は、和泉期後葉に比定されるものである。このように、御室田地区的土師器は、和泉期後葉から鬼高窯前葉であるのに対し、他地区的土師器は時代が下って国分期であり、時代の変遷が如実に読みとれることも箕輪遺跡の解明に大きな糸口を与えてくれるものとなろう。

(島田 恵子)

3. 木製品・その他

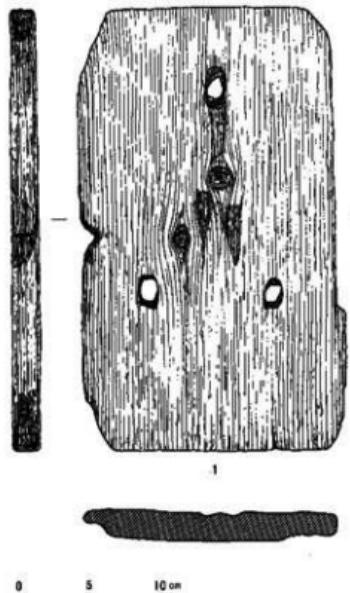
1) 田下駄 (第40・41図)

田下駄の出土は15個程あったことが、故藤沢宗平氏の報告に記されているが、現在箕輪町郷土博物館に保管されているものを、第40・41図に図示した。

1は、長さ32cm、巾19cmを測り、緒孔は1.2cm×1.5cmを測る。厚さは2cmで、裏側は焼かれている。木櫛の杭も最初から先端を焼いたものが多數出土しているこそから、藤沢宗平氏は「腐蝕を防ぐためではなかろうか。」と述べていられる。

第50図2は、昭和56年度調査で出土した田下駄と規格が同一である。長さ46cm、巾20cmと推定される。緒孔は、1.4cm×1.2cmを測り、上、下先端側面は面取り加工されている。

3・4は、緒孔が残存した残片である。規格、形状は2の田下駄と同一であろうとおもわれ



第42図 既出遺物の田下歎実測図 No.1 (1:4)

る。このように田下歎は2種類に分けられる。1の長さが短かく巾の広い比較的小型なものと、横巾は同じではあるが、縱に長い2、3とそして、本年度調査において出土した田下歎等がある。

鼻緒孔の位置および孔のあけ方は、ほぼ統一されているが、縱に長い2は、上、下先端にかなりのゆとりがある。

(島田 恵子)

2) 農耕具(第42図)

農耕具を第42図に図示した。2点という少數であり、耕すための鍬は石器に依存していたことも想定される。石器の章でも解れたが、出土した石器類は、自然面を残した合理的な剝離調整がなされており、明らかに繩文時代の石器とは区分されるものであった。そして出土数も13点を数え、木製農耕具に比べてはるかに多い。

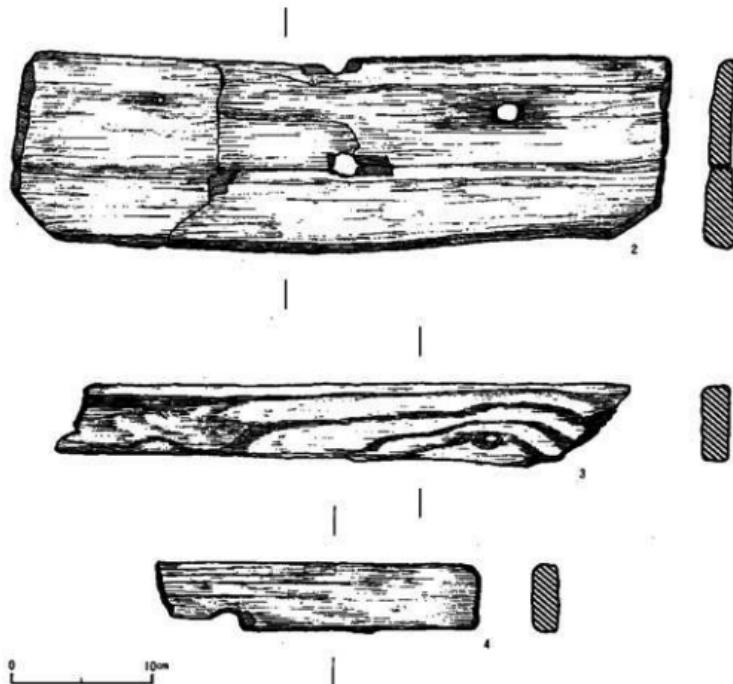
こうした点からみても、石器への依存度は大きかったものと考えられる。

第42図1は、長さ32cm、巾12cm、厚さ1.8cmを測る。基部に柄を受ける孔があげられ、基部上端は柄を着けるための抉りがもうけられている。柄と身を別々につくる着柄鍬である。その複元図を図示したが、これは、九州の長崎県里田原遺跡出土のものである。類似品は、滋賀県大中の湖南遺跡、大阪府安満・池上遺跡等から出土している。

鍬は、浜田地区からの出土であり、木櫛列に添って田下歎と共に出土したものであることが第1図の既出遺物出土地点からうかがえる。

第42図2は、穴田地区出土の鍬である。その複元図を図示したが、これは、弥生中期の福岡県鹿部山遺跡出土のものであるが、同様な鍬は、福岡県湯納遺跡、大阪安満遺跡、九州多々良遺跡等から出土している。

摩滅してはいるが、長さ22cm、巾約6cmを測る。着柄の孔は、 $6.5\text{cm} \times 3\text{cm}$ でかなり頑丈な柄が着けられる比較的大きな孔である。材質はクリを使用している。また、厚さは2.8cmを測り1の鍬よりは1cmも厚く、小型ながらも頑強なつくりである。巾が他の遺跡出土のものと比較して狭く、狹鍬の部類に入る平鍬であろう。これ等は、畿内において弥生前期より出現している。



第41図 斎出遺物の田下駄突測図 No.2 (1:4)

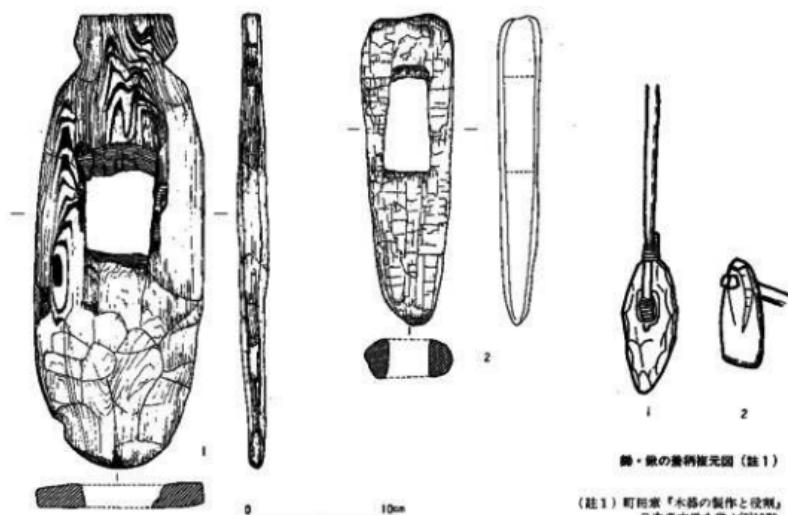
3) 矢板 (43図)

矢板は、橋詰地区より出土した。

第43図1は、長さ52.7cm、巾19.5cm、厚さ3.4cmを測る。左上端が欠損しているのみではほぼ原型を保っている。

2は、長さ50.5cm、巾17cm、厚さ2.8cmを測る。上端が多少摩滅してはいるが、土に打ち込まれる先端の鋭い尖りからみても、ほぼ原型であるとおもわれる。

木櫛杭に比列して矢板の出土は2点という少量である。本年度調査で出土した木櫛列の杭は簡単で粗雑に組まれていたことからみても、畦をそれほど強化しなくとも良い条件があったものと考えられる。



第42図 既出遺物の錦・糸実測図（1：4）

錦・糸の実測図（註1）

（註1）町田家「木器の製作と役割」
日本考古学学会誌(2)1979

先端は、鉄器によりVの字状に削られている。材質はサワラを年輪に沿って削いだもので、相当の巨木であったものとおもわれる。

4) 田 舟（第44図）

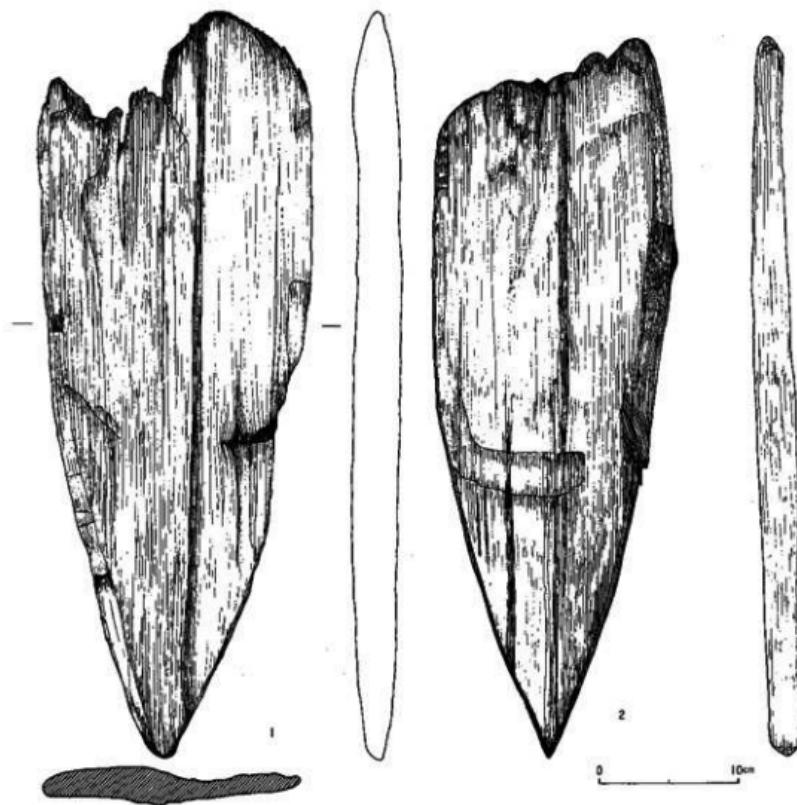
田舟は、橋詰地区より出土した。小川守人氏のお話によると土地改良工事で耕作土を取り除いた30~40cmの地点より伏せた状態で出土したとのことである。

全長112cm、巾39cm、深さ15cmを測る。一木造りで船形を呈す。紐を通して曳くための孔が2個存在し、2cm×2.5cm、2cm×1.6cmを測る。孔の存在しない後方は、肥料・種穂や苗等の出し入れが簡単にできるように縁が削りとられている。

5) 木製人形・木串（第45図~50図）

第45図・46図に人形・馬形および人形模造品を図示した。第47~50図は木串類である。

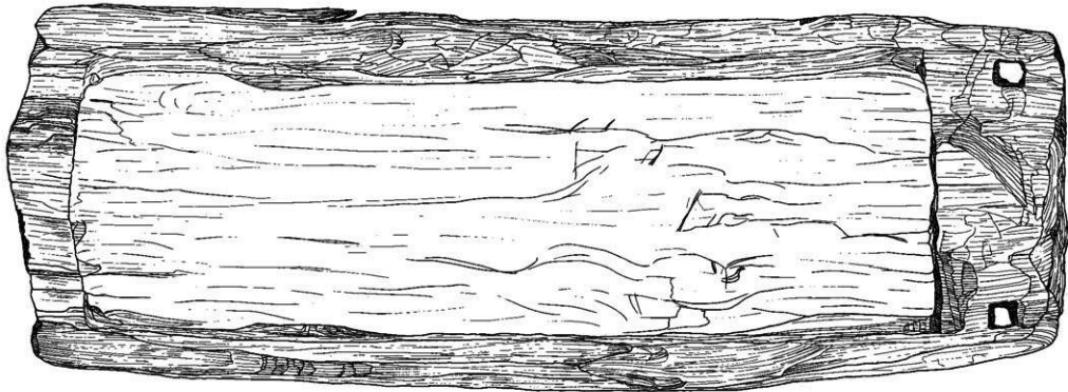
これ等は、後述するが年中行事の大祓に使われたものである。人形は、全長12cm、巾2.5cm、



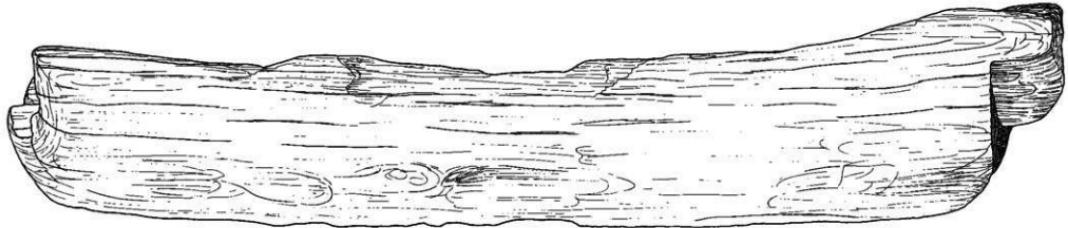
第43図 既出遺物の矢板実測図（1：4）

厚さ2mmを測る。頭部、胴部、脚部とに分かれており、頭部はひし形あるいは山形状に形取られ、首～肩部はなで肩・怒り肩状を呈し、胴下部から2本の脚の表現も合理的になされている。眉・目・口に刻み目を入れて顔を表現している。5は、背に鞍を表現した馬形である。

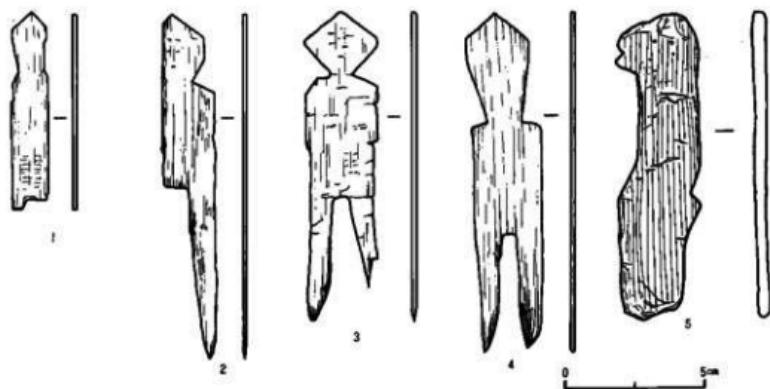
第46図は、第45図1・4と同様に頭部を山形状に形取っただけの簡単な形態を呈するもので、頭部の顔だけを表現した模造品的な人形であると考えられる。全長は10cm前後で巾は2.5cm～4cmを測るものと推測される。厚さは2mm～5mmで統一されていない。



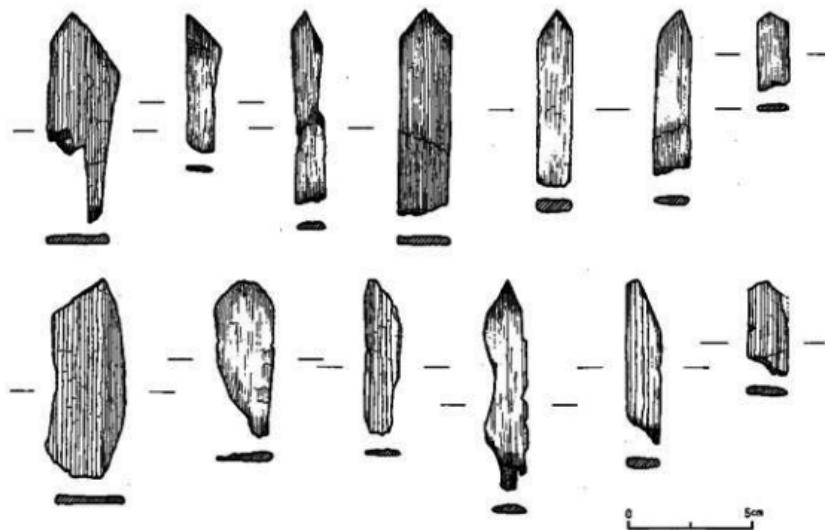
0
10
20cm



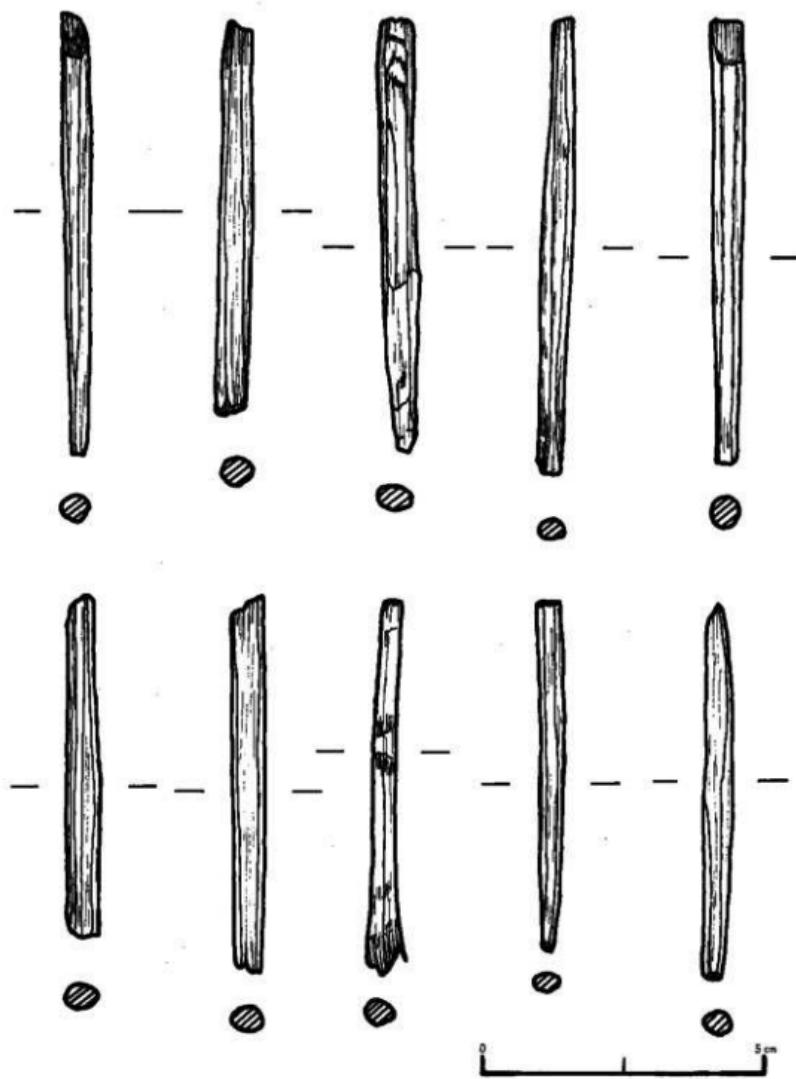
第44図 残出遺物の舟実測図 (1 : 4.28)



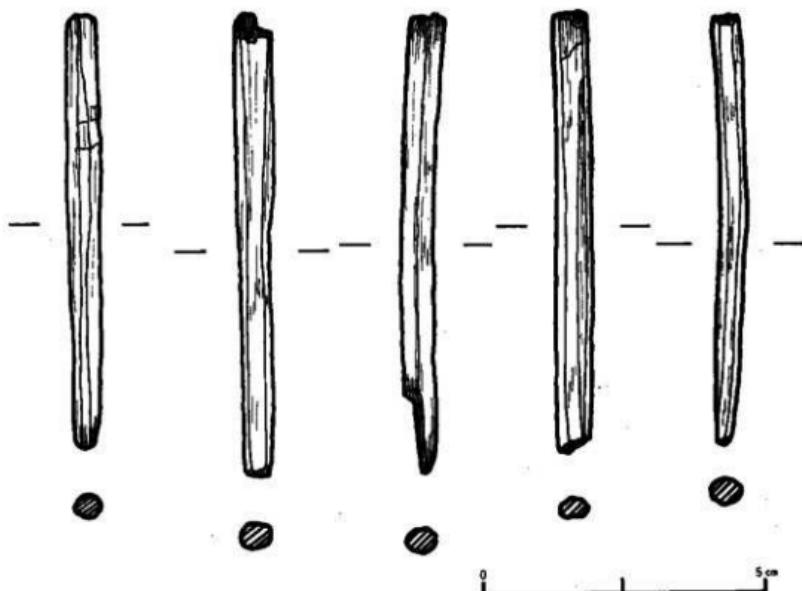
第45図 既出遺物の人形実測図No.1 (1 : 2)



第46図 既出遺物の人形実測図No.2 (1 : 2)



第47図 既出遺物の木串実測図No.1 (1:1)



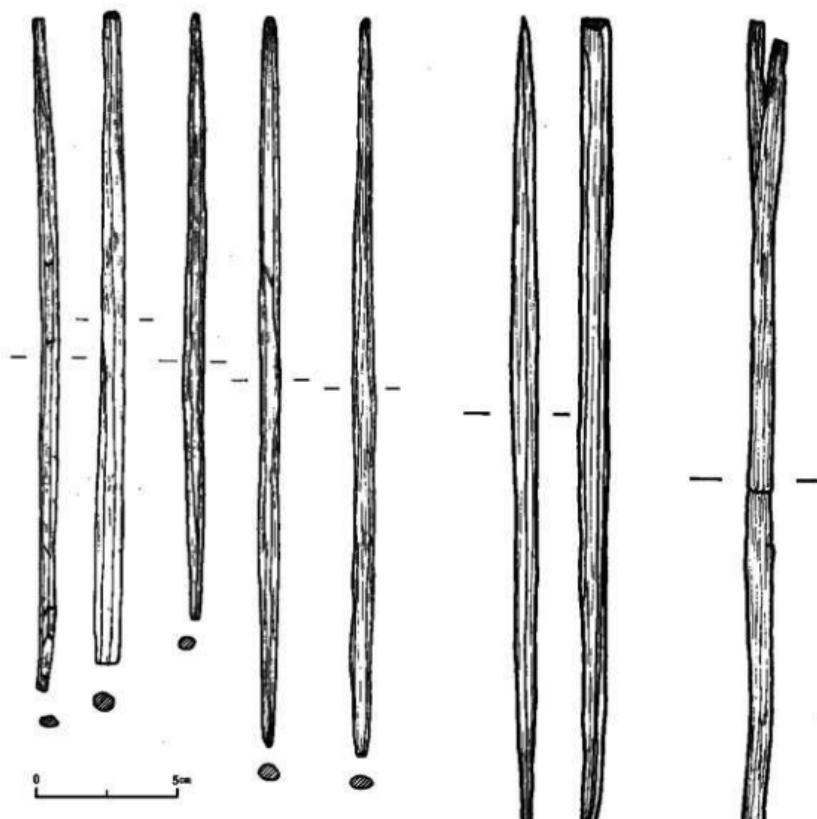
第48図 既出遺物の木串実測図No.2 (1:1)

第47図・48図は木串の折られた状態のものである。長さは6cm～8cmを測り、太さは5mm前後である。削りとった痕跡が顕著であり、楕円形状に統一された形を造り出している。また、第49図は、これ等の折る前の原形であろうとおもわれる。21.6cm～26.3cmを測り、これが2本～3本に折られたのであろう。

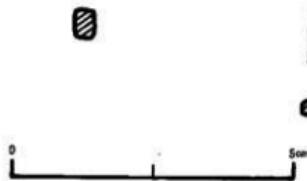
一方、第50図は、47図～49図とは区分されるものである。先端を鋭く尖らせており別の用途があったものと考えられる。長さも15cm～17cmを測り、断面は四角形を呈す。

さて、人形は、近年の発掘調査によって明らかのように、祭祀に用いられたものである。昭和55年春の平城宮跡発掘調査によって、木簡などと共に207点の木製人形が出土している。また、馬形や串も同時に祭祀具として使用されていたことが平安時代の年中行事に記録されており、これ等の詳細を記してみた。

『新勅撰集』の一首で百人一首でおなじみの歌の中に、
風そぐ らなる小川の 夕暮は 御歳ぞ夏の しるしなりける 従二位家陸
と歌われているように、この人形や串を使っておこなわれた『六月歳』は、年中行事としては



第49図 既出遺物の木車実測図 No.3 (1 : 2)



第50図 既出遺物の木車実測図 No.4 (1 : 1)

広く庶民の中にまで浸透した大行事であった。

『^{おほまつり}大祓』。大祓は毎年六月と十二月との晦に、百官男女をはじめ、天下万民の無意識の中に犯せる種々の罪汚れを祓う儀である。大祓の名称はすなわち国家的な祓の意を含む。大宝令・貞觀および延喜式に規定されるところである。いま、儀式、卷五・西宮記・江次第抄などによって、その儀を見るに、西刻（式には未刻という）、百官朱雀門前に参集する。神祇官は祓物すなわち人形・散米・解縄を路旁に置き、祓の馬を北西して立て、稻四五束を積む。祝師が南階より上り、中央壇上の座につく。神祇官が切麻を五位以上に頒け、祝師は大祓の祝詞を読み、神祇官は大麻を六位以下にひかせ（麻皮を棒の先に結びつけたものを引く）、式を終わり、上崩以下退出する。祝詞は延喜式、卷八に載っているが、文学としても注意すべきものであることは多言を要しない。その儀は、もと極めて厳重なものであったが、円融天皇の御代以後には衰頽し、応仁乱後は全く廃絶した。

大祓は朝廷において行なわれるものであるが、六月には民間においても一般に祓を行なった。これを「六月祓」（後撰集・夏）とも、「名越の祓」（古今六帖・拾遺集・夏）とも、「夏祓」（新拾遺・夏・新統古今・夏）ともいう。八雲御抄、卷三に「邪神をはらひなごむる祓ゆゑに、なごしといふや、河辺に五十串たて麻の葉などにてするや。夕又夜する事なり」とあり、枕草子（一四三段）に「故殿の御服のころ、六月晦日の日、大祓といふことにて、宮の出でさせ給ふべきを、職の御曹司をかたあしとて、宮のつかさのあいた所に渡らせ給へり」とある。宇津保物語、祭の使に、

「六月の比ひにもなりぬ。（中略）兵部卿のみこもおほん祓しに同じき川原桂川にいで給へるをよろこびて、（中略）あて宮、あふ事の名越のはらへしつるかなおほぬさならぬ人をみしとて」

とあるのや、同じく樓の上に「六月あつけれど（中略）晦日に御はらへし給ひに、二所ながら御せんいかめしうて川原に出で給へり」とあるのがそれである。また、和泉式部集に「思ふことみなつきねとて麻の葉を切りても祓へつるかな」とあるのも、六月祓のことである。これらは加茂川または桂川など京都に近い川でなされる祓であるが、また、海浜などでもなされることがある。例えば蜻蛉日記、中巻に、「六月になりぬ。（中略）かくながら廿日になりぬる。（中略）心ものべがてら、はまずらの方に祓もせんと思ひて、からさきへとてものす」とあるようなものである。浜松中納言物語、卷一に、

「六月のつごもりに、内裏より南に、大きなる川流れたり。その河の名をちやうかといふ。三のみこ、中納言ぐし給ひて御はらへし、涼み給ふ。面白きこと限りなし。」

とあるのは、中国における六月祓を空想したのである。その祓の作法は昔或いは茅をもって輪形を作り、これを潛り越えるのである。その輪は「茅の輪」とも、「背貫」ともいう。また、水辺に出て、麻・木綿などをかけた五十串を立てて、祓を行なう。日は必ずしも晦日に限

らす、六月中は何の日にでも行なわれたようである。浜松中納言物語に見えたように、六月
(1)
祓は水辺納涼の起源をなすとの説がある。」

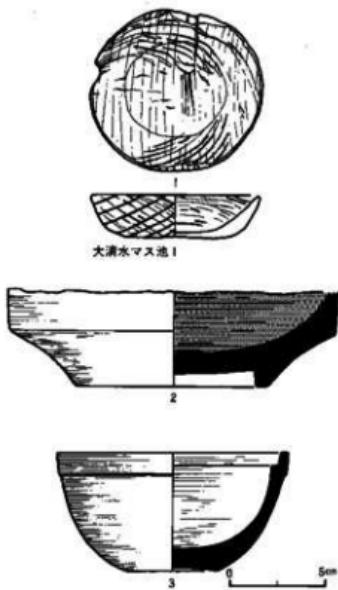
「また、大祓には、解縄や馬を祭祀具として使用しているが、「解縄は苧縄を捻って作るもので、この捻をもどして汚れを解くのに用いるという。また同じく、馬は耳ざとい動物で神(2)も馬のように願いを早く聞こしめせという意味まであるなどという伝説がある。」

以上のような、平安時代の文学や年中行事にみられる、大祓の義はその出土遺物によって笑輪遺跡に住んだ人々の間で行なわれていたことを立証している。人形、五十串、馬等があり、これ等は大清水地区より出土している。また、大清水地区から出土した土器類は、10世紀～11世紀に位置付けられるものが大半で、平安時代の年中行事として行なわれていたことを裏付けているといえよう。

註1 池田亀鑑著「平安時代の文学と生活」 1976

註2 山中 裕著「平安朝の年中行事」 1972

6) 木製椀 (第51図)



1の直型ともいいくべき木製椀は、口径9cm、器高2.2cm、底径5.5cmを測る小形である。極目にそって加工した横木どりであり、荒加工で磨研は行なわれていない。唐古や登呂遺跡出土のものより小型ではあるが、酷似している。大清水マス池より出土。

2は、内面が黒漆で塗布され、外面は黒の下地が塗られた後、赤漆が厚く塗られているが底面は黒漆が塗られている。器肉が厚い。口縁部及び外面の口辺部は剥落し、かじられたように摩滅した木肌が露出している。口径17.3cm、器高5cm、底径10cmを測る。曾根田地区の鴨田排水路より、29年3月5日出土。

3は、円形の小型椀である。ロクロ挽きのロクロ目が顕著である。ロクロ挽きした後に漆を塗布しただけで口縁等を磨いた様相はみられない。内外面共に下地の黒が染みこんでおり黒色を呈するが、外面口縁部に赤漆の残着が認められる。摩滅した部分のみ木肌の生地が露出している。木製椀製造過程における初原的様相を呈している。口径12cm、器高6cm、底径5cmを測る。鴨田排水路より29年3月31日出土。

第51図 既出遺物の木製椀実測図 (1 : 3)

これ等の木製椀の時代的位置付けは、1が弥生時

代に、2・3はロクロ挽きの痕跡や漆の塗布などにより平安末期頃まで下るものとおもわれる。平安時代より木製椀や皿状の漆器が食器として普及している。しかし、中央の貴族が使用したそれ等の漆器は、器内がうすくなめらかに漆が塗布されているが、本遺跡出土の椀は、生地の露出や漆の剥落で粗雑さが目立つ。だが、一般庶民にはまだまだ程遠いものであり、これ等の使用は限られた階級の者であったとおもわれる。

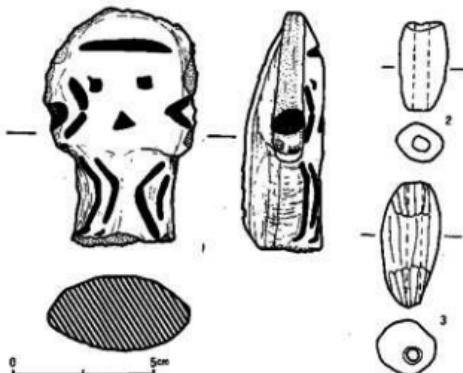
(島田 恵子)

7) 土 製 品 (第52図)

1は、縄文中期の土偶である。ひたいに一本のスジ、三角形の口元、長いまつげをあらわしている目、ほほにお化粧の青刺をあらわした2条の沈線があり、首にも対になって施されてい

る。耳飾りを表現した耳は抉り
型たれでいる。黒褐色を呈し焼
成は硬いが、裏面の調整が粗雑
でアバタ状を呈している。石英、
長石粒子が目立つ。

本遺跡において、縄文中期初
頭の土器片の出土は、穴田、馬
場、曾根田地区に見出されてい
る。しかし、住居址の存在等は
全く不明であり、中期後半に比
定されるであろうこの土偶は、
本遺跡の西側段丘上に存在する
上の林遺跡との関連も考えられ
よう。



第52図 既出遺物の土製品実測図 (1:2)

2・3は土錘である。孔は径5mm前後で、端部にヘラケズリが施されている。茶褐色を呈し
金雲母が目立つ。焼成は硬い。

8) 古 銭 (第53図)

出土した古銭は全地区にまたがった広範囲である。寛永通宝8枚が最も多く、鑄造一時中止
(1656)以前の「古寛永」である。中世の銭貨は、熙寧元宝——北宋錢、聖宋元宝——北宋錢、
開元通宝——唐錢の各1枚を図示した。

(島田 恵子)



小清水



穴田



曾根田



海宝田



橋詰



穴田



曾根田



小清水



曾根田



海宝田



田中城

第53図 既出遺物の古銭拓影 (1:1)

第5章 考察

第1節 調査のまとめ

箕輪遺跡は、昭和26年～29年にかけておこなわれた土地改良工事によって、多量の木柵杭、田下駄、田舟、土器等が出土したことにより、水田址の存在が明らかとなった。さらに、弥生式土器、石器が多数出土しており、木柵列は弥生時代の水田の水路や畦をつくっていた可能性が濃くなり、県下における初の水田址遺跡として注目されることとなった。

しかし、当時の土地改良工事に伴い調査が行なわれた訳ではなく、工事の合間をねって出土遺物地点の記録、採集をおこなった、小川守人氏および故小池修兵氏の努力がなかったならば、箕輪遺跡の存在と貴重な遺物の遺存はあり得なかつたであろう。このような努力の成果として、本調査が開始されたのである。国道バイパス工事に伴う道路帯であり、広大な地域にわたる箕輪遺跡のほんの一部分に発掘調査を実施したのであった。

沖積地である周囲には水田が広がり、その生育に水量を特に必要とする真夏の調査は、まさに水と泥とのたたかいの日々であった。本調査により3箇所の木柵列が検出された。遺物は、田下駄・土器片が出土した。

1. 木柵列

最初に発見されたT2区の杭は、ナラ材の丸太が使用され、土中に打込まれていた先端はかなり鋭利な刃物で4回程度に削られていた。

また、層序の面では現在の水田耕作土の下部に、さらにもう一時期の水田耕作土が在り、この水田耕作土中に杭が打込まれていた。そして、この杭出土地点から20m東寄りのグリッドからは田下駄が出土している。しかし、田下駄出土地点の深さは80cmを測り、杭出土地点と比較して約倍の深さである未分解泥炭層中からであった。こうした点からも、丸太使用の杭は近世を遡らないであろうと考えられる。

T4区から検出された木柵列は、南北に向って並列し長さ5m50cm、巾60cm～70cm(9・10グリッド)、長さ6m、巾50cm～70cm(20・21グリッド)を測る2箇所で発見された。

木柵列と木柵列との間隔は20mを測り、この間隔中に水田一枚が区画されているのであるが、本年度の発掘範囲が狭かったため、水田区画の復元には至らない。引続いておこなわれる57年度調査においておおよその復元は可能であろうとおもわれる。

この木柵列の杭の並列は荒く、畦道を築くために簡単に打込まれたものであろう。過去において発見された木柵列は、現在の水路の近辺に最も多かったことから考えると、今回の出土地は水路とは関係がないことも新しい発見である。

層序の面からみると、杭の打ち込まれていた部分はやはり以前の水田耕作土中であった。耕作土と耕作土の間には砂が堆積していて初期の水田が洪水等によって押し流されたことを示している。水田耕作土の下は礫層で、砂を混入した大小の礫で形成されており、耕土も浅く沼田ではなかったことを物語っていた。そして、T 2 区にみられた未分解泥炭層であるところの腐植植物の堆積層が全くみられない。このことは、この地帯が草の繁茂した河原ではなく、早い時代から耕作されていたことを裏付けているといえよう。そして、木柵列の並列が初期の水田耕作土中であったということも、きわめて大きな意味となろう。

また、打込まれていた杭は鉄器によって先端を尖らせており、その刃痕の回数は十数回を数えるものが多く、登呂遺跡出土の杭と酷似している。過去において付近より弥生時代中期の土器、石器等が出土していることからも、検出された木柵列はその年代に位置付けられる可能性も充分あり得よう。木柵列内上面から出土した土器片は、灰胎陶器 3 点、土師器坏口縁部片 1 点、同甕刷部片 1 点、弥生土器とおもわれる細片 2 点があり、これ等から弥生時代～平安時代までのいずれかの時代に位置付けられることはいうまでもない。

2. 遺 物

本調査で出土した遺物は、田下駄・杭・土器片・黒曜石剝片等である。

そのうち、田下駄と断定できるものは細片を含めて T 2 区より 3 個出土している。いずれも地表より 80cm の未分解泥炭層中からの出土である。水田耕作土が二時期にまたがるように上下に重なって層を成している下層からの出土であり、最近のものでないことは出土地点によって判然としている。

同地点からの土器片は、坏口縁部 2 点と摩滅していく弥生か土師器か判別不可能な土器片 2 点がいずれも、現在の水田耕作土下部より出土しているのみであり、田下駄との伴出土器片は皆無であった。こうした点から田下駄もやはり、弥生時代～平安時代に比定されるであろうと考えられる。

田下駄の役割は、深田中の作業に足をとらないために使用したことと、「刈敷き」といって田植前の水田に刈り取った草を耕土と混入し肥料とする。その耕作土と混入の後に草と土が一体化し平に敷きつめられるように、田下駄に繩をかけ両手でその繩を引っぱって水田内を歩き回る。というような多方面に利用されたようである。

杭は、T 2 区のナラ材使用の丸太と T 4 区から検出された畦道を築くための木柵列に打込まれていた杭があり、こちらはサワラ材を使用していた。丸太は前述したように鋭利な刃物で削

られた痕跡を持ち、サワラ材使用の杭とは大きくその様相を異にする。時代的差のあらわれでもあろう。

T 4 区出土の杭は、現存の長さが39cm～42cmを測り、断面の厚さ5cm前後ではほぼ統一された規格を呈している。かなりの巨木であったサワラを年輪に沿って剥ぎ取ったという様相を呈した割り方である。先端は鉄器を用いて尖らせた刃痕が顕著であり、実測図に示したように数十回の刃痕が一見して認められる。特に、20・21グリッドから検出された木柵列の杭は出土状態の断面図および平面図と共に出土Noを明記し、各々の杭実測図とNoを統一し全てを実測図に示してある。遺存状態および木柵列のあり方が観察できておもしろい。

3. 土器片

土器片は、1cm～3cmの細片がほとんどであり、明らかに時代の判別が可能だったものは、灰釉陶器、壺口縁部、系切り底部、第12図の拓影に図示した波状文をもつ弥生土器等である。その他、1cm程の剥離部とおもわれる土器片は、弥生、土師器の判別は非常に困難といわざるを得ない。箕輪遺跡の東方で天竜川の左岸に位置する三日町から産出される粘土は、金雲母を多量に含んだ良質粘土で、焼成が硬く破片のみでは、弥生と土師との区分は難しい。繩文時代よりこの良質粘土で土器製作がおこなわれていたことは、先の上の林遺跡の調査によって判明している。

また、これ等の土器片の出土は、現在の水田耕作土の下部およびその直下の層よりほとんどが出土している。灰釉陶器、壺口縁、底部等の土器片は、10世紀～11世紀に比定される律令制国家体制の変遷過程において生じた、自墾地系莊園、さらに寄進地系莊園へと発展する莊園制の枠組みの中に組み入れられた社会構造の中で生きた人々の証である。

そして、弥生土器と判別できたかすかに波状文の認められる土器片1点は、T 3 区からの出土であった。地形的に微高地をなす地帯で現在住宅が増加しつつある。水田に適した地帯の西方の微高地に集落を営んだためと考えられる。

昭和57年度に引き続いて実施される調査は、過去の遺物出土地点から判断して、住居の存在は認められず、より水田地帯へと入ってゆくものとおもわれる。周囲の水田の稲の生育状態を考え、よりよい調査を行なうためには、水田に水を切った後の調査が最も望まれる。本調査の教訓を生かし、検出した木柵列から水田址の復元が解明されることを願って、簡単ではあるが本調査のまとめとしたい。

最後に、箕輪遺跡の発見に貢献的に努力された、小川守人氏をはじめ故小池修兵氏、故藤沢宗平氏の業績をたたえ、本書を捧げる。

(島田 恵子)

第2節 既出遺物

箕輪遺跡出土の既出遺物中、最も特徴的なものとして木製品がある。この木製品について語る時各種木製品を採集し、記録しながら今日まで大切に保管された、故小池修兵氏・小川守人氏の両氏を忘ることはできない。木製品遺物のみでなく、今日の箕輪遺跡の存在はお二人によつて採集された遺物や記録を除いて語ることはできない。昭和27年当時から土地改良事業が終了するまでの間、お二人が本遺跡に注がれた情熱は大変なものであったと思われる。既出遺物として図示した各種の木製品は、そのほとんどが両氏の採集されたものである。これをいくつかに分類し、それぞれに簡単な考察を加えてみた。

1. 木 製 品

イ) 農耕に関するもの

木製農耕具の代表的なものとして、鋤・鎌があげられる。まず、鋤については形態、機能等によっていくつかに分類される。本遺跡より出土したものの中、第42図2は、平鋤の部類に入る。全長22cm、最大幅6.6cm、厚さ2.8cmを測り、先端部が尖っている。頭部に直角に孔があけられている。孔は、 $6.5 \times 3\text{cm}$ の長方形を呈している。着柄の復元図を第42図中に図示してあるが、水田耕作土の耕起に多く使われたものと考える。

鎌（第42図1）は全長32cm、最大幅12cm、厚さ1.8cmを測る。鎌も形態と機能によって分類することができるが、柄と身が一本で作られているものと、着柄するものとに二大分される。本例は着柄して使うもので、身頭部に $6.5 \times 5\text{cm}$ の柄孔が設けられている。柄孔は刃先面との角度が約150度にあけられている。この角度で着柄すると鋤としては使用できない。そこでスコップのような状況で使われ、土木作業に有効な道具であった。頭部のくびれは身を柄に固定させるための縫がかりであろう。鎌先は丸味をおびながら少し尖っており、振り返し使用したことを物語るように刃先が摩滅している。

田下駄は、本遺跡からかなりの数（約15個）出土している。第40・41図もその一つである。明らかに一対をなすと思われるものはない。大きさは2種類に分けられる。形はどれも長方形を呈し、四角を落して形を整えており、それらの多くは素材を割って板状にしただけで、平面の仕上げ加工はほとんどされていない。鼻緒の孔の形は、長方形、楕円形等がある。なかには繋づれで孔が摩滅して円形に変形しているものもある。これ等の田下駄は溝田における田作りや、収穫作業時においては必需品であった。

田舟は、橋詰地籍から出土したもので、全長112cm、幅39cm、深さ15cmを測るもので、一本を抉って作られている。一方の端に二個の小孔があり、ここに繩を通して曳いたのであろう。機

能としては田植時には稻苗を、収穫時には刈り取った稻穂を、あるいは肥料その他の運搬に使われたことが考えられる。いつの時代のものか決定し難いが、少なくとも板を打ち付けて作るようになる以前のものであることはいうまでもない。一本作りから箱型田舟に変わったのはいつ頃かはっきりしないが、木製遺物中において最大級のものであり、県下において他に出土例のないところから貴重なものである。

本遺跡出土の木製農耕具についての状況を記したが、これらの農具の製作や保有はどのようにになっていたのであろうか。農耕具の材として出土したものを見る限りでは、クリ、サワラ、ヒノキが上げられる。一帯におけるこれ等の原木調達は容易にできたものと考えられる。この原木からの製作工程であるが、作られたものの（遺物）を見る限りでは、鉄器による製作である。鉄器が広く普及するようになった時期と、木工具として石器が使われていた時期においては、当然農具の生産量は違ったであろう。そのため、初期の農耕社会においては各住居で一通りの木工具を揃えていたとは考えられない。また鉄器の普及もそれほどではなかった時期においては、農工具の製作はある程度、集落単位で集中的に製作されたのではなかろうか。その後の鉄器の普及によってからは、水田耕作を行なう単位である各住居別に行なわれたことが充分考えられる。このようにして製作された木製農耕具の保有は、各住居間で所有されていたと推測される。しかし、開墾などで新らしく水田を開く土木工事はある程度集落的な集団作業が実施されたものと考えられる。そうした用具については、集落で保有したのではないだろうか。これらの農耕具によって水田を開き、耕地を拡大し、農業生産力を高め、経済力が高まることにより、集団の大きな力ができていったのであろう。このエネルギーは北部伊那谷の中心的な力をもつた集団の出現となっていくのである。

四) 祭祀、信仰に関するもの（木製模造品）

古代における模造品は、その材質のちがいによって、石製品、土製品、金属製品、木製品などに分けることができるが、本遺跡出土の木製模造品（人形、馬形）、について考えてみる。

人形は木を削って、人間を表現したもので、棒状の木に顔を刻んだや立体的なものと、扁平な短冊状の板材を切り欠いて、全身を表すものがある。英輪遺跡出土のものは後者で扁平な板状のものである。比較的形の整っているものについて平均的な大きさを記すと、全長11~12cm、幅2.5cm、厚さ2mmほどでいずれも頭部を山形に削り、肩部の切り欠きが顔の上方から大きく切り欠いて肩の線を水平に近くしており、なで肩および怒り肩状を呈している。この製作にはかなり鋭い刃物を使用していることが伺われる。

顔の表現方法には墨書き・刀物で刻む場合、両方を併用する三方法があるといわれている。本例は刻みで眉、目、鼻、口を形作っている。次に、遺跡内における出土場所であるが、人形は

大清水地籍の湧水地付近からである。他の遺跡における出土例をみても、湧水地、井戸跡、水路跡などで、いずれも水に関係をもった場所である。木製人形が多数発見されている平城宮跡では、人形は禊（みそぎ）や祓（はらい）に用いる祭祀具のひとつで、これを撫でたり、さすったりして身の穢（けがれ）を移して水に流し去る、形代（かたしろ）的な使われ方をしたと考えられている。箕輪遺跡の場合も同様な意味をもっているものと思われ、それらの願いをこめた人々銘々が人形を製作し、それを用いた祭祀の文化があったのである。本文65ページでその祭式である「大祓」の義を具体的に記述してある。

本県における唯一の出土例である人形を大切にし、後世に伝えなければならない。

馬形も大清水地籍から出土している。馬形には、裸馬を表わしたものと鞍を置いた飾り馬を表現したものがある。本例は、背に鞍を表現した例として非常に数少ないものである。目などの表現には刻みを行なっているが、他の例としては墨書きによって目や手綱を表わすものもある。

昭和29年、土地改良事業が進行中に現地を視察された大場繁雄博士は、これを板製の馬形と断定された。古くは生馬を祭祀品としたことから、次第に形式化し、近世に至って絵馬に変化したことを論じ、本例はその過渡的な形態を意味するものである。とされた。⁽¹⁾

第47~50図に、木串を示してはあるが、木串は頭部を山形に切り、他端を細く削ったものである。全長6~26cm、巾0.5cm~1cmを測る。この木串に類似するもので、大型のものが大清水地籍から出土している。長さ67cmを測り、頭部が丸くなり、首部にくびれを作っている。これは木串の範疇に入るべきか、又、頭部の状況からして人形の部類とすべきか判然としないが、⁽²⁾出土当時遺物を調査された藤沢宗平先生は、これを人形に類似するものとして考えられた。

これにより、人形にも大きさに変化があることを示された。平城宮跡の調査においても1mを越す大型品が出土していることを考えて、これを人形の範疇うどとすることもできる。これら各種の木製模造品の製作年代であるが、平城宮跡などの調査では、同種類においても形態により多少の年代差があるとしているが、およそ7~9世紀の間に製作され、それを使用する祭祀文化が地方へ伝播したものと考えられる。人形の形態を細かに観察する時、平城宮跡出土の人形と非常によく似ている。中央で製作された人形そのものが、この地へ伝わり、それを見て製作したのであろうか。このような中央の文化の伝播には東山道が大きく関係したと思われる。

ハ) 木欄杭・矢板

出土木製品中最も多いものが木欄列の杭であり、遺跡のほとんど全域から出土している。出土状態は、旧井筋の片側または両側に打ち込まれ、水路壁を強固にする役目をしている。その他としては、畦を強くしたり、水田の地下あげ工事の際や、道路敷等各所に使われている。打

込まれている状態は、使用目的や土地の軟弱度合などにより粗密の差がある。木柵の材質はほとんどが「サワラ」で、それは原木の大きな丸太をいくつにも割って、5~7cmの角材にしてから先端を金属器で鋭く削り尖らせている。中には腐蝕を防ぐためか、表面を焼いてから使用したと思われるものもある。わずかではあるが割った栗材もある。杭の長さや径の違いもかなりあるが、これは使用した地質が最も影響を及ぼしたものである。平均的にみて40~50cmの範囲と、60~70cmの二群に分けることができる。昭和55年に実施した確認調査時と今回の調査時に出土したものは、40cm前後で細いものが多かった。昭和27年当時の状況において、その出土量は数万本に達したといわれ、木柵列の総延長は4km余に及んだと報告されている。未だ土中に埋れている木柵杭は数の予想もできない程である。これは、時期的に一時期に設置されたとは当然考えられず、古くは弥生時代から近世に至るまで絶えず木柵を築き、その数が増していくものと思われる。このような大規模な工事をしながら水田の拡大に労力を費した古代の人々の力は、やがて王墓古墳を造る経済力となり、中世の城へと発展する源となったのではないだろうか。

矢板の出土は2点だけである。一つは長さ50.5cm、最大幅17cm、厚さ平均2.8cm、他の一つは長さ52.7cm、最大幅19.5cm、厚さ3.4cmを測る。二つ共に頭部が多少腐蝕しているが、製作時においては現長よりもかく長かったものと推測する。木柵と同じく「サワラ」材で、材の中心に近い部分を使っている。長さの中間あたりから先端に向って、わずかに丸味をつけた、V字状に削られている。南側縁の切り口はなかなか鋭く削られている。本例を見ると静岡県登呂遺跡出土の矢板と非常によく似ており、登呂遺跡においては、矢板は水田の畦を強化するのに使い多量に出土している。箕輪遺跡においては出土が2点だけというのは疑問である。南箕輪に近い橋詰地区からの出土である。

(柴 登巳夫)

註1 大場磐雄 「上伊那郡箕輪町発見の祭祀遺物」 伊那路 昭和39年1月

註2 藤沢宗平 「長野県上伊那郡箕輪遺跡について」 信濃7-2 昭和30年2月

2. 食物残渣

木製品遺物の他に、多量の食物残渣（主として種子類）が発見されているので、その種類を記す。

炭化した米、とう、おにぐるみ、ひめぐるみ、くり、もも、うめ、すもも、あんず、かき、ゆうがお、麻の実、なら、どんぐり、その他豆類と思われるものが発見されている。これ等は沼地のアシを多量に混入した泥炭層中に限られて発見された。木製品遺物と同じくこれ等の時代を細かく分析することはできない。

(柴 登巳夫)

3. 遺構

多種多量の遺物が出土した箕輪遺跡も本格的な調査が始まったのは、昭和55年度からである。その調査も広大な箕輪遺跡の微々たる一部であるため、各地で見られるような水田の形や足跡、住居址などの発見は、地質的な悪条件により困難といわざるを得ない。

しかし、本年度の調査によって検出された2箇所の木柵列は、明らかに水田区画の畦を示すもので、引続いておこなわれる57年度の調査によって、当時の水田址の区画が復元される可能性も見えてきている。

昭和26年度からの土地改良工事中に、御室田、曾根田からは住居址に伴う炉と思われるものが各1箇所づつ発見されている。その他、焚火跡と思われるものが御室田から8箇所、曾根田から1箇所発見されている。その他、炭や灰が多量に混じった土層があり、これ等のことから考えても遺跡内に住居址があったことが予想される。それらの地域はいずれも周囲より少し高い地帯で、比較的乾く地であること、耕地が浅く、砂利層が高いことの条件が共通している。今後、こうした条件の地帯が調査されたならば、住居址の確認も充分予想されるところである。そして、箕輪遺跡と上伊那郡の古代社会の解明をより一層明確にする糸口ともなるであろう。

(柴 登巳夫)

引用参考文献

1. 箕輪史研究会 「箕輪遺跡報告」 箕輪史研究資料第二集 昭和29年3月
2. " " 「箕輪遺跡中間報告」 " " 第三集 昭和29年9月
3. 藤沢宗平 「長野県上伊那郡箕輪遺跡について」 信濃7-2 昭和30年2月
4. 藤沢宗平 「箕輪遺跡にみる農業と文化」 農業信州 昭和29年6月号
5. 大場磐雄 「上伊那郡箕輪町発見の祭祀遺物」 伊那路 昭和39年1月号
6. 林 茂樹他 「箕輪遺跡」 箕輪町教育委員会 昭和55年
7. 日本考古学協会編 「登呂」 前編 昭和53年3月
8. " " 「登呂」 本編 昭和53年3月
9. 杉原莊介 「登呂遺跡」 昭和34年10月
10. 森 豊 「登呂遺跡」 昭和54年2月
11. 上原真人 「木製人形」 月刊文化財 昭和56年11月
12. 柴登巳夫 「箕輪遺跡出土の人形」 伊那路 昭和57年3月
13. 群馬県立歴史博物館 「発掘された古代の水田」 昭和55年7月
14. 上毛新聞 「古代のロマン—日高遺跡レポート」 昭和53年2月24日～2月27日
15. 町田 章 「木器の製作と役割」 日本考古学を学ぶ(2) 昭和54年8月
16. 下條信行 「弥生時代の農業技術の発展」 日本考古学を学ぶ(2) 昭和54年8月
17. 池田亀鑑 「平安時代の文学と生活」 昭和51年7月
18. 山中 裕 「平安朝の年中行事」 昭和47年6月
19. 佐藤魁信 「下伊那地方における土師器に伴う打石器について」 長野県考古学会誌 昭和43年10月
20. 長野県考古学会編 「弥生文化の東漸とその発展」 長野県考古学会誌 昭和43年10月
21. 千曲川水系古代文化研究所編 「櫛年」 昭和55年1月
22. 友野良一他 「大原第二・第三遺跡」 箕輪町教育委員会 昭和54年
23. 林 茂樹他 「澄心寺下遺跡」 箕輪町教育委員会 昭和55年
24. 丸山敏一郎他 「上の林遺跡」 箕輪町教育委員会 昭和56年
25. 由井茂也他 「周防畠遺跡」 佐久考古学会 昭和55年
26. 金子裕之 「古代の木製模造品」 奈良国立文化財研究所『研究論集』VI 昭和55年
27. 林 茂樹他 「木下北城遺跡」 箕輪町教育委員会 昭和52年
28. 林 茂樹他 「木下猿楽遺跡」 箕輪町教育委員会 昭和51年
29. 林 茂樹 「上伊那郡の考古学的調査」 総括編 昭和44年
30. 上伊那郡誌刊行会 「上伊那誌」 歴史編 昭和40年

第6章 結語

箕輪遺跡は、上伊那郡箕輪町及び南箕輪村にまたがり、天竜川右岸の沖積地に展開する大遺跡である。大正年間にすでに打石斧が出土したことが記録されているが、縄文時代晚期から近世までの長い期間にわたる広範囲の遺跡で、しかも、県下では数少ない水田遺構を中心とする低湿地遺跡であることが確認されたのは、地元の小池修兵氏・小川守人氏らの努力によってであったことは、本文でも再現してきたところである。小池・小川両氏をはじめ地元の関係者が、埋蔵文化財に対する住民の理解と关心が今ほど高くない30年前に、町当局・工事関係者の理解と協力があったといえ、この広範囲にわたる遺跡の調査を、工事の進行するなかで実施し、多くの遺物を採集し、遺物や木柵列の出土状況等を記録され、報告書を刊行された努力に敬意を表したい。

この発見により、箕輪遺跡は学界の注目するところとなり、藤沢宗平氏・大場磐雄博士・岩崎長思氏らも大きな関心を示されているが、なかでも特に藤沢氏は度々遺跡を訪れ、箕輪遺跡発見の意義・今後の研究課題などについて示唆にとんだ指摘をされている。

その後、30年近くの間、箕輪遺跡の学術調査は実施されていなかったが、昭和55年度から、国道改良工事に伴う事前の発掘調査が実施されることとなり、本年度はその第2年次の調査である。調査は道路建設予定地という限られた狭い範囲のものであり、とうてい遺跡全体の状況を把握するには至らないが、本文及び考察に記述したごとく、田下駁の出土状況、木柵列の検出によりその構造の状態・土層関係がつかめたこと、土層の堆積状況が地域によって大きく異なっており、複雑な様相を示していることなどが明らかとなり、遺跡の謎を解くいくつかの手がかりを得ることができた。調査は来年度も継続される予定であるが、さらに新しい発見があるものと期待される。

箕輪遺跡一帯にも、近年、工場や住宅の建設がすすんでいるが、国道バイパスの建設により、それがさらに進行し周辺の様相を大きく変化させていくことも明白である。箕輪遺跡が学界に注目されて以来30年、今だに何もわかっていないというのが事実であろう。今回のように工事に先立って発掘調査を根気よく続けていくことと合わせて、文化財保護の立場から、総合的調査を計画的に実施していくことも急務ではないだろうか。それには、調査体制の問題・調査費の問題などいろいろな困難もあるだろうが、関係諸機関の協力と努力によって、すこしずつでも前進させていくことが、先駆的努力、先駆者が遺跡に注いだあなたかいまなざしにこたえる唯一の方法であると信じている。

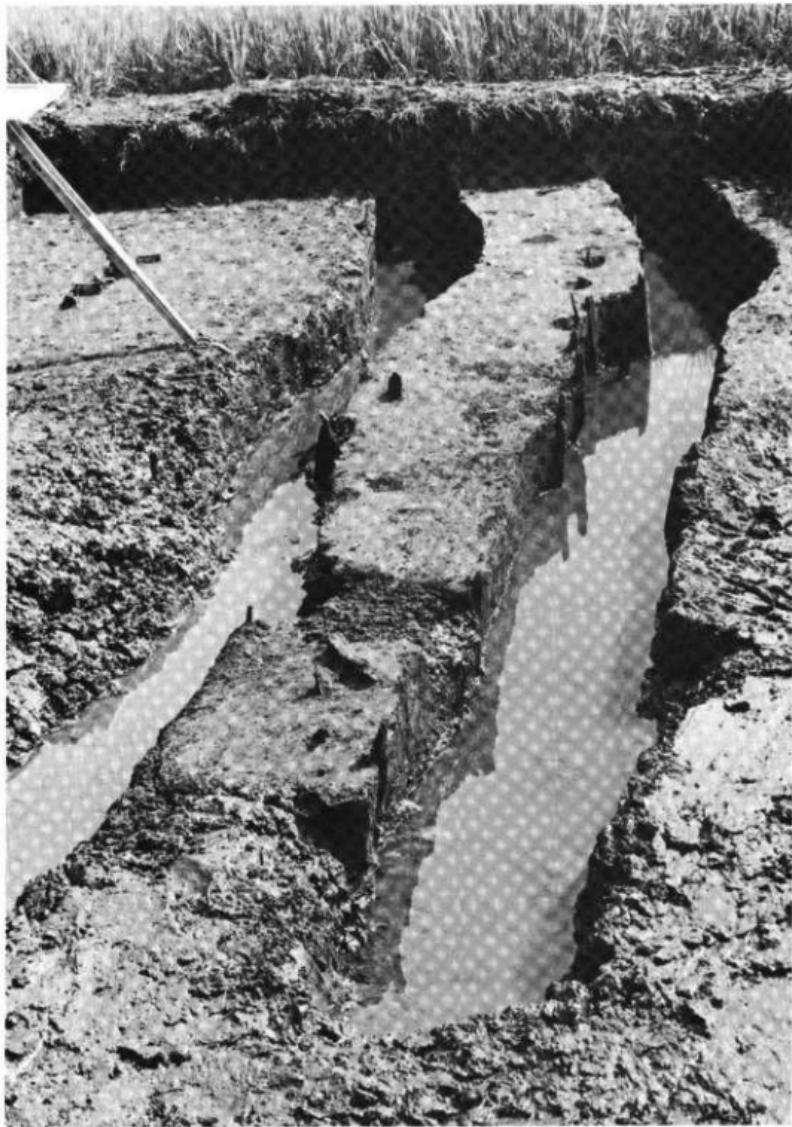
最後に、限られた期間の中で、しかも周囲の水田に水が一番必要な時期、泥と水との関係といった悪い条件のもとで発掘調査を継続してくださった調査団諸氏、特に、上の林遺跡の発掘調査と報告書の刊行を併行して行なうというきびしい状況の中で、精力的に作業をすすめられた島田恵子・山内志賀子・古屋公彦の各氏の労が大であったこと、箕輪町・箕輪町教育委員会・箕輪町郷土博物館のみなさま方が、調査に全面的に御協力くださったことをここに記して、厚く御礼申しあげます。

(團長 丸山敏一郎)

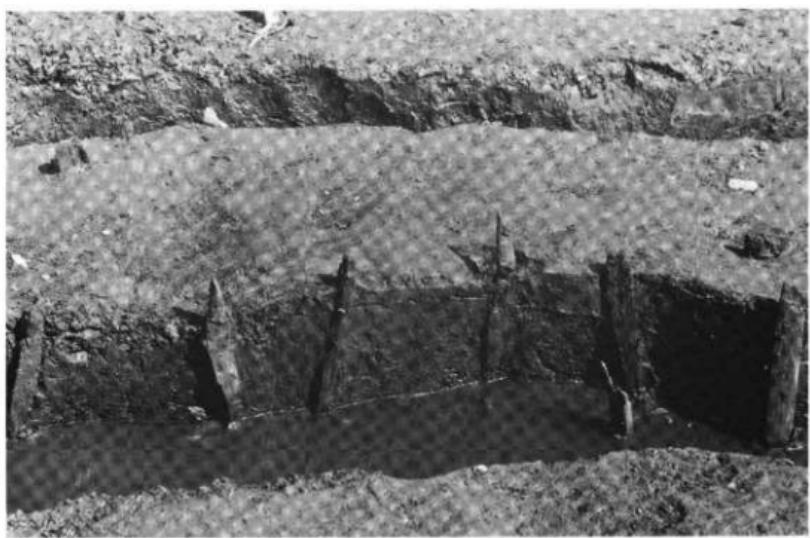
図 版



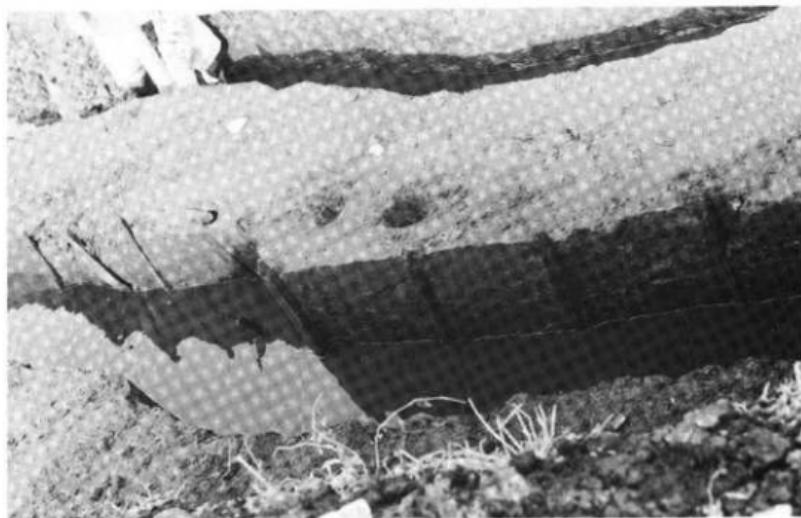
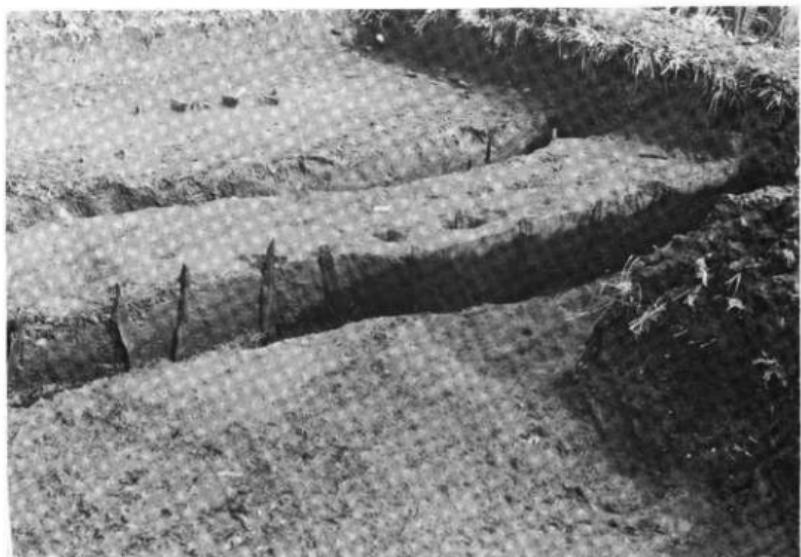
1. 黄緑遺跡調査区遠景



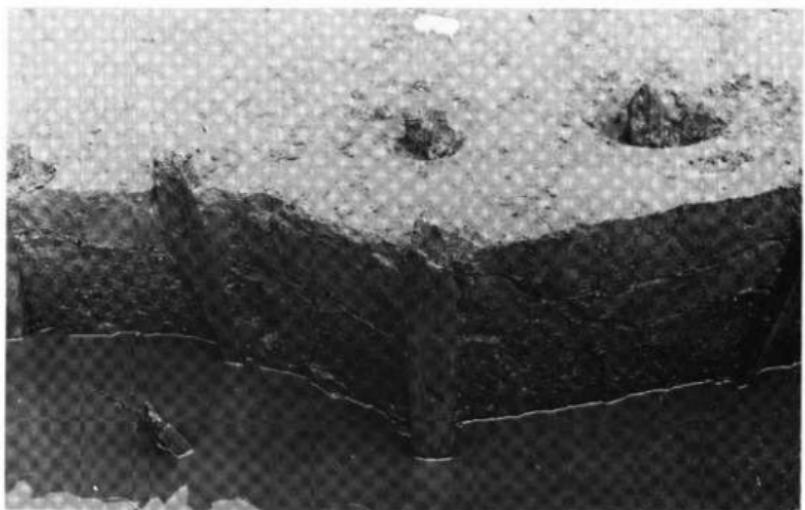
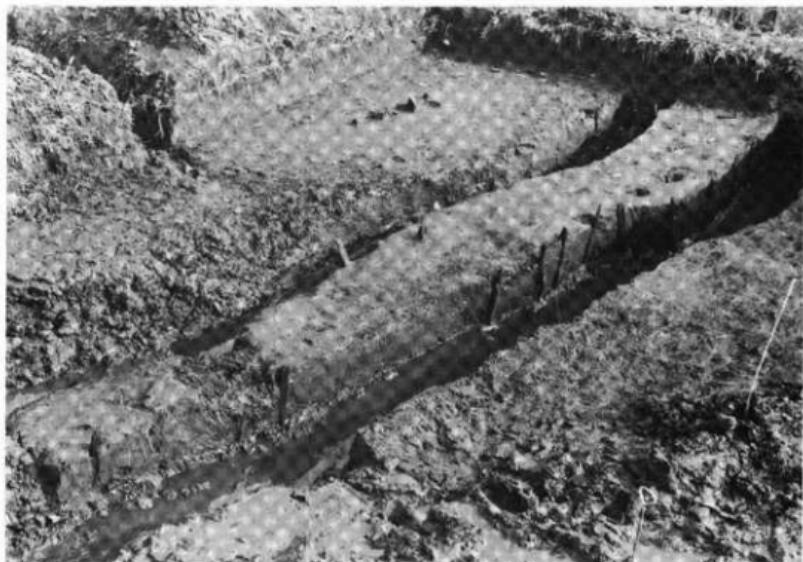
1. T4区出土木柵列全景(20-21グリッド)



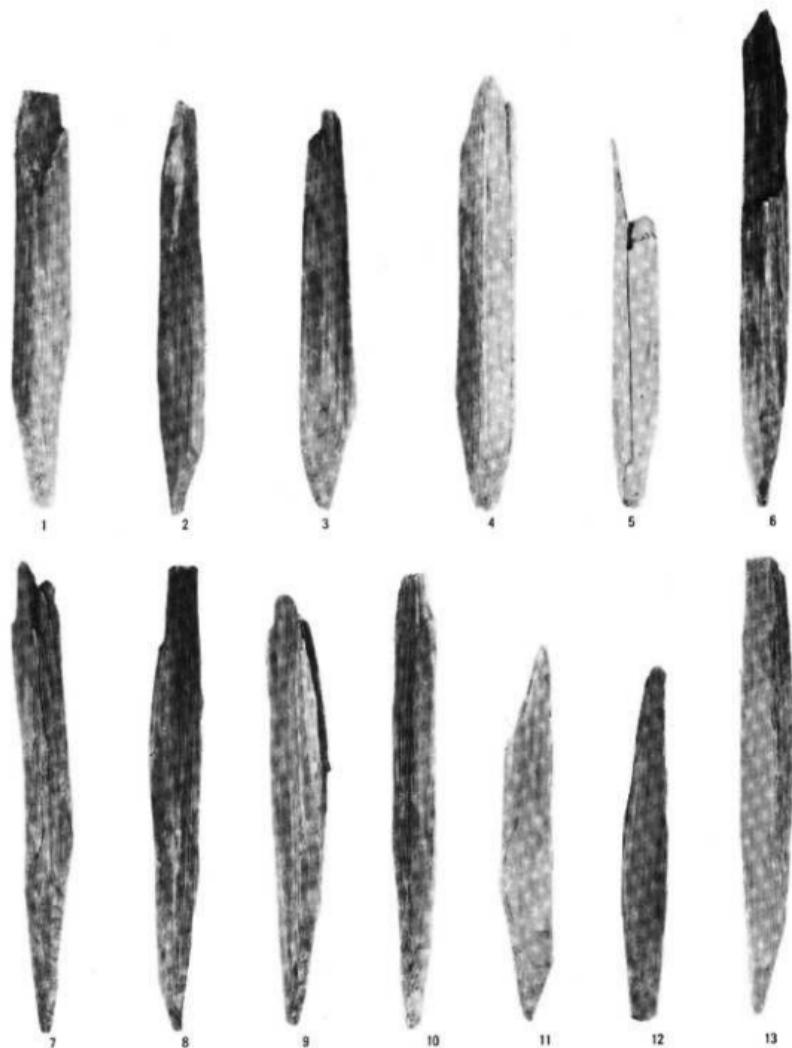
1. T4区出土木櫛列の杭出土状態(20・21グリッド)



1. T4区出土木柵列の杭出土状態（20・21グリッド）



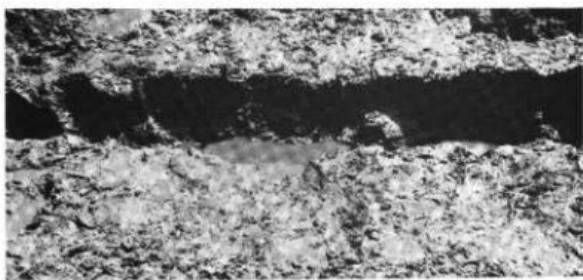
1. T4区出土木柵列の杭出土状態(20・21グリッド)



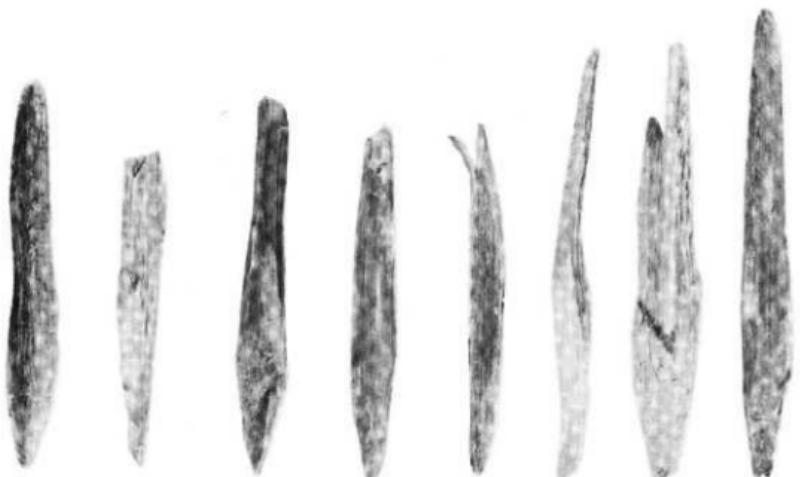
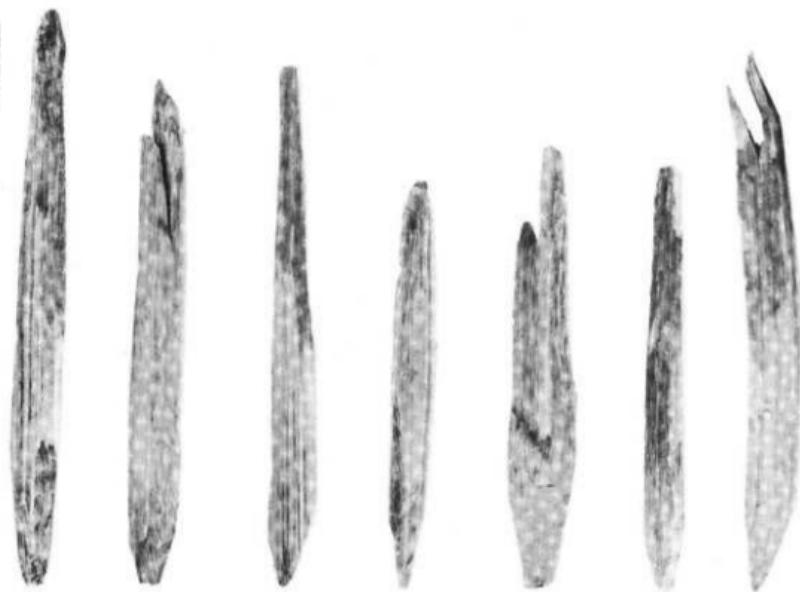
1. T4区出土木構列の杭 (20・21グリッド)



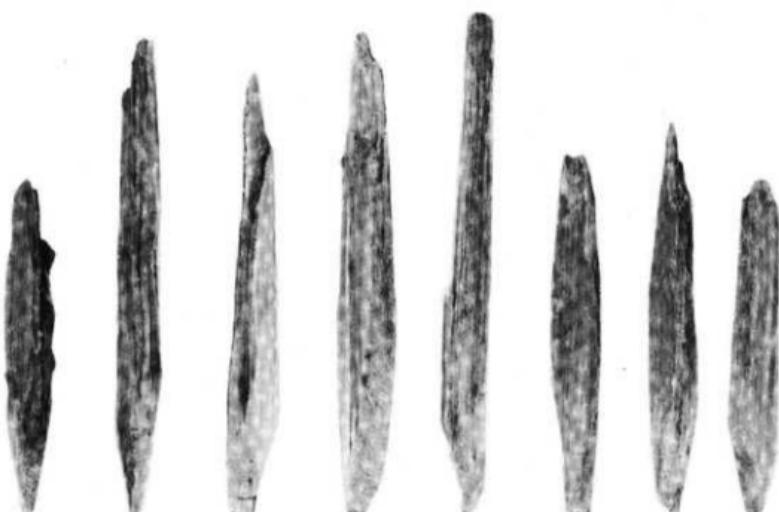
1. T4区出土木構列の杭 (20・21グリッド)



1. T4区出土の木構列（9・10グリッド）



1. T4区出土木構列の杭(9・10グリッド)



1. T4区出土木構列の杭 (9・10グリッド)



2. T2区出土の杭



1. T2区出土の田下駄出土状態



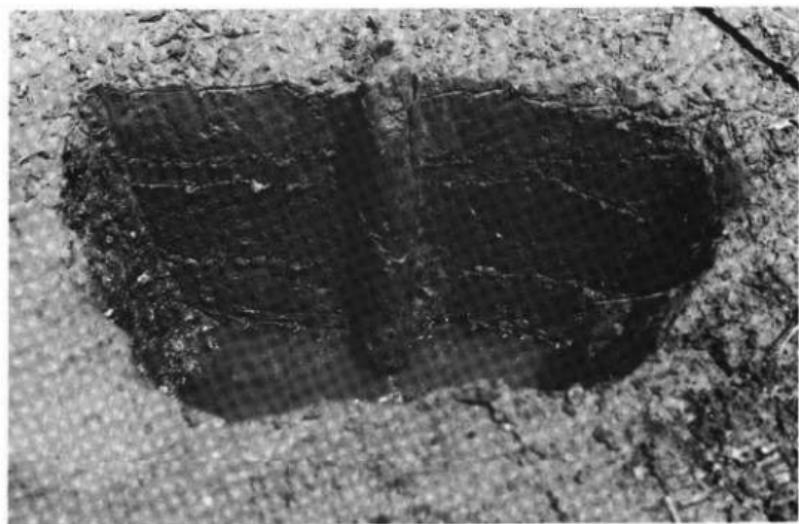
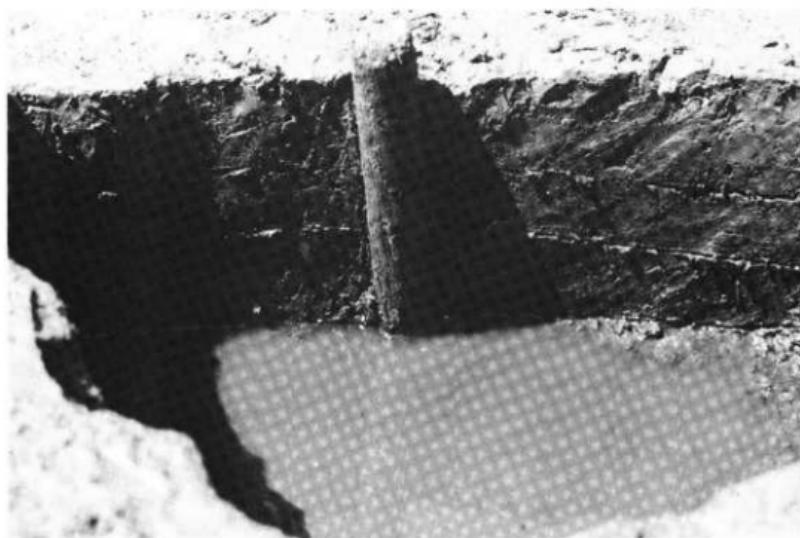
1. T2区出土の杭と土師器片出土状態



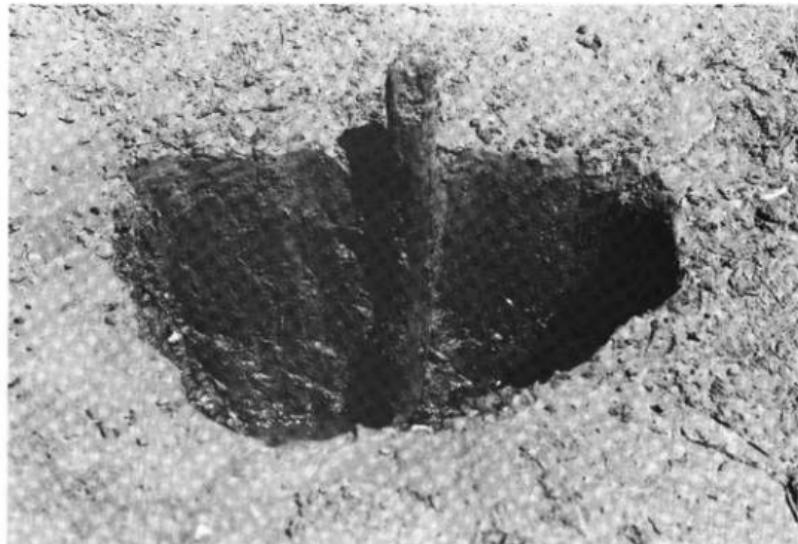
2. T2区出土の田下駄出土状態



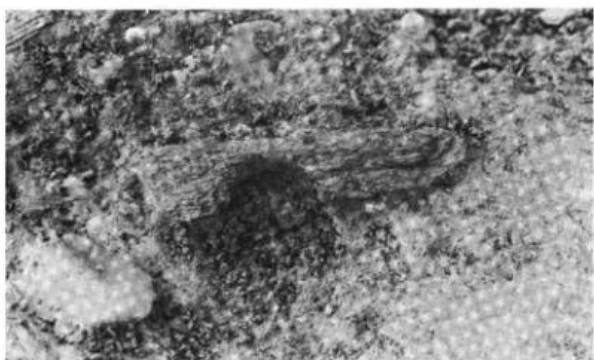
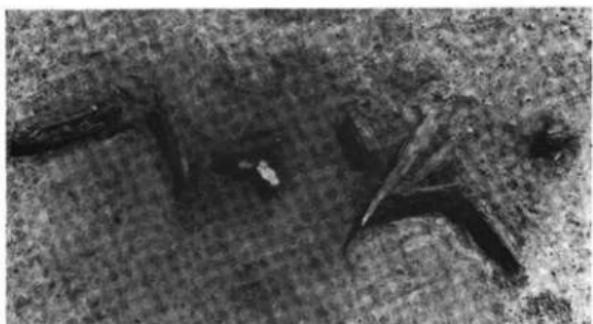
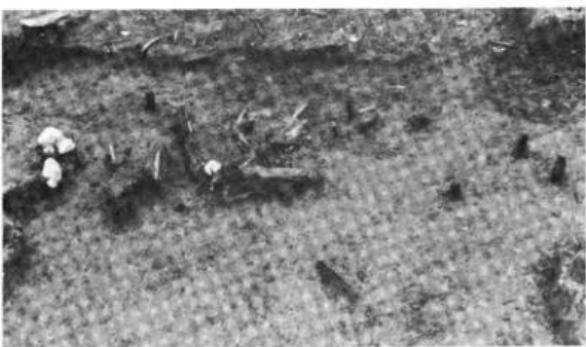
1. T2区出土の田下駄 (1/2)



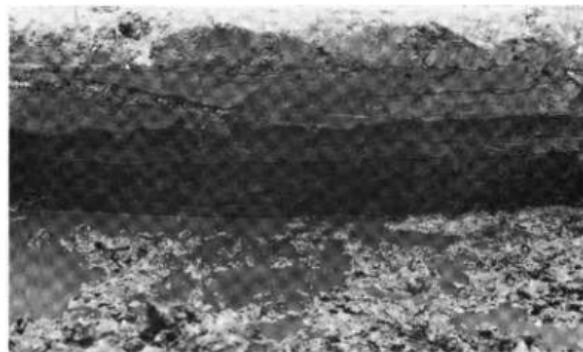
1. T2区の杭出土状態



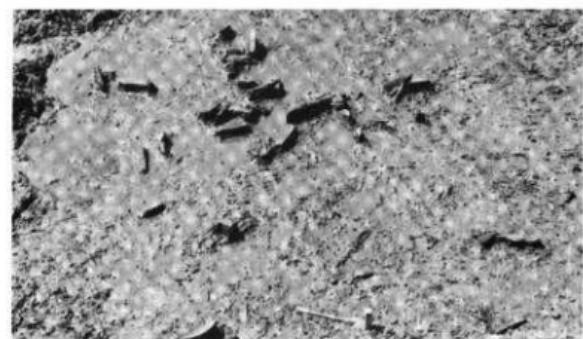
1. T2区の杭出土状態



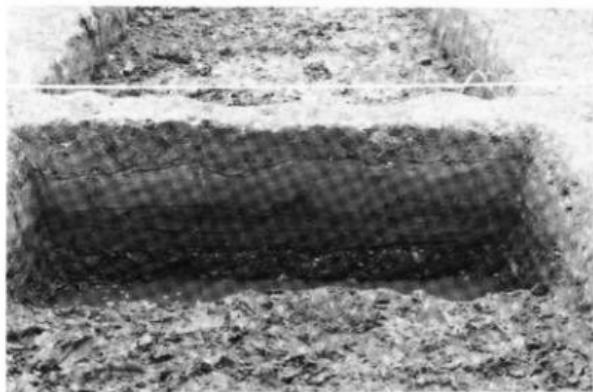
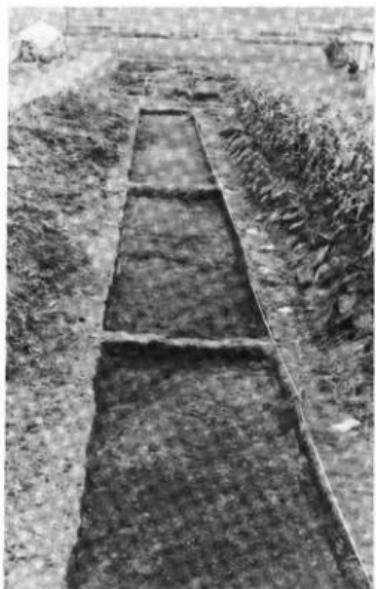
1. T2区の木片出土状態



1. T5区の層序



2. T3区の木片出土状態



1. T5区の掘り下げ状態